

吉田南遺跡(足田地区)・北王子遺跡

—県立看護大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成7年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、兵庫県神戸市西区玉津町吉田・明石市北王子町に所在する吉田南遺跡・北王子遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は兵庫県保健環境部の委託を受け、兵庫県教育委員会が調査主体となり、平成元年度から平成3年度にかけて実施した。発掘調査実施年度、調査担当者及び遺跡調査番号は後述している。
3. 整理調査は兵庫県保健環境部の委託を受けて平成4年・5年・6年度に兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。
4. 発掘調査・整理調査に係わる経費は全て兵庫県保健環境部が負担した。
5. 遺構写真は調査員が、遺物写真は、株式会社サンスタジオに撮影を依頼した。また、金属製品の保存処理については、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて加古千恵子が実施した。
6. 本書の編集は西口が担当し、表具冴子の補助を得て、実施した。
7. 遺構番号については番号の前に各遺構前の表示をつけ、第1面の溝1であるならば溝1001と表記している。
8. 遺物の番号については図版・写真を問わず、また、種類を問わず、全て通し番号としている。
9. 本書に使用した方位は特に断りのない場合については座標北である。使用した座標は国土地理院第V系である。
10. 本書に掲載した図版のうち、第1図は国土地理院発行の1/25000(明石)の地図を使用しており、図版第1は、国土地理院撮影の航空写真を利用している。
11. 原稿執筆分担は以下の通りである。

種田淳介 第1章、第2章第1節、第4章第3節3・6、第5章第4節	西口圭介 第2章第2節・第3節、第4章第1節・第2節1・3・同第3節4・7、 第5章第1節・第2節・第3節、第6章
長濱誠司 第3章・第4章第2節2・第3節2	
12. 山土した遺物については全て兵庫県教育委員会で保管・管理している。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査と整理の体制	5
第2章 調査の概要	
第1節 平成元年度調査の経過と概要	7
1 確認調査（XIV～IX～レンチ）	7
2 全面調査	8
第2節 平成2年度調査の経過と概要	8
第3節 平成3年度調査の経過と概要	9
第3章 遺跡の環境	11
第4章 A地区の調査	
第1節 基本層序	13
第2節 各遺構面の概要	17
1 第1面の概要	17
2 第1面の遺構	17
3 第2面の概要	45
4 第2面の遺構	45
5 第3面の概要	49
6 第3面の遺構	49
第3節 遺物	56
1 第1面の遺物	56
2 第2面の遺物	93
3 第3面の遺物	96
4 墨書き器	99
5 土錐	99
6 金属器	100
7 石器	100
第5章 B地区の調査	
第1節 基本層序	103
第2節 B-1地区の調査	104

1	土層堆積	104
2	第1面の概要	104
3	第1面遺構	108
4	第2面の概要	112
5	第2面の遺構	113
6	第3面の概要	114
7	第3面の遺構	114
8	第4面の概要	117
9	第4面の遺構	117
	第3節B-2地区の調査	118
1	土層堆積	118
2	第1面の概要	118
3	第2面の概要	118
	第4節 遺物	120
1	遺構出土の遺物	120
2	包含層出土の遺物	128
	第6章 まとめ	129

表 目 次

表 1	A地区の基本層序一覧	1
表 2	B地区の基本層序一覧	103

挿 図 目 次

第1図	県立看護大学全景	2
第2図	各年度の調査地点位置図	3
第3図	吉田南遺跡・北王子遺跡の位置と周辺の遺跡	12
第4図	△地X土層断面図	14
第5図	A地区全体図(第1面)	15
第6図	溝1001土層断面図	17
第7図	溝1002一石五輪塔投入状況	19
第8図	扇形地A全体図	21

第9図	屋敷地A内土層断面図(1).....	23
第10図	屋敷地A内土層断面図(2).....	24
第11図	建物1001.....	25
第12図	建物1002.....	27
第13図	建物1003.....	28
第14図	建物1004・柱根.....	29
第15図	井戸1001.....	30
第16図	井戸1002～1004・集石遺構1001.....	31
第17図	井戸1002水溜.....	32
第18図	井戸1003水溜.....	33
第19図	井戸1004.....	34
第20図	集石遺構1002.....	35
第21図	集石遺構1001・井戸1004・埋没状況.....	36
第22図	溝1002(上)・溝1004(下)土層断面図.....	37
第23図	屋敷地B全体図.....	39
第24図	建物1005.....	40
第25図	建物1006.....	41
第26図	建物1007・溝1006・溝1007・犁跡.....	42
第27図	井戸1005・出土木製品.....	44
第28図	A地区全体区(第2面).....	47
第29図	A地区全体区(第3面).....	51
第30図	建物3001(上)・建物3002(下).....	53
第31図	A地区第3面南半部.....	54
第32図	溝1001出土土器(1) 土師器・瓦器他.....	62
第33図	溝1001出土土器(2) 無釉陶器.....	63
第34図	溝1001出土土器(3) 無釉陶器.....	64
第35図	溝1001出土土器(4) 施塗陶器.....	65
第36図	溝1001出土土器(5) 施塗陶器.....	66
第37図	溝1001出土土器(6) 施塗陶器.....	67
第38図	溝1001出土土器(7) 磁器.....	68
第39図	溝1001出土土器(8) 磁器.....	69
第40図	溝1001出土土器(9) 磁器・溝1002出土土器.....	70
第41図	溝1001出土木簡(1)	76

第42図	溝1001出土木簡(2)	77
第43図	溝1001出土木簡(3)	78
第44図	溝1001出土木製品(1) 食器・容器	79
第45図	溝1001出土木製品(2) 容器	80
第46図	溝1001出土木製品(3) 容器・栓	81
第47図	溝1001出土木製品(4) 装飾具・工具	82
第48図	溝1001出土木製品(5) 部材	83
第49図	溝1001出土木製品(6) 用途不明品・溝1004・溝1003出土木製品	84
第50図	溝1002・溝1004出土土器	86
第51図	溝1002出土一石五輪塔	87
第52図	屋敷地A内の柱穴山土土器	88
第53図	井戸1001・井戸1002・井戸1003出土土器・木製品	89
第54図	井戸1002 水溜転用の当物	90
第55図	井戸1003 水溜転用の臼	91
第56図	井戸1004出土土器・井桁	92
第57図	集石遺構出土土器	93
第58図	溝1006・溝1011・溝2003出土土器	94
第59図	第1面・第2面包含層出土土器	95
第60図	第3面溝凸上土器	97
第61図	墨書き土器	98
第62図	土 線	99
第63図	金属製品	101
第64図	石 器	102
第65図	B-1地区全体図・土層区	105
第66図	建物1001(上)・建物1002(下)	107
第67図	溝1008	109
第68図	土壤1001	110
第69図	溝1004	111
第70図	溝1006	112
第71図	第2面水口及び土器埋置状況	115
第72図	第3面水口・土器検出状況	116
第73図	B-2地区遺構配置図・土層断面図	119
第74図	溝1004出土土器(1)	122

第75図	溝1004出土土器(2).....	123
第76図	溝1004出土土器(3).....	124
第77図	溝1008出土土器	125
第78図	溝1006その他の出土土器	126
第79図	溝1009・溝2011他出土土器	127
第80図	B地区包含層出土土器・石壙・土縄	128
第81図	B地区出土の石器	128
第82図	第1章と2面の地割	130

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡周辺の航空写真(1)
- 図版 2 航空写真(2)
1. 遺跡の遠景(北から) 2. 遺跡の遠景(南から)
- 図版 3 調査区遠景(航空写真)
1. 平成3年度調査区遠景(南から)
 2. 平成2年度調査区遠景(西から)
- 図版 4 A地区(平成2年度)
- 第1面全景(航空写真)
- 図版 5 A地区(平成2年度)
1. 溝1001全景(南から) 2. 溝1001堆積状況(北から)
- 図版 6 A地区(平成2年度)
1. 屋敷地A遠景(南から)
 2. 屋敷地Aを区画する溝1002(東から)
- 図版 7 A地区(平成2年度)
1. 溝1002(東から) 2. 溝1002—石五輪塔検出状況
- 図版 8 A地区(平成2年度)
1. 屋敷地Aを区画する溝1004(西から) 2. 溝1004堆積状況(西から)
- 図版 9 A地区(平成2年度)
1. 屋敷地A内の遺構(北から)
 2. 屋敷地A内の遺構(西半部)
- 図版10 A地区(平成2年度)
1. 屋敷地A内の遺構(東南半部) 2. 池状落ち込み(北から)

- 図版11 A地区（平成3年度）
1. 屋敷地A内の遺構（北東半部）及び溝1004
2. 第1面の遺構（北から）
- 図版12 A地区（平成3年度）
1. 建物1002（南から） 2. 建物1001（東から）
- 図版13 A地区（平成3年度）
1. 建物1001根石 2. 建物1004柱根
- 図版14 A地区（平成2・3年度）
1. 梯上壇 2. 井戸1001（西から）
- 図版15 A地区（平成2年度）
1. 井戸1002・1003・1004（西から）
2. 井戸1003（西から）
- 図版16 A地区（平成2年度）
1. 集石遺構検出状況 2. 井戸1004の集石による埋没状況
- 図版17 A地区（平成2年度）
1. 井戸1002水溜（曲物）検出状況 2. 井戸1002断割
- 図版18 A地区（平成2年度）
1. 井戸1003水溜（円転用）検出状況 2. 井戸1003断割
- 図版19 A地区（平成2年度）
1. 井戸1004検出状況 2. 井戸1004断割
- 図版20 A地区（平成3年度）
第1面遺構全景（航空写真）
- 図版21 A地区（平成3年度）
1. 第1面全景（南から） 2. 第1面全景（北から）
- 図版22 A地区（平成2・3年度）
1. 屋敷地A周辺の状況（東から）
2. 屋敷地B及びその周辺の状況（北西から）
- 図版23 A地区（平成3年度）
1. 屋敷地B（西から） 2. 建物1005（西から）
- 図版24 A地区（平成3年度）
1. 建物1005柱穴の根石・礎板 2. 建物1005柱穴の根石・礎板
- 図版25 A地区（平成3年度）
1. 溝1011遺物・坑痕検出状況（西から）

2. 建物1006（東から）

図版26 A地区（昭和63年度・平成3年度）

1. 昭和63年度調査区の第1面全景（北から） 2. 井戸1005

図版27 A地区（平成3年度）

1. 建物1007及び犁跡（北から） 2. 建物1007（西から）

図版28 A地区（平成3年度）

1. 溝1013・1014（西から） 2. 溝1016（北から）

図版29 A地区（平成3年度）

第2面全景（航空写真）

図版30 A地区（平成2年度）

1. 第2面全景（北から） 2. 第2面全景（南から）

図版31 A地区（平成2年度）

1. 調査区北半の第2面検出遺構（北東から）

2. 同（南から）

図版32 A地区（平成2年度）

1. 溝2003・2004及び柱穴群（東から）

2. 溝2001・2002・2003（北から）

図版33 A地区（平成2年度）

1. 第3面検出の水田（調査区北東半）

2. 溝3001・3002及び水田

図版34 A地区（平成3年度）

1. 第3面検出の獣歯状遺構 2. 溝3001・3003

図版35 A地区（平成3年度）

1. 調査区南半第3面（西から）

2. 建物3001・建物3002及び住居址状遺構（南から）

図版36 B地区（平成3年度）

B-1・2地区全景（航空写真）

図版37 B-1地区（平成3年度）

1. 調査区南半第1面（北東から）

2. 調査区北半第1面（南から）

図版38 B-1地区（平成3年度）

1. 第1面全景（北から） 2. 方形周溝墓状遺構

- 図版39 B-1地区(平成3年度)
1. 溝1004(南から) 2. 溝1004土器検出状況
- 図版40 B-1地区(平成3年度)
1. 溝1006(北西から) 2. 建物1002(東から)
- 図版41 B-1地区(平成3年度)
1. 第2面全景(北から) 2. 第2面水田(南半)
3. 壺埋置状況 4. 第2面水口 5. 第2面水田(北西から)
- 図版42 B-1地区(平成3年度)
1. 第3面(南から) 2. 第3面(北から) 3. 第3面水口
- 図版43 B-1地区(平成3年度)
1. 第4面(南半) 2. 第4面(南から)
3. 土壙1001 4. 畦畔の土器埋置状況
- 図版44 B-2地区(平成3年度)
1. 調査区全景1(南から) 2. 土器検出状況
- 図版45 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版46 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版47 A地区 遺構山土の土器(溝1001)
- 図版48 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版49 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版50 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版51 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版52 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版53 A地区 遺構山土の土器(溝1001)
- 図版54 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版55 A地区 遺構出土の土器(溝1001)
- 図版56 A地区 遺構出土の上器(溝1001)
- 図版57 A地区 遺構出土の土器(溝1002・溝1004)
- 図版58 A地区 遺構出土の土器(溝1002・溝1004)
- 図版59 A地区 遺構出土の土器(柱穴・土壙・井戸・集石遺構)
- 図版60 A地区 遺構出土の土器(井戸・集石遺構)
- 図版61 A地区 遺構出土の土器(溝1011・溝1006・溝2003)
- 図版62 A地区 包含層出土の土器
- 図版63 A地区 包含層出土の土器

- 図版64 A地区 輸入磁器
- 図版65 A地区 瓦
- 図版66 A地区出土の埴輪・B地区包含層出土の磁器・石鍋
- 図版67 B地区 遺構出土の土器(溝1004)
- 図版68 B地区 遺構出土の土器(溝1004・溝1008)
- 図版69 A・B地区 遺構出土の土器
- 図版70 墨書き器(1)
- 図版71 墨書き器(2)
- 図版72 土鍤・石製品
- 図版73 金属製品
- 図版74 木簡(1)
- 図版75 木簡(2)
- 図版76 木製品(1)
- 図版77 木製品(2)
- 図版78 木製品(3)
- 図版79 木製品(4)
- 図版80 木製品(5)
- 図版81 木製品(6)
- 図版82 木製品(7)
- 図版83 木製品(8)
- 図版84 木製品(9)
- 図版85 木製品(10)
- 図版86 石造品

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

医学の進歩と高齢化社会を迎え、優れた医師のみならず從来にも増して資質の高い看護職が希求されるなか、兵庫県においては日本で初めての本格的な県立の4年制看護大学の設立が計画された。建設予定地は明石市の北方にあたり、県立成人病センターに隣接する、旧県立農業試験場の跡地である。

さて、この時期以前までに知られていた建設予定地内近隣に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地は、敷地の北西にあたる「吉田南遺跡」と、南に隣接する「北王子遺跡」である。

「吉田南遺跡」は、昭和50年から55年にかけて、神戸市教育委員会・吉田・片山遺跡発掘調査団が神戸市玉津環境センターの建設に先立ち数次にわたって発掘調査を実施している。その結果、弥生時代から鎌倉時代にかけての広範囲にわたる遺跡であることが判明し、とりわけ奈良時代後期から平安時代前期にかけての「明石郡衙」もしくは「明石駅家」と比定される建物跡や井戸、河道などが検出され、大きな成果をあげるものとなった。また調査当時より、遺跡は玉津環境センターの東南に隣接する県立農業試験場へと広がることが予測されていた。一方、「北王子遺跡」は、県立成人病センター建設にあたり、昭和55年から56年にかけて県教育委員会によって発掘調査が実施された。この結果、弥生時代から古墳時代、鎌倉時代の遺跡が発見されたのである。この段階では、調査地区が明石市に所在していたために、町名を採用して「北王子遺跡」と呼称しているが、「吉田南遺跡」ととの有機的な関連が指摘されていた。

このたびの県立看護大学建設予定地は、「吉田南遺跡」と「北王子遺跡」の間に位置することになる。

建設予定地となる旧県立農業試験場は、全体の敷地面積が120,000m²に及んでいる。この施設が加西市へ移転した後、兵庫県では跡地の利用計画を策定してきた。そして、昭和62年、跡地管理を担当する県農林水産部教育普及課の依頼を受け、県教育委員会が埋蔵文化財の有無、その範囲や詳細を把握するため確認調査を実施した。その結果、「吉田南遺跡」と「北王子遺跡」の広がりと考えられる遺構が直的にも層位的にも複相している重要箇所が判明するとともに、旧明石川の影響を著しく受けた遺構が削平された箇所も知りえた。

この成果を検討して県立看護大学の建設は、最重要箇所を避けた旧農業試験場の南西部に決定された。校地面積は約4万m²、校舎面積は約1.4万m²である。

県立看護大学の具体的な計画が発表されて以降は、県保健環境部と埋蔵文化財の取扱いについての協議が開始された。そして、昭和62年の確認調査をさらに深化させ、建設予定地内のよ

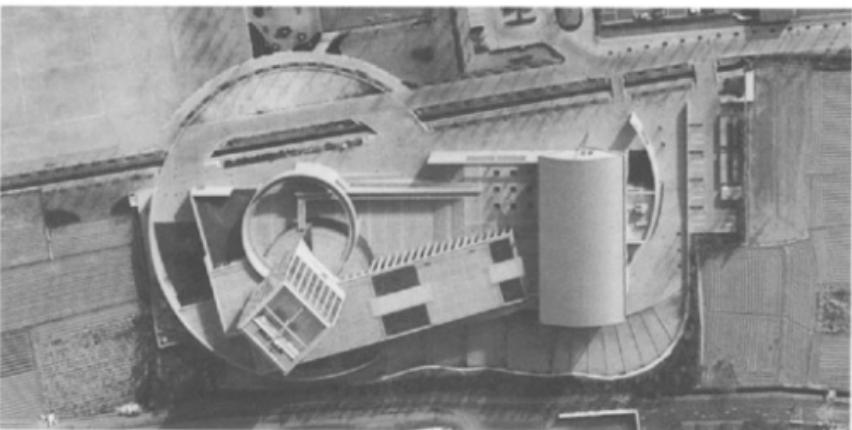
り詳細な埋蔵文化財の包蔵状態を確認することとなった。この目的のための調査は、平成元年に実施した。調査結果は、遺構面を3面検出して先の確認調査の結果を追認すると同時に、「明石郡衙」もしくは「明石駅家」と同時期と考えられる水田遺構の存在も想定された。こうして、建設予定の構造物などにより埋蔵文化財が損壊される部分の全面調査は不可避となったのである。

記録保存としての全面発掘調査は、確認調査と同じ年度の平成元年より実施し、平成3年に終了した。平成元年の調査は、当初設計の教育管理棟に該当する予定地の一部を行った。その後、大学の基本設計が変更となり、平成2年は校舎北部の高層棟を中心とする地域の調査を実施した。しかしさらに変更を余儀なくされ、平成3年は北部の追加部分と南部の低層棟、そして地下に埋設管が設置される箇所の発掘調査を実施した。またこの年は、県立成人病センター西の明石市域から大学への進入路となる部分の調査も行い、この道路部分については検出遺構面に砂を敷設して、保護を図った。

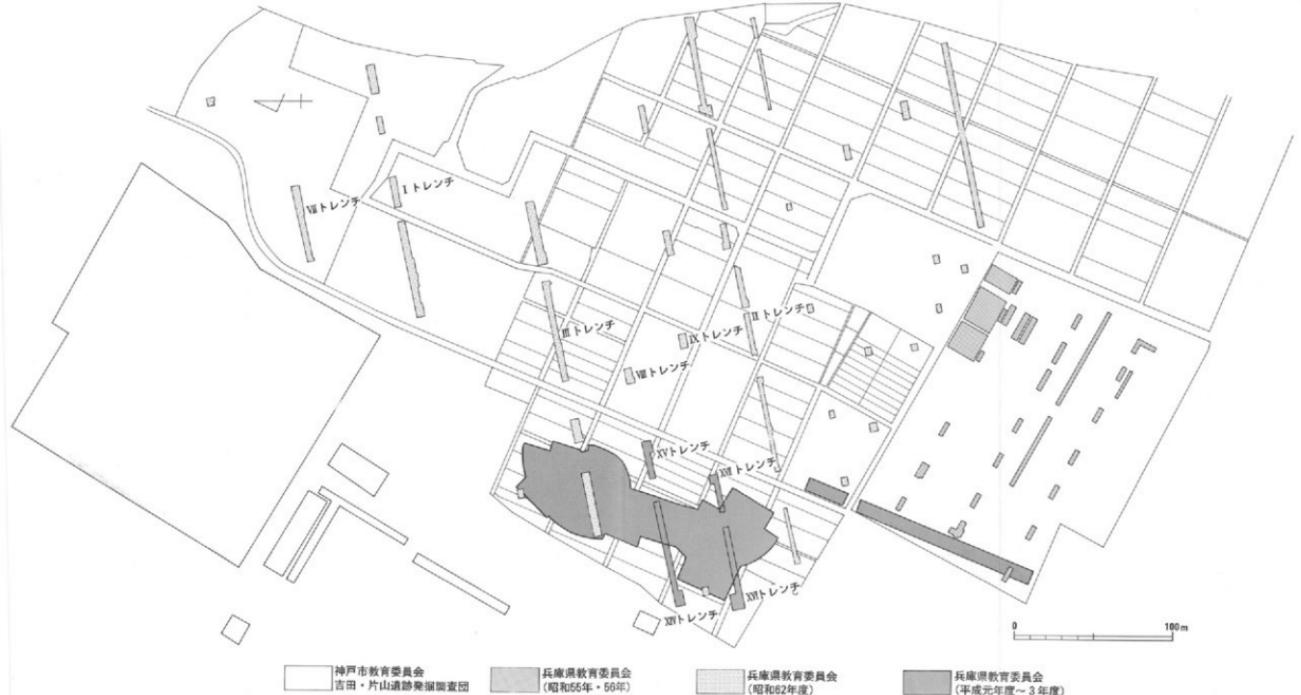
県立看護大学の建設工事は、平成3年の後半から開始され、4年に終了、そして平成5年4月1日に看護学部看護学科が開学して第一期生を迎える、社会福祉の向上に貢献しうる看護職及び将来の看護指導者の育成が始まったのである。

なお、調査の種別、期間、面積は以下のとおりである。

・平成元年度	確認調査	1989年7月11日～1989年7月31日	717 m ²
・平成元年度	全面調査	1990年1月22日～1990年3月23日	800 m ²
・平成2年度	全面調査	1990年10月29日～1991年3月26日	2,787 m ²
・平成3年度	全面調査	1991年5月11日～1991年12月28日	4,639 m ²



第1図 県立看護大学全景



第3図 各年度の調査地点位置図

第2節 調査の体制

発掘調査と整理作業は、兵庫県保健環境部の委託をうけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。発掘調査は、確認調査を平成元年度に、全面調査を平成元年度から平成3年度にかけて実施し、整理作業は平成4年度から平成5年度にかけて行った。そして、平成6年度に発掘調査報告書を刊行した。

発掘調査と整理作業の体制は以下のとおりである。

確認調査（平成元年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長／大江 刚

調査担当 主査／岡崎正雄

副所長兼調査第2課長／村上祐揚

技術職員／種定淳介

主査／池田正男

調査補助／高橋 学・今村直子

・全面調査（平成元年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長／大江 刚

調査担当 主査／西口和彦

副所長兼調査第2課長／村上祐揚

技術職員／種定淳介

主査／池田正男

調査補助／高橋 学

・全面調査（平成2年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長／内田隆義

調査担当 主任／種定淳介

調査第2課長／池田正男

技術職員／西口圭介

課長補佐／西口和彦

技術職員／長瀬誠司

調査補助／高橋 学

・全面調査（平成3年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長／内田隆義

調査担当 主任／種定淳介

調査第2課長／池田正男

技術職員／西口圭介

主査／水口富太

技術職員／長瀬誠司

調査補助／高橋 学・吉田 淳

・大崎敦史・後藤麻紀

・勝野 正・大岡由記子

・芳倉るり子・今村直子

・整理作業（平成4年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長／内田隆義

整理担当 主任／種定淳介

整理普及課長／松下勝

主任／西口圭介

課長補佐／小川良太

技術職員／長濱誠司

・整理作業（平成5年度）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長／池水義輝

整理担当 主査／種定淳介

調査専門員／小川良太

主任／西口圭介

主査／吉澤雅仁

技術職員／長濱誠司

嘱託職員／表具冴子・岡崎輝子

川上縁・広戸紀子

尾崎比佐子・宮瀬照代

石野照子・吉田優子

発掘調査では、関西建設工業株式会社・株式会社新井組・安西工業株式会社の協力を得た。調査期間を通じて兵庫県立成人病センターには終始お世話をいただき、また地元の方々も暖かく見守っていただいた。心より感謝申し上げます。

なお、遺跡の微地形に関しては立命館大学の高橋学氏、木籠の研究に関しては兵庫県立歴史博物館の小栗柄健治氏・小林基伸氏・松井良祐氏、近世陶磁器に関しては佐賀県陶磁資料館の大橋康二氏・森井伸幸、兵庫県立歴史博物館の筒井章一氏（当時）、大平茂氏、岡崎正雄氏、木製品については藤本史子氏に御教示を賜った。また、吉田南遺跡周辺の歴史については兵庫県立図書館の宮本博氏、近世遺跡全般については、大手前女子栄養短期大学 川口宏海氏、港区教育委員会の高山俊氏・高山信美氏の御教示・ご配慮を得た。記して感謝申し上げます。

第2章 調査の概要

第1節 平成元年度調査の経過と概要

1. 確認調査

兵庫県農林水産部の依頼により、昭和62年度に兵庫県教育委員会が実施した農業試験場跡地の確認調査成果を受けて、土地利用計画を策定していた兵庫県は、埋蔵文化財の最重要箇所を回避して県立看護大学の建設を発表した。その予定場所は、IH農業試験場の南西部にあたり、昭和62年度の確認調査におけるⅡトレンチとⅢトレンチの中間西方、またⅣトレンチとⅨトレンチの西に該当している。前回の確認調査では、弥生時代から室町時代にかけての遺構面が4面以上検出されていた箇所であるが、今回、具体的に建設予定箇所の提示を受けて、さらに詳細な内容を把握するために確認調査を実施した。調査期間は、7月11日から31日までである。

調査は、昭和62年の調査との互換性を考慮し、先に設定していた40mメッシュの地区割りを利用して、私有地を除く看護大学建設予定地のうち用水路より西侧12・13ライン、D～G間に、幅3mのトレンチを4本設定した。各トレンチの名称は昭和62年調査に後続してXIV～XVIIトレンチとする。延長は175m、調査面積717m²である。

調査の結果、XIVトレンチでは中世から近世の水田面の下層に部分的に洪水砂で覆われた溝や柱穴の遺構面、さらに下層では奈良～平安時代の遺構面が検出された。また、すべてのトレンチでは奈良～平安時代の遺構面の下に弥生時代末から古墳時代の遺構面が確認された。XVIトレンチとXVIIトレンチでは、さらに下層から洪水砂で覆われた溝や水田、旧河道が存在している。

よって、昭和62年度Ⅱトレンチで検出された弥生時代末から古墳時代の集落の存在する自然堤防は、XVトレンチとXVIIトレンチの東で収束することが判明した。また、Ⅲトレンチで検出された奈良時代の集落と、今回の奈良～平安時代の遺構面は同様の状態であり、この遺構面と中世の遺構面が重複することも明らかとなった。検出された遺構面は、計3面となり、昭和62年度の調査成果とも矛盾するものではない。

遺物は、弥生土器、須恵器（古墳時代後期～中世）、土師器（古墳時代～中世）、瓦（中世）、中国産青磁・白磁などが出土している。

前回の確認調査を補足するためにも実施した調査であるが、2次にわたる調査成果の結論は合致することとなった。このため、県立看護大学の建設予定地のうち構造物などで埋蔵文化財が損壊される部分について、発掘調査を実施することが必要であり、その旨を文書によって保健環境部に回答した。

2. 全面調査

先の確認調査の結果、全面調査が必要となった箇所のうち、当初設計の教育管理棟に該当する一部について調査を実施した。

調査地区は建設予定地の西南部にあたり、確認調査のXIVトレンチとXVIトレンチの中間に位置する。調査面積は800m²である。期間は、1月から3月までを要した。

検出した遺構面は3面である。第1遺構面は、地表下約60cmにあたり、歯状遺構と掘立柱建物址が検出された。歯状遺構は、幅約20cm前後の浅い溝状のもので、遺構面のほぼ全域に認められる。いずれも切りあうことはなく、方向は北から6° 東に振れており、地表面に痕跡を留める条理の方向にはほぼ等しい。また、この歯を鋸いた溝状の遺構の間隙には牛と推定される大型動物の足跡が確認された。掘立柱建物址は調査区の東南部にあたり、平成3年度の調査で全容が示された建物1005である。調査区東側の土壁断面には柱穴の掘り方断面が残されており、それによればこの建物は地表から約50cm下方の層から切られていることが判明した。帰属時期は中世末期から近世まで下ると考えられる。

第2遺構面は第1遺構面より5~10cm前後下位にあたる。当初、水田遺構の検出が期待されたが、顯著な遺構は認められなかった。

第3遺構面は第2遺構面より20~30cm前後下位の青灰色シルト層にある。直上面から弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土したが、顯著な遺構は認められなかった。

第2節 平成2年度の調査の経過と概要

平成2年度の調査区は、元年度の調査区の北方約100m、約2,787m²を対象としている。調査区の形状は着護大学校舎の平面形の制約をうけ、棟が片方の羽根を広げた様な複雑な形状を呈している。調査期間が年度後半に限られたため、校舎予定地全域を調査対象には出来ず、北半分を平成2年度の調査範囲としている。元年度の調査区との間約3,500m²については平成3年度に調査を実施した。

調査区の中央を北東から南西に貫通しているトレンチ(第3トレンチ)は昭和62年度に旧農業試験場跡地全域に実施した確認調査によるもので、今回の調査を実施する根拠となったものである。この確認調査の結果から面と認識された層位は約20枚近くに及んだが、その大半は近世以降の水田面である。調査区の層序は、大まかには、現耕作土(Ⅰ層)下に、近世後半以降と考えられる黄灰色土(Ⅱ層)、近世前半と考えられる灰色土(Ⅲ層)、中世後半と考えられる灰白色土(Ⅳ層)、中世前半と考えられる白灰色土(Ⅴ層)、古代末代と考えられる淡褐色土(Ⅵ層)、古代と考えられる灰褐色土(Ⅶ層)、弥生時代後期~古墳時代と考えられる褐色土(Ⅷ層)である。何れも層の上半が土壤化しており、土壤化したa層と土壤化していないb層に細分できる。基本的な調査対象はⅣ層以下とし、Ⅰ層からⅢ層までは機械力によって掘削・

排除した。人力による精査は中世を対象としたⅤb層上、古代を対象としたⅦ層b上、弥生時代後期～古墳時代を対象としたⅦb層上で、合わせて3面の面精査を行った。

また3面の内、1・2面についてはヘリコプターによる空中写真撮影を実施している。

調査の結果の詳細については後述するが、中世の屋敷地造構・古代の溝・弥生時代後期～古墳時代と考えられる水田遺構とともに多量の木製品をともなった江戸時代の溝を検出した。

第3節 平成3年度の調査の経過と概要

平成3年度は教育管理棟建築予定部分の未調査部分－A 1～3地区（平成元年度・2年度に実施した調査地点の間及び平成2年度調査地点の北端隣接地2ヶ所）と看護大学への進入路部分－B 1・2地区の2ヶ所の調査を実施した。

A地区は前年度調査区に隣接する調査区である。南側に接し、平成元年度調査区に至る部分をA-1地区（2,715m²）、北東に接する調査区をA-2地区（486m²）、西側に接する調査区をA-3地区（160m²）と呼称した。また、A 1・2地区において、教育管理棟の構造に伴う工事範囲箇所の追加から、調査開始後1箇所づつトレンチを追加した。トレンチの直積は計120m²である。

A 1～3地区は、それぞれ雑草伐採の後、機械力によって50～60cmを掘削し、以下を人力によって掘削し、精査をおこなった。また、第1面・2面については精査後ヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

A-1地区は平成元年度・2年度に実施した調査地点の間に設定した調査区である。調査区は建設予定の建物の形状に規定され、これに南半部より北側に突き出した追加トレンチ1を加えて複雑に入り組んだ形となった。

従来の調査結果をもとに3面の調査を実施した。第1面では調査区北半部では水田址、南半部では建物址を検出した。また、第2面では奈良時代の水田址、第3面では古墳時代前期の溝及び時期不明の建物址2棟を検出・調査した。

A-2地区は前年度調査区に調査を実施した方形館址と考えられる遺構群の北東側に設定した調査区である。調査区は前年度調査区の北東角を囲む形状で設定されており、大きく北部分（北半部と以下表現する。）と南部分（南半部と以下表現する。）の二つの扇形と南半部より東側に突き出た追加トレンチ2となる。前年度の調査結果および昭和63年度の調査結果によって東西南側に幅6m前後の溝を検出しておらず、一辺30m～35m程度の方形館址の存在が推測されていた。本年度は本体工事の設計変更により、図らずも北側の溝の有無を確認できる地点に調査区を設定できることとなった。調査の結果、北側の溝を検出し、方形館址内に存在したと考えられる建物址数棟および土壙、柱穴群を検出することができた（第1面）。また、第1面より下層の調査においては前年度調査結果と同様に奈良時代の遺構面（第2面）、古墳時代

前期と考えられる遺構面—水田面（第3面）の他、部分的に、第1・2面間に11世紀・9世紀の遺構面の存在を追うことができた。

A-3地区は前年度調査区の西側に隣接した調査区である。調査区の層序は、A-1・2地区と基本的には同様である。前年度の調査結果をもとに、4枚の遺構面の調査を実施した。第1面はA-1・2地区の第1面に対応する面である。部分的に畦畔（痕跡）を検出した。第2面はA-1・2地区の第2面に対応する面である。溝及び部分的に畦畔を検出した。溝は前年度調査の溝2007と切り合い新しい。時期を特定出来る遺物は出土しなかった。第3面は古墳時代と考えられる褐色土（埴層）を土壤層とする面である。溝及び部分的に畦畔を検出した。溝は前年度調査の溝3001の延長である。第4面はA-1・2地区の第3面に対応する面である。畦畔の痕跡と考えられる変色は一部見受けられたが明瞭なものは検出されなかった。

B地区は成人病センター駐車場内に位置する調査区である。センター西側の駐車場西端を南北に貫いて位置する。水路を挟み両側をB-1地区（1,000m²）、北側をB-2地区（158m²）と呼ぶ。B-1・2地区は、アスファルトを裁断除去した後、機械力によって約15cmを掘削し、以下を人力によって掘削し、精査をおこなった。この際、掘削深度が深いため、上留工を実施し、安全を確保した。また、調査区の周囲は県立成人病センターの駐車場として使用されており、県立成人病センター自体にも近接しているため、調査区と外部を万能鋼板によって遮断し、防音・防塵・安全の確保につとめた。また、調査に先立ち、機材搬入・掘削土搬出のため、仮設構（B-1・2地区間の水路）と仮設路を設置した。

ヘリコプターによる空中写真撮影については第3面において実施している。

B-1地区では、断面において5枚の水田土壤層を確認した。このうち、第1・第2枚目の水田土壤層は一面で纏め計4面を平面精査の対象とした。これは、調査区中央以北では1・2枚目の水田土壤層は一様に土壤化しているために分層是不可能な状態であり、また、調査区南半での2枚目の水田土壤層もまた平面で追える状況ではなかったためである。調査の結果、弥生時代後期の水田址の他、古墳時代前期の方形周溝墓状遺構、中世の建物址・溝を検出した。

B-2地区では、断面において、B-1地区で検出された5枚の水田土壤層のうち、第2～第4枚目の3枚の水田土壤層を確認した。このうち、第2・第3枚目の水田土壤層は一面で纏めて調査を実施した。即ち2面を平面精査の対象とし、調査を実施した。B-2地区では第1枚目の水田土壤層は上面からの割平で部分的に残存しているのみで、平面では検出出来ず、第2・第3枚目の水田土壤層は一様に土壤化しているために分層是不可能な状態である。また、第5枚目の水田は検出されなかった。調査の結果、弥生時代後期の水田址の他、中世の溝を検出した。

B-1・2地区は、調査終了後、埋め戻しを実施した。

第3章 遺跡の環境

1. 地理的環境

明石川は六甲山系に続く丘陵地に源を発し、明石海峡に流れ込む。上・中流域及び支流域は狭い谷平野で段丘が形成され、下流域では沖積平野が形成される。流域の大部分はかって播磨国明石郡に属し、現在は下流域の一部が明石市に属している他は神戸市に属する。吉田南遺跡は、明石川河口から約2km遡った右岸の低位段丘上に位置している。

2. 歴史的環境

旧石器・縄文時代

野々池遺跡(17)等洪積台地縁辺のため池内で石器が採集されているが、遺構は確認されていない。

弥生時代

弥生時代に入ると遺跡数が急増する。吉田遺跡(13)は前期古段階の土器が出土している。新方遺跡(38)、玉津田中遺跡(27)は弥生全期を通じて存続する明石川流域の拠点的集落である。後期にはいると池上北遺跡(45)、青谷遺跡(35)等の高地性集落が丘陵上に現れる。

古墳時代

流域の前期古墳として天王山古墳群(40)、前方後円墳の白水瓢塚古墳(39)がある。中期には流域の盟主墳とみられる前方後円墳の吉田大塚古墳(15)が築造される。しかし流域に分布する古墳の大部分は小規模な古墳が群集墳を形成している。

集落遺跡では、拠点的集落である出合遺跡(18)、玉造り工房を検出した新方遺跡(38)がある。

奈良・平安時代

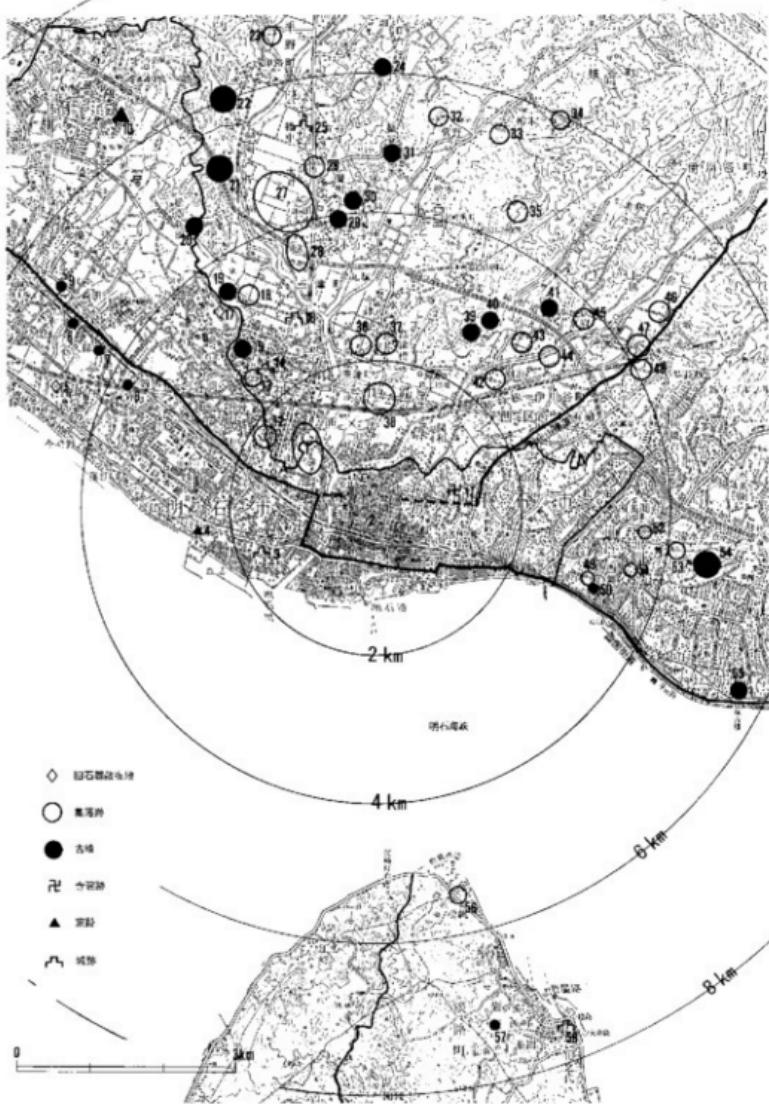
太寺麻寺(11)は白鳳期創建の寺院跡であるとともに、吉田南遺跡同様明石郡衙・明石駅家の推定地の1つである。出合遺跡(18)では、台地上で大型の建物跡を検出し、出土遺物から官人の邸宅の可能性が指摘されている。高丘窯跡群(10)は6世紀末～奈良時代の瓦陶業窯である。

中世以降

平安後期には神出で窯業生産が開始される。須恵器は広域に流通し、瓦は平安京の寺院に供給されていたと指摘されている。生産は鎌倉時代前期頃から魚住へ拠点が移っていく。

玉津田中遺跡(27)、居住遺跡(28)では中世集落が検出されている。

中世後期になると流域の各所に城館が築かれるが中世末秀吉の播磨平定により廃城される。近世に入ると船上城(3)、次いで明石城(2)が築城される。



第3図 吉田南遺跡の位置と周辺の遺跡

第4章 A地区の調査

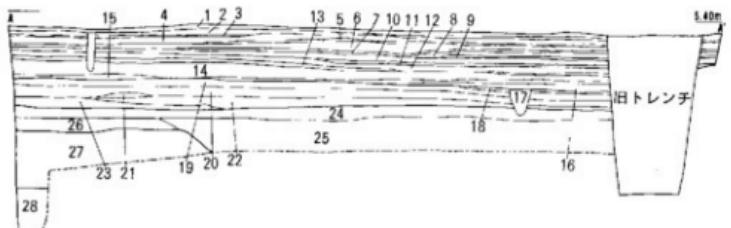
第1節 基本層序

A地区の基本的な層序は、現耕作上のI層から古墳時代前半以前と考えられるIX層に分けることができる。即ち、現耕作土（I層）、近世後半以降と考えられる黄灰色土（II層）、近世前半と考えられる灰色土（III層）、中世後半の土壤層と考えられる灰褐色土（IV層）、中世前半と考えられる白灰色土（V層）、古代末と考えられる茶灰色土（VI層）、古代と考えられる灰褐色土（VII層）、古墳時代と考えられる褐色土（VIII層）、古墳時代前半以前と考えられる暗灰綠色（IX層）の順である。

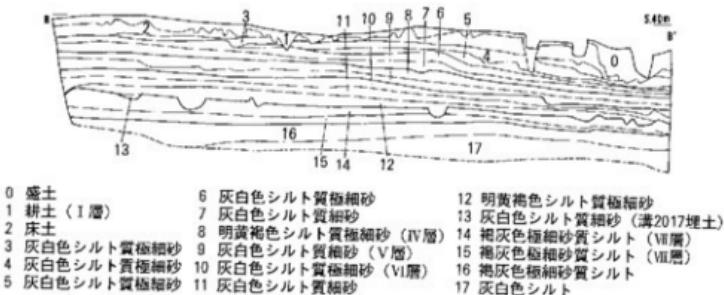
これらの基本的な層序はA地区全体で大きな違いはないが、出現レベル・層の厚さ・土質等については、調査区が長大であることもあり、当然存在している。また、微高地・谷部・旧河道等の痕跡の影響が残るVII～IX層、屋敷地と水田址という土地利用の違いがあるIV・V層については土壤化の違い等の差異が存在し、地点によって捉えられる遺構面の枚数等についても違いがある。これら遺構の性格によって大きく変化している土層の堆積状況については項を改めて記述する。また溝・土壤等の堆積についても同様である。

層序	堆積土	土地利用	出現レベル	遺構面	時期
I層	現耕土	水田	標高5.20m～5.00m		近現代
II層	黄灰色土	水田	“ 5.00m～4.80m		近世後半
III層	灰色土・褐色土	水田	“ 4.80m～4.50m		近世前半
IV層	灰褐色土	居住地・水田	“ 4.50m～4.40m	第1面	14～16世紀
V層	白灰色土	居住地・水田	“ 4.40m～4.30m		11世紀
VI層	茶灰色土・黄色土		“ 4.30m～4.10m		9世紀
VII層	灰褐色土	居住地・水田	“ 4.10m～4.00m	第2面	奈良
VIII層	褐色土 黄灰～灰白色土		“ 4.00m～3.80m	第3面	古墳時代
IX層	暗灰綠色 綠灰色	水田	“ 3.80m～3.70m	第3面	古墳前～ 弥生後期

表1 A地区の基本層序一覧



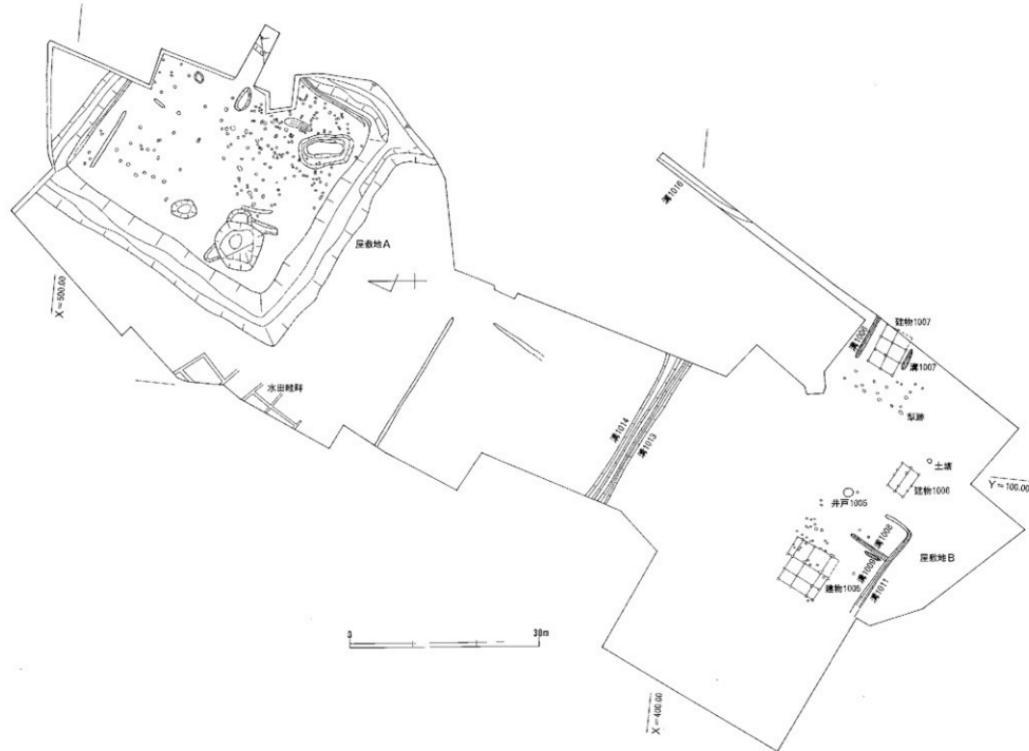
- 1 灰白色シルト質極細砂 (II層) 4 オリーブ黄シルト質中砂 7 明黄褐色シルト質極細砂
 2 明黄褐色シルト質極細砂 5 明黄褐色シルト質極細砂 8 灰白色シルト質極細砂
 3 明黄褐色シルト質極細砂 6 オリーブ黒シルト質極細砂 9 明黄褐色シルト質極細砂
 10 灰色シルト質極細砂 13 明黄褐色シルト質極細砂 16 灰白色シルト質極細砂
 11 明黄褐色シルト質極細砂 14 灰オリーブ粗砂 17 灰白色シルト質極細砂 (遺構埋土)
 12 灰オリーブ粗砂 (III層) 15 明黄褐色シルト質極細砂 18 黄灰色極細砂質シルト
 19 灰色極細砂質シルト (IV層) 22 灰オリーブ極細砂質シルト (V層) 25 嗜灰色粗砂
 20 灰白色シルト質極細砂 23 明黄褐色シルト質極細砂 26 明黄褐色シルト質極細砂
 21 灰色シルト質細砂 24 灰白色シルト質極細砂 (VI層) 27 灰白色シルト質極細砂
 28 緑灰色中砂 (IX層)



- 0 盛土 6 灰白色シルト質極細砂 12 明黄褐色シルト質極細砂
 1 耕土 (I層) 7 灰白色シルト質細砂 13 灰白色シルト質細砂 (溝2017埋土)
 2 床土 8 明黄褐色シルト質極細砂 (IV層) 14 褐灰色極細砂質シルト (V層)
 3 灰白色シルト質極細砂 9 灰白色シルト質細砂 (V層) 15 褐灰色極細砂質シルト (VI層)
 4 灰白色シルト質極細砂 10 灰白色シルト質極細砂 (VI層) 16 褐灰色極細砂質シルト
 5 灰白色シルト質極細砂 11 灰白色シルト質細砂 17 灰白色シルト



第4図 A地区土層断面図



第5図 A地区第1面全体図

第2節 各遺構面の概要

1. 第1面の概要（第5図、図版4・20・21）

第1面では江戸時代から中世にかけての遺構を検出した。この内、江戸時代の遺構は多量の遺物が出土した溝1001と一石五輪塔を集積した遺構及び近世末から近代にかけて使われた水路（溝1003）の3箇所、中世の遺構は、調査区の北半部を占める屋敷地Aと調査区南半部に位置する屋敷地Bの2箇所の中世の屋敷地とその周辺に展開する水田を調査した。

2. 第1面の遺構

A. 江戸時代

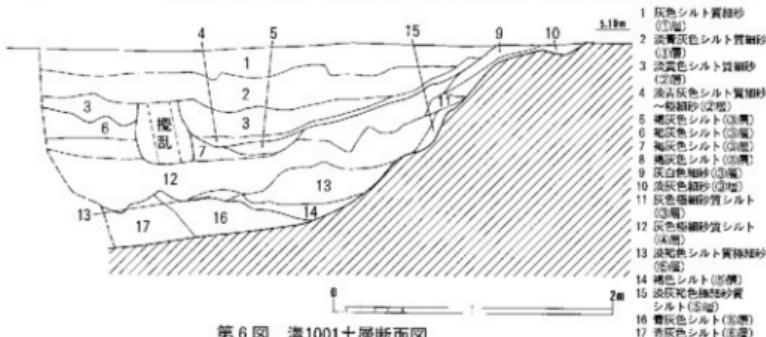
江戸時代の遺構は調査区東端において検出された溝1001・溝1003及び溝1002において検出された一石五輪塔集積部分の2箇所である。何れも中世面において検出・調査を実施している。

この内、溝1001は溝1002と同様に屋敷地Aを方形に囲む溝として機能する中世後期の溝であるが、近世に掘り替えられ、水田に伴う用水路として使用されたものである。本来溝1002とともに中世の遺構として扱うべきものであるが、その埋土中より江戸時代前期の多量の陶磁器・木製品・紀年乾木簡が出土しており、江戸時代の遺構として扱うこととする。

a) 溝

溝1001（第6図、図版5）

調査区東端で検出した。溝は調査区を掠めて存在しており、溝の東肩は調査区外にある。全貌は明らかではないが、浅く開くU字形の断面形状をもち、幅約3.5m以上・深さ約1.5mの規模



で南北方向(N29° E)に走る。昭和62年度の確認調査トレンチにおいてもこの溝は確認されており、その部分の幅は6mを測る。

基本的な土層堆積は灰色色調のシルト質細砂が堆積する1～5層(①・②層)、腐植物を多量に交えた褐色調のシルトよりなる6～11層(③層)、有機物を含みながらも③層に比べて土壤化の程度が少ない12層(④層)、有機物を含むシルトよりなる13～15層(⑤層)、溝底に堆積する青灰色シルトよりなる15・16層(⑥層)の6層である。堆積状況からみて、②③層間、⑤⑥層間には時間差が存在するものと考えられる。

近世の遺物は③④⑤層を中心に各層より出土しているが、⑥層については青磁碗を含む中世の遺物も出土しており、若干古い様相を持っている。また、③④⑤層からは肥前系陶磁器を中心で多量の上器が出土している。また、漆椀・櫛・鏡匣等の漆器、曲物・箸等の木製品、「宝永參年」の紀年銘をもつ木筒を含む木簡15点が出土している。

これらの出土遺物は溝1002との合流点から上流約7m前後の限られた範囲から集中して出土しており、限られた地点に投棄された可能性が高い。

遺物の時期は近世の遺物に関しては17世紀中頃から18世紀前半に限定されており、それ以降の遺物は殆ど出土していない。溝自体が江戸時代中期以降には埋没し、機能しなくなるものと考えられる。

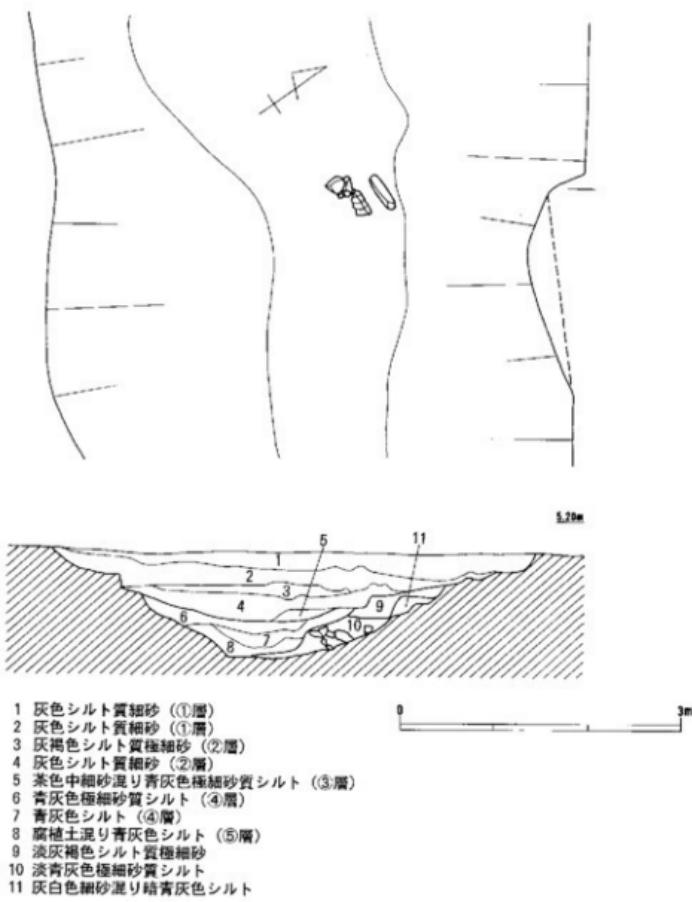
一石五輪塔集積部（第7図）

溝1002中より検出した。溝底の北肩によりに数個の河原石とともに、一石五輪塔が折損・投入・集積された状態で検出された。また、集積部周囲からは径5cm前後の杭が7箇所検出されており、これも集積に伴うものと考えられる。また、溝1002の溝幅自体が、集積部を境に東側で狭くなっていることから、これも集積に伴う作業と考えられる。

折損した一石五輪塔片は1木の一石五輪塔と水輪以上の1本に復元できる。これらの集積した五輪塔片は大半が溝底に着底しているが、一部浮いた状態のものも存在する。ある程度堆積した状態で投入され、自重によって沈降した可能性も考えられる。しかし、拡散せずほぼ一列に五輪塔片が存在することから推して、人為的に溝底に集められた可能性が高い。

一石五輪塔自体の時期は江戸時代に入るものと考えられるが、集積部分の土層堆積からは五輪塔を含む第10層及びその上層に堆積した9層を、江戸時代前～中期と考えられる⑤層以降の流跡堆積が切った状態を示している。このことから見て集積が行われた時期は江戸時代初期から前期にかけてと考えられる。

遺構の性格は詳らかではないが、一石五輪塔を使用した土橋の例が存在しており、同様の遺構であった可能性がある。また、溝幅が変化する部分に位置することから推して水田の水廻しに係わる遺構であった可能性も考えられる。



第7図 溝1002 一石輪塔投入状況

溝1003

溝1003は溝1002の南肩を並行して走る溝である。浅く開くU字形の断面形状をもち、幅約0.7m以上・深さ約0.25mの規模で溝肩には杭が打ちこまれている。この溝は溝1001・1002が埋没した時点で掘削されており、近世末から近代にかけての時期に機能した溝と考えられる。

昭和62年度の確認調査トレンチにおいてもこの溝は確認されている。

B. 鎌倉時代から室町時代の遺構

この時期の遺構は建物・井戸・区画溝で構成される屋敷地A・屋敷地Bと周辺に展開する水田址に分けることができる。以下、屋敷地A・屋敷地B・水田址に分けて記述を行う。

a) 屋敷地A（第8図、図版4・6・9・11）

屋敷地Aは調査区北半部に位置する。四方に溝が巡っており、内部に掘立柱建物4棟・柱穴群・井戸4基・集石遺構2基・溝4本が存在する。溝の外側には柱穴等は存在せず、溝の北側・西側・南側の三方については水田が広がっていたものと考えられる。この状況から推して、溝が建物・井戸等によって形成される遺構群一屋敷地を画する存在であると考えられる。

区画内の遺構の内、柱穴群は南半に集中し、建物1001～1004が存在する。また、南西半には井戸1001～1004が存在する。北半には散漫に柱穴が存在しており、2棟前後の掘立柱建物が南東部の建物よりもやや古い時期に存在したものと考えられる。

この四周を巡る溝のうち、溝1002は南・西辺を画する溝で、北端に北辺を画する溝1004が取りついている。この2本の溝が同一の溝であるか、溝1002がさらに北へ延び、溝1004が取りつく状態であるかは、今回の調査では確認できなかった。また、東辺を流れる溝1001は全域を検出してはおらず、溝1004との取りつきの有無についても確認していないが、走行・位置関係からみて屋敷地を画する溝と考えてよいものと考えられる。それぞれの溝は近世には水田の用水路として使用されており、拡幅されているため屋敷地に伴う溝としての幅は明確ではないが、検出された溝の内法で南北約38m・東西約33m、溝底で南北約42m・東西約39mを計り、長辺をN27°E前後にもつ長方形の区画が想定できる。

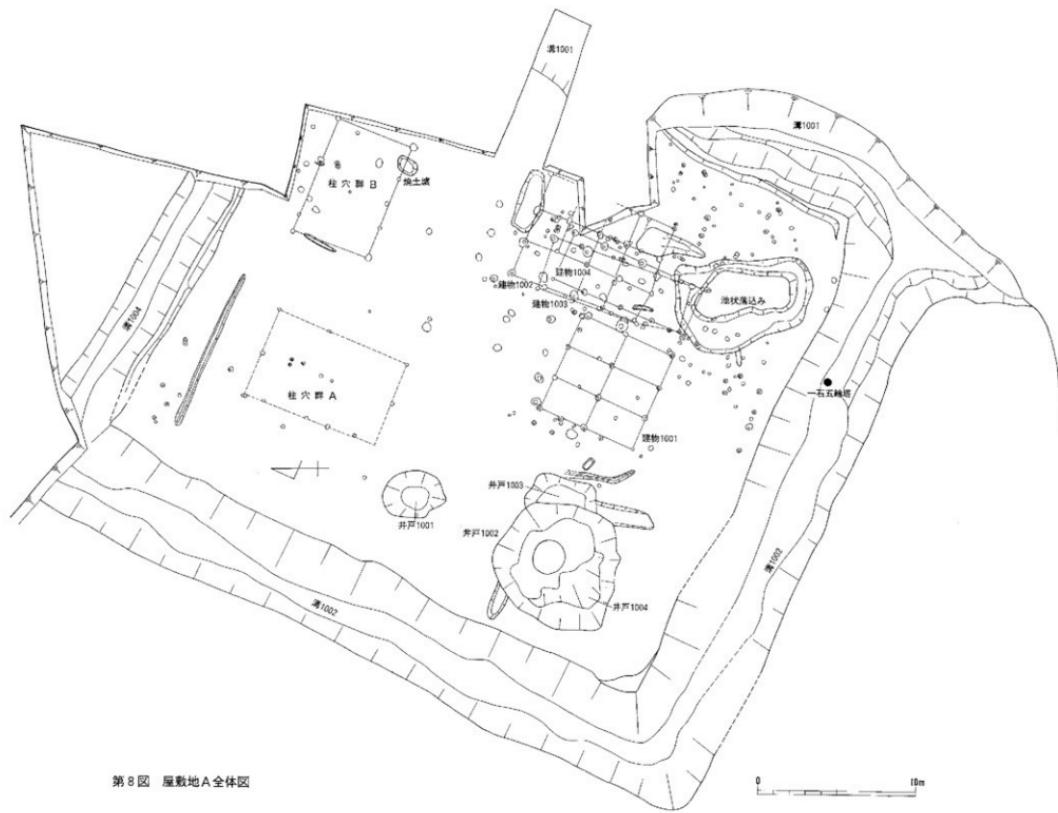
これらの屋敷地内の遺構は基本的には溝に囲まれた内側に存在しているが、柱穴・井戸・溝内の遺物の時期及び、遺構の切り込み面・土層の堆積状態を勘案するならば溝が掘削される以前に幾つかの柱穴跡や建物や井戸の存在した可能性が高く、溝による区画は遅れて中世後半に出現したと考えられる。以下、基本的な層序関係を説明し、後に各遺構について述べてゆく。

①基本層序

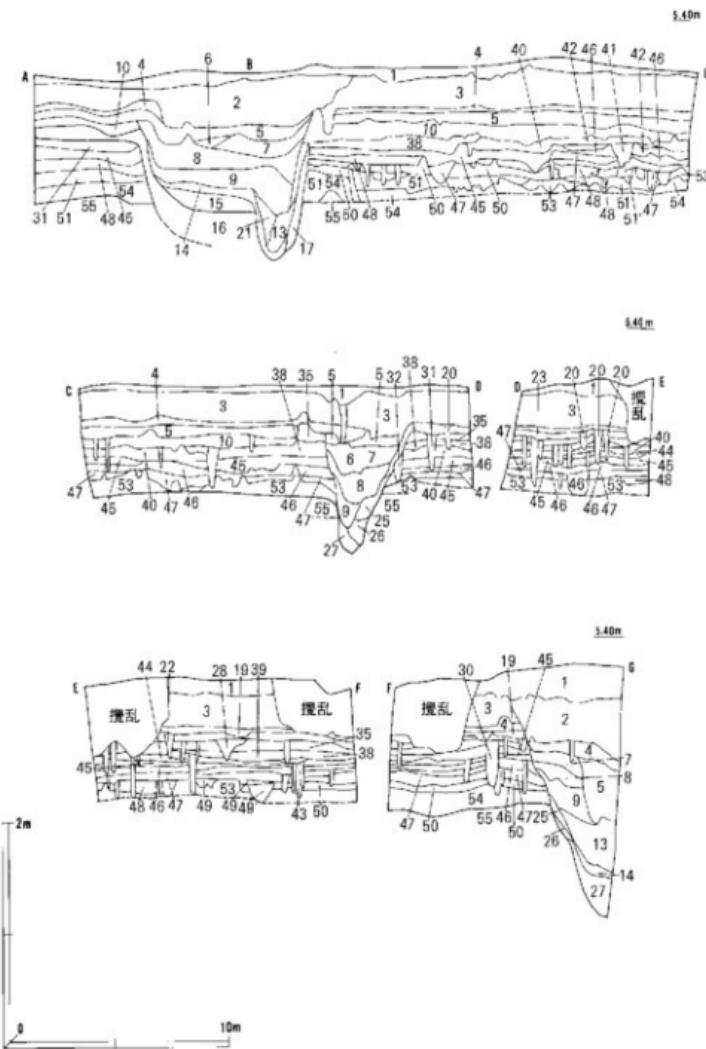
屋敷地Aに係わる基本的な土層堆積は第9図・第10図に示した。

屋敷地に係わる層は第19層以下である。この内、第19層・第23層・第24層が屋敷地内の土壤層(第IV層)である。溝の外側では検出されない。

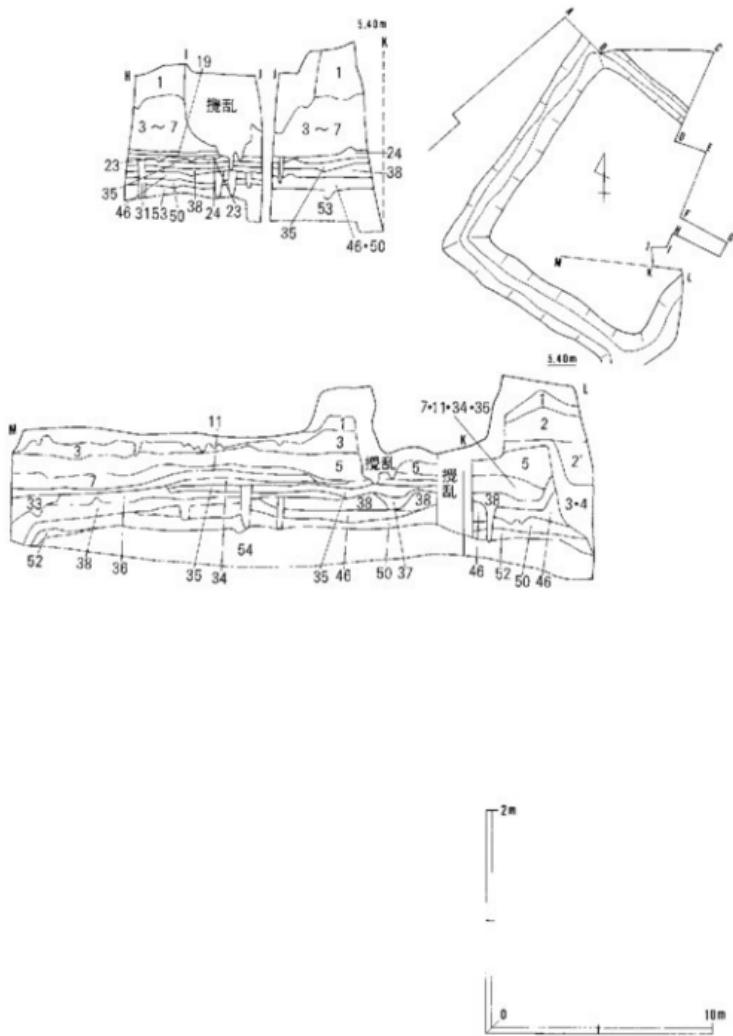
第23層・第24層は屋敷地のほぼ全域において出現する。焼土壙は第23層上面、柱穴群A・B



第8図 屋敷地A全体図



第9図 屋敷地A内土層断面図（1）



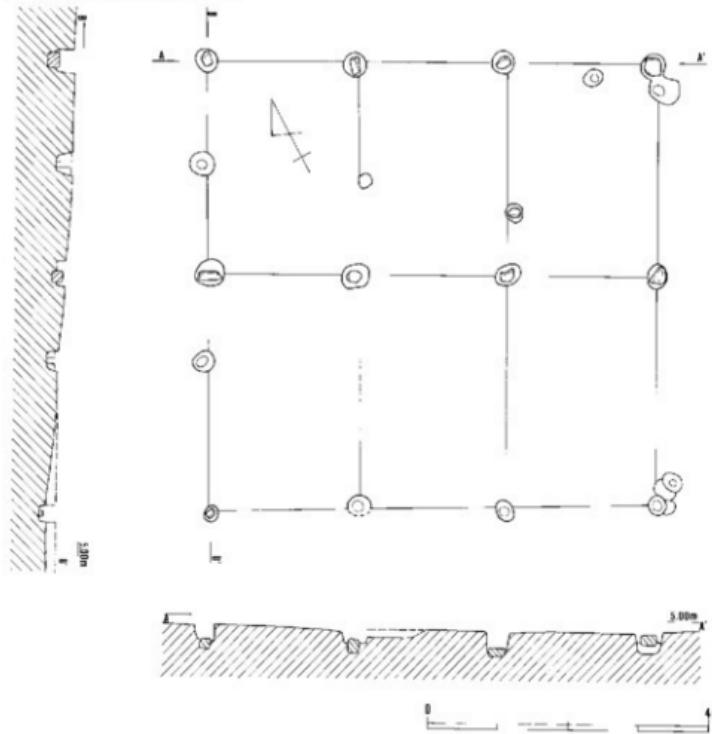
第10図 屋敷地A内土層断面図（2）

は第23層下の第35層上面、建物1001は第24層上面より検出され、建物1002は第24層下の第35層上面より検出された。上塙層に上下する造構面は遺物から概ね13～16世紀代と考えられる。

また、周囲を区画する溝については近世の拡幅を受け、当初の掘り込み面を明確にはしがたい部分が大半であるが、溝1004では第23層が溝内に落ち込んでおり、下層の第35層を切り込んでいる。

②建物・柱穴群（図版12）

建物は4棟検出した。いずれも獨立柱建物である。また、建物として復元できる可能性の高い柱穴群を2箇所検出している。



第11図 建物1001

建物1001（第11図、図版12下・13）

屋敷地中央南よりに位置する。N26°Eに長軸をとる南北梁行2間（3.2m）・東西棟行3間（6.6m）の建物である。柱間の間隔は梁行1間で1.6m、棟行1間で2.2mを計る。

柱穴は北梁行2間分の柱穴と南北隅の柱穴に根石をもつ。西梁行の主柱穴の間に小径の柱穴が存在している。また、北梁行の内側の2間には小径の柱穴が梁行上に位置して存在しており、床支えの柱穴であったと考えられる。

また、西梁行きと平行して並ぶ4個の柱穴はこの建物に伴って施された柵状の施設と考えられる。

建物1002（第12図、図版12上）

主軸方位をN21°Eにもつ東西梁行3間（6.7m）・南北棟行4間（8.5m）の総柱の櫛立柱建物である。

柱間の間隔は梁行1間で2.10m、棟行1間で2.10mを計る。

径50cm前後の円形の柱穴を持ち、柱根抜き取り後に河原石を投入している。柱穴の深さには深浅2種類存在しており、建物の構造に係わるものと考えられる。

建物1001の北東部に位置し、建物1003・建物1004と重複し、後出するが、柱穴からの出土遺物はなく、具体的な時期は不明である。

建物1003（第13図）

主軸方位をN24°Eにもつ東西梁行1間（3.1m）・南北棟行4間（9.2m）の建物である。

柱間の間隔は、棟行1間で2.3mを計る。

建物1001の東部に位置し、建物1002・建物1004と重複、建物1002とは柱穴が切り合い古い。

建物1004（第14図、図版13下）

主軸方位をN22°Eにもつ東西梁行1間（3.3m）・南北棟行4間（9.2m）の建物である。

柱間の間隔は梁行1間で3.3m、棟行1間で2.3mを計る。

建物1001の東部に位置し、建物1002・建物1003と重複するが先後関係は不明である。

柱穴群A

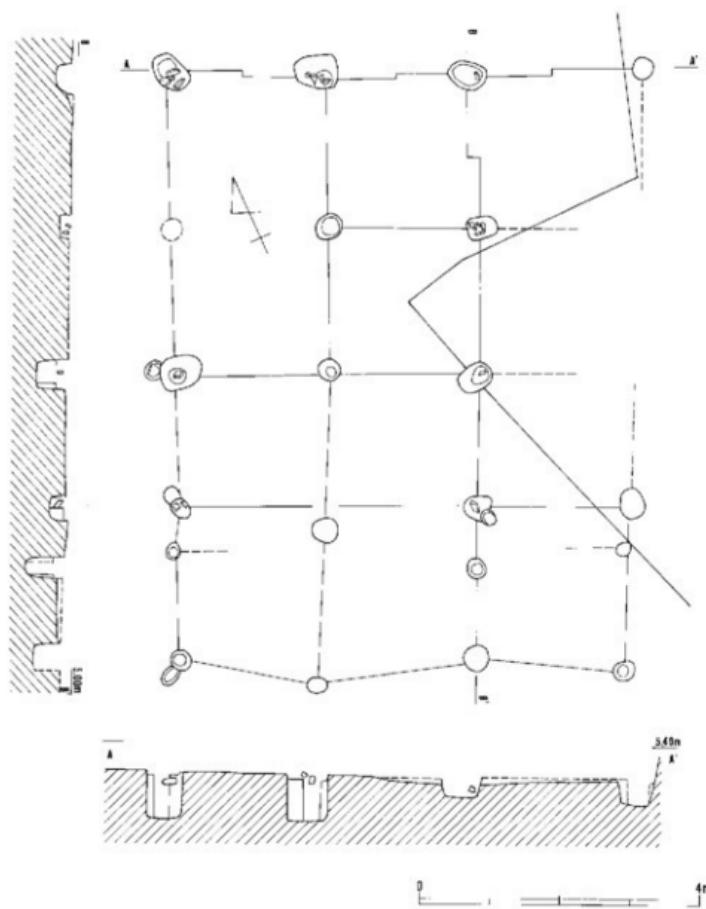
屋敷地北西半に位置する。主軸方位をN22°Eにもつ東西棟行2間（5.8m）・南北棟行5間（8.9m）の建物と推定されるが、柱穴の検出数に不足があり柱穴群とした。

柱穴群B

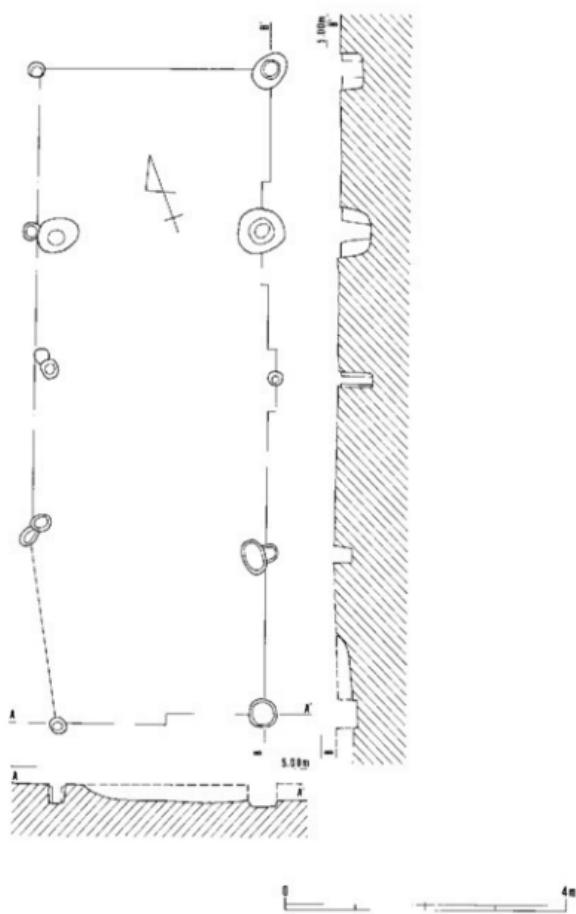
屋敷地北東半に位置する。主軸方位をN24°Eにもつ東西棟行2間（5.0m）・南北棟行4間（7.5m）の建物と推定されるが、柱穴の検出数に不足があり柱穴群とした。

③井戸

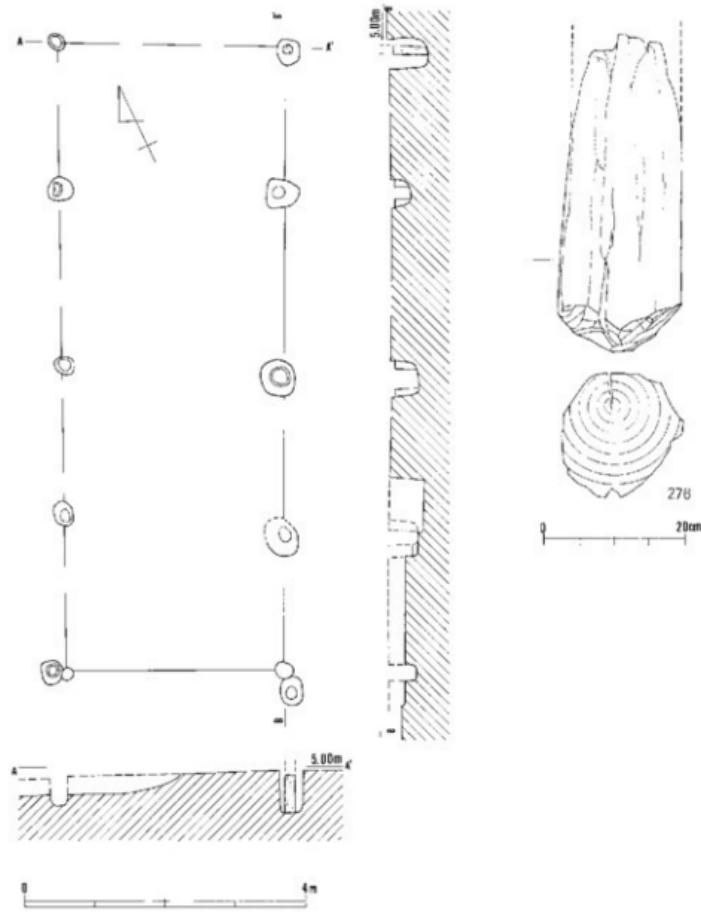
井戸は4基検出している。うち3基は溜井の形態をとるものである。また、井戸1001及び1004は中世以前より機能していた可能性が高いが、第1面において検出しており、この項で古



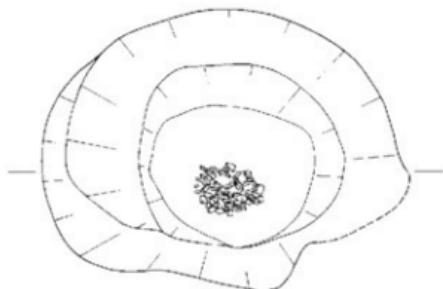
第12図 建物1002



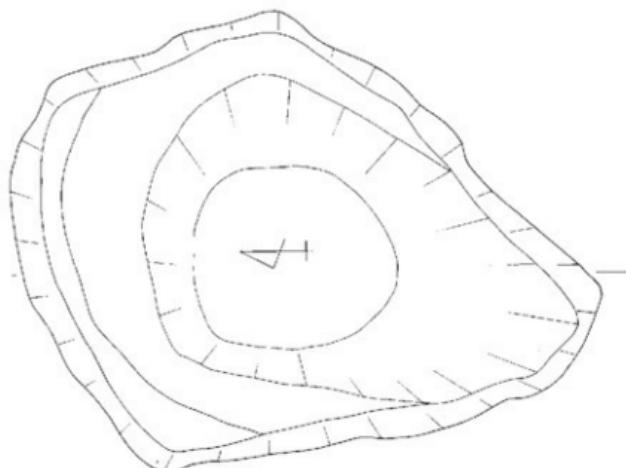
第13図 建物1003



第14図 建物1004・柱根

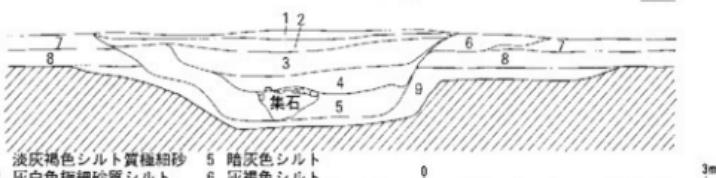


第1面



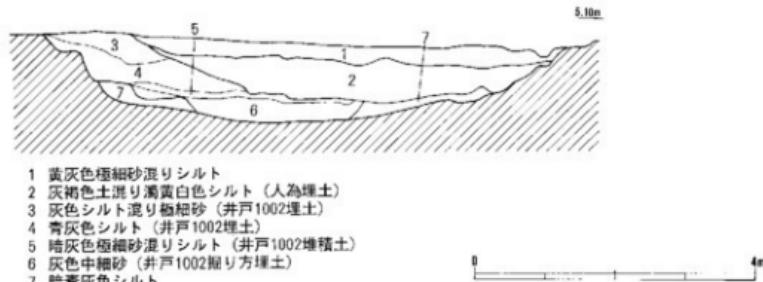
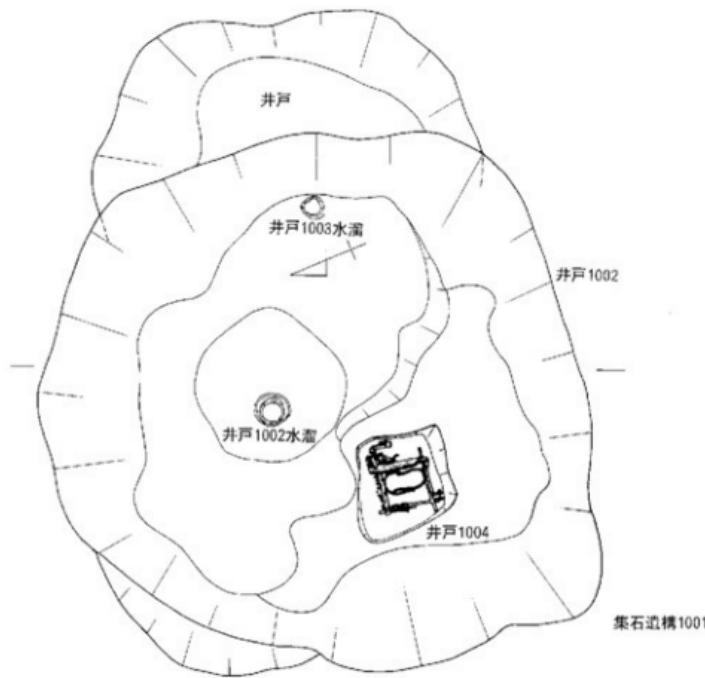
第2面

3.30m



1 淡灰褐色シルト質極細砂
2 灰白色極細砂質シルト
3 淡灰褐色極細砂質シルト
4 暗灰色シルト
5 集石
6 灰褐色シルト
7 淡灰褐色紙砂質シルト
8 灰褐色細砂質シルト
9 濁灰色シルト

第15図 井戸1001



第16図 井戸1002～1004・集石造構1001

い時期の様相についても述べることとする。

井戸1001（第15図、図版14下）

屋敷地西半部、柱穴群Aの南側に位置する。長径3.9m・短径3.0m・深さ1.00m、外方へ開く不整な椭円形の掘り方の形状を呈している。

掘り方底には径0.6m程度の範囲で拳大の円錐が密集している。隙間より曲物板片が出土しており、水溜として径60cm前後・深さ40cm以上の曲物が掘えてあったと考えられる。

この他、出土遺物は土師器三足鍋脚部・須恵器椀・瓦器椀片・板材が出土しており、12世紀末前後の時期と考えられる。

井戸の形状は外方へ開く形状であること、また、土層の堆積状況からみて、顯著な井戸壁や側板が存在し更に材が抜き取られた痕跡が見受けられないことから、当初から水溜として当物のみをすえる溜井戸であったと考えられる。

この井戸は第2面においても検出されている。長径6.5m・短径5.0m・深さ0.7mで第1面の井戸に比べ規模は大きい。外方へ開く不整な長楕円形の形状を呈している。土層の堆積状況からみて第1面の井戸との間には断絶があったと考えられる。

この時期の井戸に伴う遺物は出土していないが、掘り込み面から推して、井戸が掘削された時期は9世紀代と考えられる。

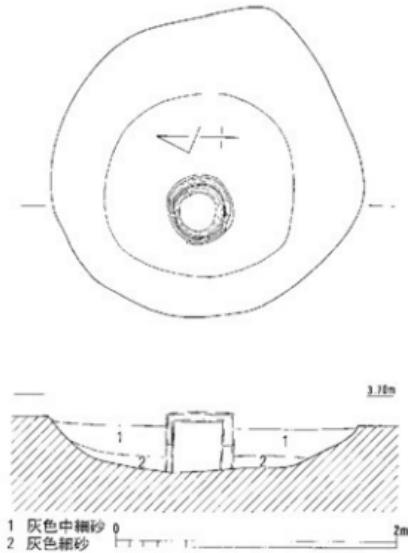
井戸1002（第16図・第17図、図版15上・17）

井戸1002は屋敷地南西隅に位置しており、井戸1003・井戸1004と切り合い、新しい。井戸は浅い皿状の掘り方をもち、中央部に曲物による水溜を掘えている。

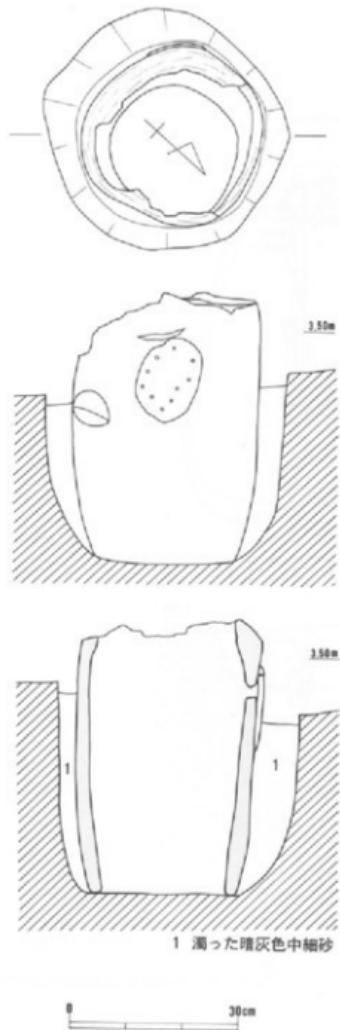
皿状の掘り方は隅丸方形に近い円形で、長径7.8m・短径7.6m・深さ1.2mの規模である。

掘り方底には砂層を掘り込んで、径2m程度の掘り方をもって曲物が掘えられ、水溜としている。

曲物は2重になっており、いずれも底板を除去した状態で使用している。内側の曲物は、側板の結合部をはずしており、復元した曲物径42cm・深さ38cmを計る。外側の



第17図 井戸1002水溜



第18図 井戸1003水溜

曲物は径42cm・深さ19cmの法量の2個体の曲物を積んだ状態で掘えている。

井戸は掘り方の形状が皿状であること、土層の堆積状況からみて、曲物の上に有機質を含んだシルトが覆っていることや顯著な井戸枠や側板が存在し更に材が抜き取られた痕跡が見受けられないことから、水溜として曲物のみを据えた溜井戸であったと考えられる。

また、土層の堆積状況からみて、井戸は自然堆積によって半ば埋没した後、最終的には人為的に埋められたと考えられる。

遺物は井戸を埋没させた自然堆積土中より土師器鍋・椀・須恵器碗・皿と共に木製品として折敷・漆器椀・下駄・曲物底板片が出土している。この他、須恵器円面鏡の脚部片が1点出土している。

遺物の時期は若干ばらつきをもつが、概ね13世紀から14世紀にかけてである。

井戸1003（第16図・第18図・図版15下図版18）

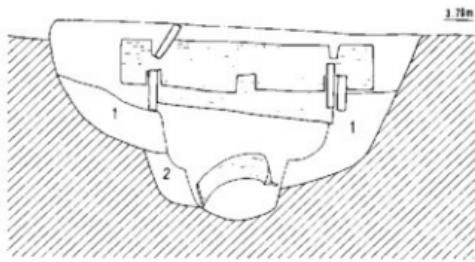
井戸1003は屋敷地南西隅に位置しており、井戸1002・井戸1004と切り合い、井戸1002に掘り方の西半を破壊されている。

井戸は浅い皿状の掘り方をもち、中央部に木製の臼を転用した水溜を据えている。

規模は掘り方の東半部のみが残存しているため詳らかではないが、円形で、径5.4m・深さ1.3m程度の規模であったと考えられる。

水溜は径30cm・高さ50cmの臼の底を抜き、天地を逆にして据えたもので、側面に開いた孔を曲物の底板を使って補修している。

井戸に伴う遺物の出土ではなく時期は判然としない。しかし、土層堆積からみて、屋敷地に伴う土壤層よりも下層から井戸は掘られて



1 濁灰色シルト
2 灰色シルト



第19図 井戸1004

おり、建物1001が建てられた時点ではすでに埋没していた可能性が高い。

土層から推して11世紀に埋められた可能性がある。

井戸1004（第16図・19図、図版16下・19）

井戸1004は井戸1002の掘り方底より検出された。井戸はその大半を井戸1002の掘削によって損壊しており、井戸側3段及び曲物を据えた水溜が辛うじて残存している。

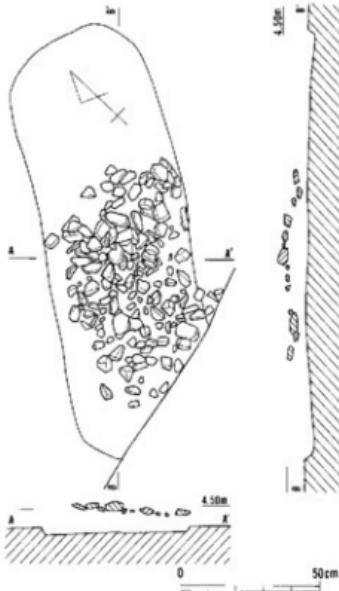
井戸の掘り方は不整な隅丸方形を呈しており、南北1.25m・東西1.35mである。

井戸側は横板井籠組で、その内法は南北0.6m・東西0.6mを計る。また、残存する板材は約3cmの厚さをもつ。

水溜には底を抜いた生物が据えられていたが、上圧により著しく変形しており、当初の規模は詳らかではない。径30cm・深さ20cm程度であったと考えられる。

井戸は施設時に拳大の礫を充填されており、井戸内部からは多量の礫が検出された。

これらの井戸内に充填された礫は井戸1002が掘削された際に井戸底及びその周辺に施設され集石造構1001・1002になったものと考えられる。



第20図 集石造構1002

井戸内からは須恵器片が出土している。井戸が廃棄された時期は11世紀前後と考えられる。

④集石造構1001・1002（第16図・20図・21図、図版16）

井戸1004の項で述べた通り、井戸1004が井戸1002の掘削によって損壊された際に形成されたものと考えられる。

集石造構1001は井戸1004の残存部分に残る集石より帶をひいて南西へと延び、掘り方の外側へと続いた状態である。遠構の掘り方は明確でなく、敏きのべられた状態に近いものと考えられる。

集石は井戸1004の残存部分周辺の集石部と南側の井戸1002南部周辺の集石部の2つのブロックに分かれる。前者の規模は南北約2.5m・東西約1.3mの範囲である。後者は南北約1.8m・東西約0.8mの範囲に渡っている。

これに対して集石造構1002は集石造構1001の南側に位置しており、長軸1.5m・短軸0.6m・深さ0.1mの規模をもつ長方形の浅い土壙である。余分な礫を土壙を掘って処分したものと考えられる。



第21図 集石遺構1001・井戸1004の埋没状況

遺物は土師器鏡・壺・羽釜片・銷壺、東播系須恵器・甕片といった中世土器の他、古墳時代から奈良時代の須恵器が集石遺構1001から出土している。

⑤焼上塙（第8区、図版14上）

屋敷地内の北東半に位置する。柱穴群Bと重複した位置にあるが層序的には後出するものである。層位からみて屋敷池内の遺構としてはもともと新しいものと考えられる。

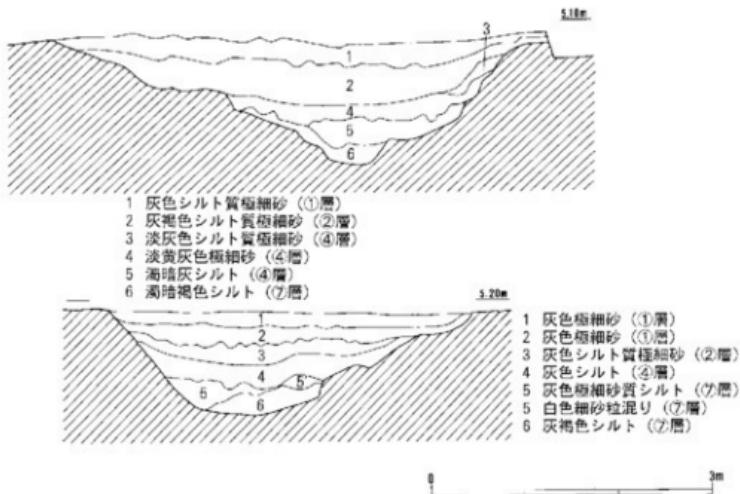
長軸をN40°Eにとり長径1.4m・短径1.0m・深さ約8mを測る。形状は不整な楕円形を呈し断面形は浅い皿状である。埋土には炭を含み、土壤底には若干熱を受けた痕跡が残る。

遺物は瓦器碗底部片が1点出土している。14世紀と考えられる。

⑥溝

溝は屋敷地内では溝1004にそって1条、井戸1002周辺に溝状の遺構が3箇所検出されているが、ここでは屋敷地Aを巡る溝1002・1004についてのみ述べておく。

第23図に溝1002・1004の土堀堆積区をあげた。ともに溝の断面形状は大きく開くU字形を呈しており、溝1002で幅5.0m・深さ1.3m、溝1004で幅4.0m・深さ1.1mを計る。但し、これらの溝の内、上部の約%の堆積は溝1001の①～④層に対応するもので江戸時代前期以降の堆積と考えられる。即ち、溝は江戸時代に大きく拡幅を受けた可能性が高く、屋敷地Aが存在した時点で巡っていた溝は幅2m程度の規模であった可能性が強い。



第22図 溝1002（上）・溝1004（下）土層断面図

屋敷地Aに伴う時期の遺物は土師器小皿・羽釜・土鍋、東摺系須恵器こね鉢が溝底周辺(⑦層)より出土しており時期は14~16世紀代である。

b) 屋敷地B (第23図、図版22下・23)

屋敷地Bは調査区南半部に位置する。南側に溝が走っており、掘立柱建物3棟・柱穴30個・井戸1基・土壙1基・溝3本が存在する。建物群の西側及び北側には水田が広がっていたものと考えられる。また、溝の南側にも柱穴等は存在せず、溝の南側についても水田が広がっていたものと考えられる。この状況から推して、溝は建物・井戸等によって形成される造構群-屋敷地の南側を画する存在であると考えられる。

屋敷地内の、柱穴群は西半に集中し、建物1005・建物1006が存在する。また、建物の間には井戸1005が存在する。また、建物1005の周辺には散漫に柱穴が存在しており、建物の立替えが考えられる。また、建物1006の東隣には土壙が存在する。

東半に存在する建物1007は層位・出土遺物から見てやや古い時期に存在したと考えられる。
①基本層序 (第4図)

屋敷地Bに係わる基本的な土層堆積は第4図に示した。

屋敷地に係わる層は第17層以下で、この内、第19層が屋敷地内の土壙層(第IV層)である。

建物1005の柱穴は第19層上面より検出され、建物1002は第19層下より検出された。

②建物・柱穴群

建物は3棟検出した。いずれも掘立柱建物である。

建物1005 (第24図、図版23下・24)

屋敷地の西よりに位置する。N26°Eに長軸をとる南北梁行2間(4.9m)・東西棟行3間(7.1m)に半間(1.1m)の庇と考えられる張り出しが両桁行きにつく建物である。柱間の間隔は梁行1間で2.0mと2.9m、棟行1間で1.8mと2.3mと3.0mを計る。

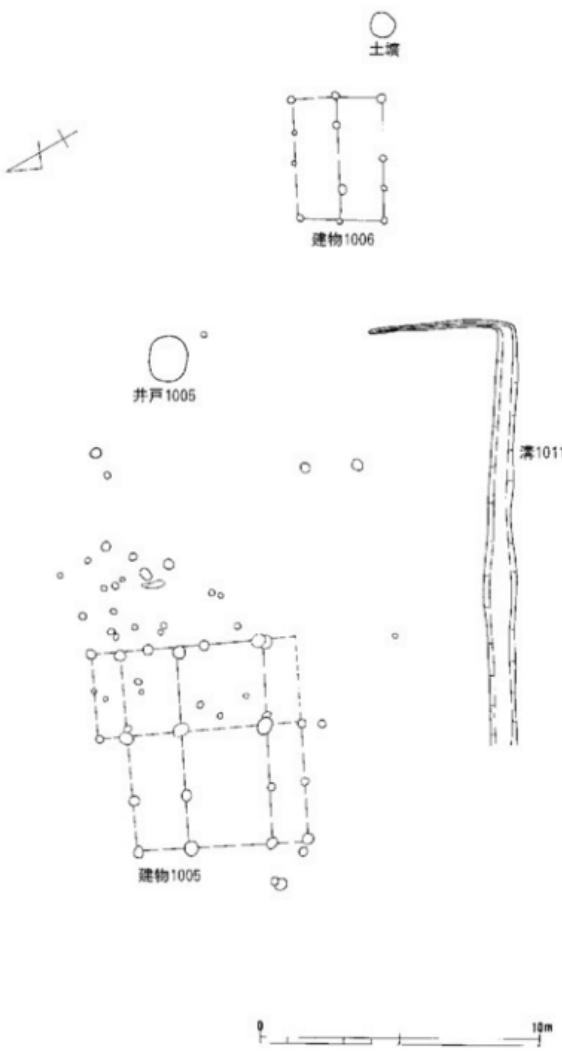
2間3間の主柱穴には根石・礎板が存在する。また、東梁行きの主柱穴の間には小径の柱穴が存在しており、建物1001と近似した構造となっている。

建物1006 (第25図、図版25下)

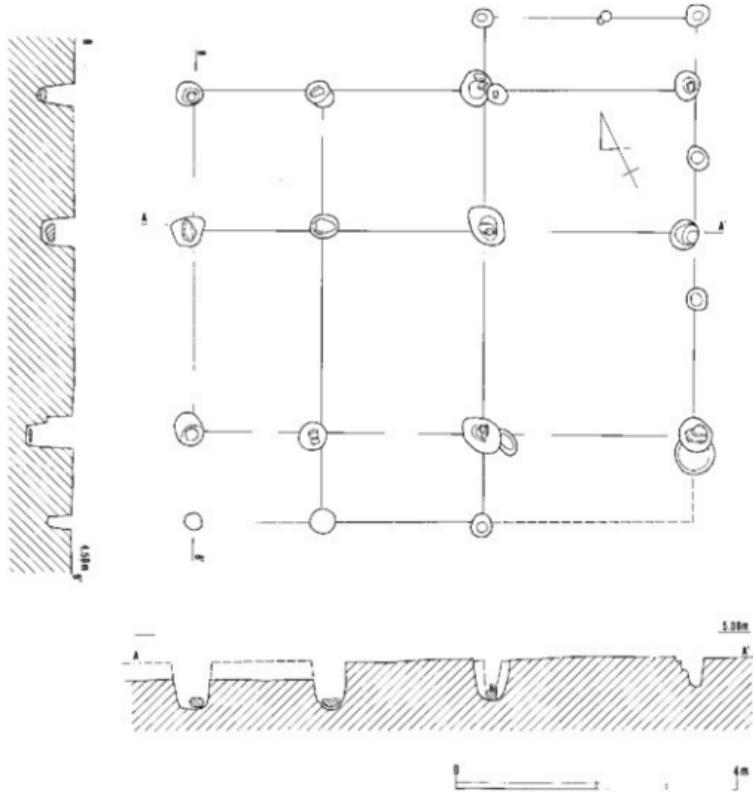
屋敷地の中央に位置する。N64°W前後に長軸をとる南北梁行2間(3.0m)・東西棟行3間(4.4m)の建物である。柱穴は棟行の内2個の柱穴が際立って大きく、この建物内の2箇所の柱で壁根を支える簡易な構造の建物が想定できる。

建物1007 (第26図、図版27)

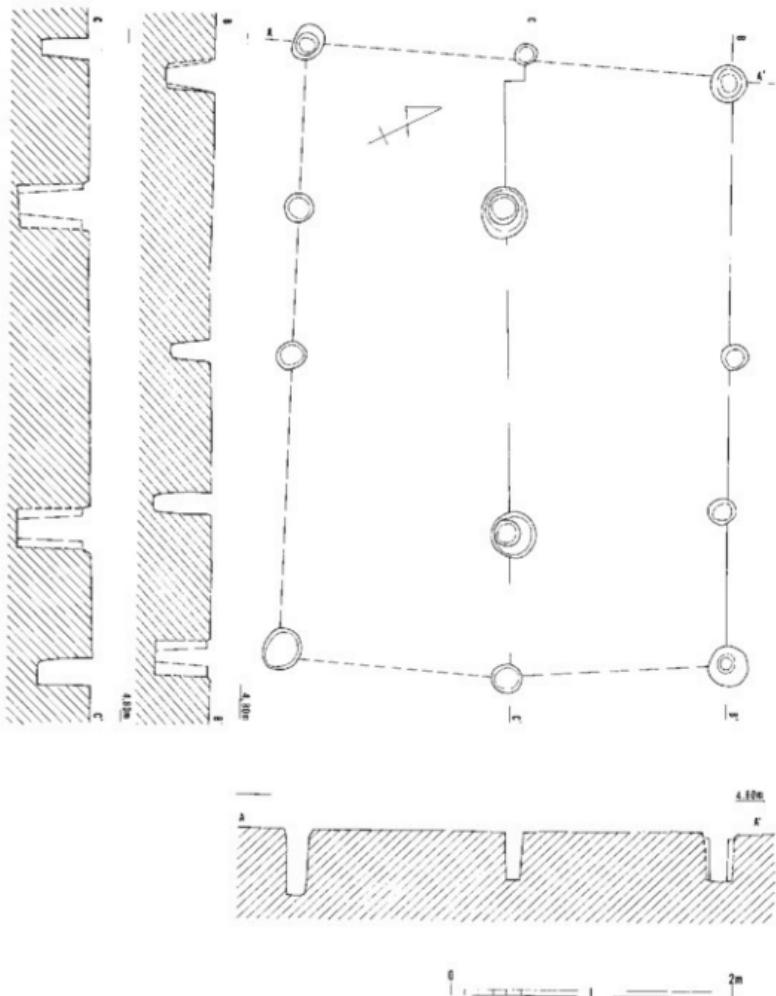
屋敷地の東端に位置する。N69°Wに長軸をとる南北梁行2間(4.6m)・東西棟行3間(6.9m)の庇と考えられる總柱建物である。柱間の間隔は梁行1間で2.3m、棟行1間で2.3mを計る。建物の西北には雨落ち溝と考えられる幅約30m・深さ0.15mの浅い溝1006・溝1007が検出されており切妻屋根であったと考えられる。



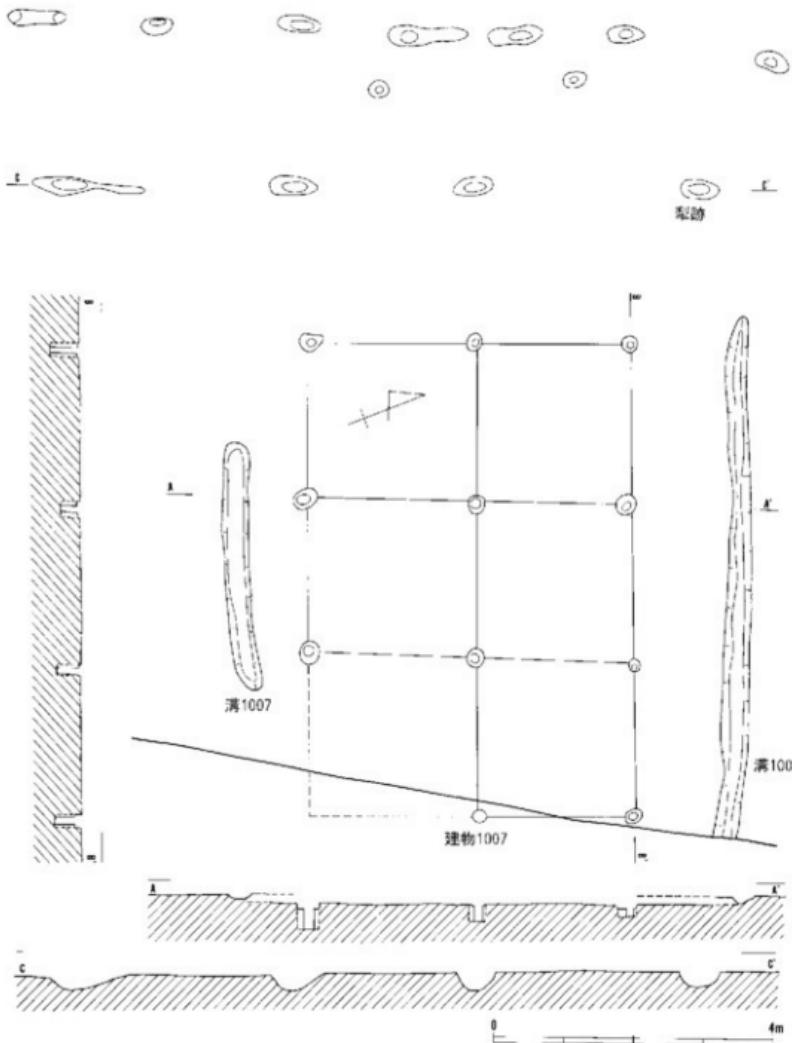
第23図 屋敷地B全体図



第24図 建物1005



第25図 建物1006



第26図 建物1007・溝1006・溝1007・軸跡

溝1006からは土師器小皿（321）が出土しており、時期は12世紀と考えられる。

また、建物の前面（西側）には軋跡と考えられる不定形のピット列が2列検出されている。ピット列はN21°Eに方位をもち建物と同時期の軋跡と考えられる。

③井戸（第27図、図版26下）

井戸は建物1005・建物1006間で井戸1005を一基だけ検出している。

井戸1005は径1.5mの円形を呈しており、深さは約1.0mを計る。下層の旧河道の砂層まで掘り込まれている。

井戸底には径75cm前後の井戸もしくは水溜を据え付けていたと考えられるが、井戸廃絶時に掘り返され、抜き取られており、曲物の側板片が若干出土したに止まつた。

井戸底からは曲物片のほか竹片、一辺約3mmの紐いひご状の木製品（317）が出土している。

これらの竹片・ひご状の木製品は、井戸埋めに伴う祭祀に使用された可能性もある。

④土壤（第23図、図版二五上）

建物1006の東隣に位置している。径約0.8m・深さ約0.1mの極浅い皿状の遺構である。

汚れた灰色極細沙を埋上とするが遺物はない。土壤はこれ以外には検出されず建物1006との位置関係からも屋敷地に伴うものと考えられる。

⑤溝（第23図、図版二五上）

溝は建物1005にそって1本、建物1007の南北に2本の計3本検出されているが、ここでは建物1005の両を走る溝1011についてのみ述べておく。

溝1011は幅1m・深さ約0.15m、浅いU形の断面形状をとる。建物1005の南側を約6m離れ、N30°Eに走行をとる。東端で南北方向の極小さな溝が取りつくが同時存在か否かについては不明である。

溝の一部分には杭を多数打ち込んだ痕跡があり、屋敷地への出入り口となる簡易な橋もしくは踏み板程度の施設が存在した可能性が考えられる。

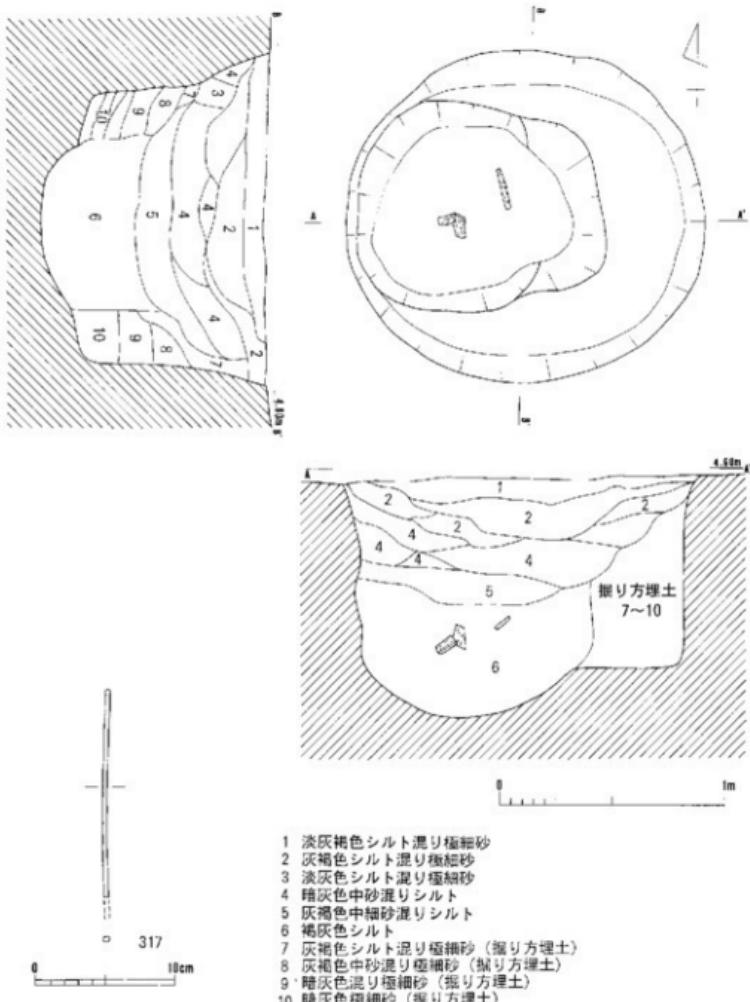
溝内からは土師器皿片・鏡片、東播系須恵器こね鉢片、須恵器壺胴部片が出土している。遺物の時期は14世紀代である。

c) 水田（第5図、図版二八）

水田に伴う遺構として畦畔の痕跡と溝があげられる。

畦畔の痕跡は屋敷地Aの西側で若干検出した。N65°WからN67°Wに方位をとるもので、層位的には屋敷地Aよりも新しい時期の畦畔の痕跡と考えられる。数枚の畦畔の痕跡が重なって検出されており、規模等は不明である。

溝は調査区中央南よりで溝1013・溝1014調査区東端のトレンチで溝1016を検出している。溝1013は幅0.7m・深さ0.1mの浅い皿状の断面形状を呈する。溝1014は溝1013と切り合い、新しく幅0.8m・深さ0.3mのU状の断面形状を呈する。共にN63°Wの方針をとる。溝1016はN29°



第27図 井戸1005・出土木製品

Eに方位をとる。

溝からは須恵器・瓦片が出土している。

3. 第2面の概要（第28図、図版29・30・31）

第2面は出土遺物から8～9世紀を主体とする遺構面と推定する。この遺構面は吉田南遺跡を代表する遺構である官衙推定建物群と時期的にも近く、調査地区も近接地であることから本調査区で官衙に関連する遺構・遺物の検出が期待されたが、調査区北端で柱穴群、調査区全域に広がる溝を検出したのみである。また、第1面の概要で触れた井戸1001下層、井戸1004も本遺構面に属している。

4. 第2面の遺構

①柱穴群

合計47個の柱穴が東西約15m、南北約5mの範囲にL字状に分布している。いずれの柱穴内からも遺物の出土はみられず、所属時期は明確にできていない。柱穴は平面形が円形を呈するものが大半であるが、少數隅丸方形を呈するものがある。しかし全般的に1辺20～30cmと小規模である。

柱穴群の西・北端は第1面検出の屋敷地Aの縁に切られており不明であるが、柱穴が縁の外側で検出されていないことから、ほぼ今回の検出範囲で収まるものと推定される。南端は溝2003を境に南側に広がらない。また、柱穴の東西の広がりも溝2003に平行している。従って後述する溝2003はこの柱穴群に関連するものの可能性が高い。

柱穴群は掘立建物を復元しえなかつたが、柵列として捉えられるかもしれない。なお、柱穴群の周囲を含め調査区北端一帯は、火災を受けたためか炭及び焼土が散布している。

②溝

溝は、計25本検出した。すべて水田に伴う水路と考えられるが畦畔等は一部で検出されたのみである。また、鉛錆等の耕作痕と推定される遺構も溝として報告した中に含まれる。

溝からは出土遺物が少ないため、各溝の所属時期を明確にできないが、溝のもつ方向が時期差を示すと想定した場合、次の4種に大別することが可能である。

I N35° Wの方向をとるもの。

II N10～15° Wの方向をとるもの及びそれに直交するもの。

III N15° Eの方向をとるもの。

IV N27°～30° Eの方向をとるもの及びそれに直交するもの。

このうち、I・IIの溝は地形の影響による差異で同一と捉えることも可能ではあるが、断定はできない。

I の溝は、溝2025が1本該当する。

溝2025 幅1m・深さ0.1~0.12mを測る。南北両端とも調査区外に続く。

IIの溝は、溝2006・2024の2本が該当する。また、溝2013も方向が近似する。

溝2006 幅1m・深さ0.08~0.2mを測る。北側は調査区外へ続き、南端は屋敷地Aの堀に切られて不明であるが南へ深さを減じながら延びることから調査区内で消滅するものとみられる。この溝に取りつく若干の鞋跡が検出されている。

溝2024 溝2006とほぼ直交する方角を持つ。幅0.3m・深さ0.03mを測る。小規模な溝であることから跡跡の可能性がある。溝2016と切り合うが、前後関係は明らかにできなかった。

溝2013 最大幅1.8m、深さ0.05m~0.2mを測る。東へカーブし、調査区外へ延びるものとみられる。北端は調査区内で消滅するものとみられる。溝底には足跡が認められる。埋土内より瓦片等の遺物が出土しているが、時期窓を持っている。溝2013は他の溝が直線的のに対しカーブを描いていること、断面観察で明瞭な溝肩が認められないこと等の理由から溝以外の遺構とも考えられる。

IIIの溝は、溝2005が1本該当する。この溝がもつ方向は、8世紀後半に属する吉田南遺跡及び出合遺跡検出の官衙推定建物がもつ方向とほぼ一致する。

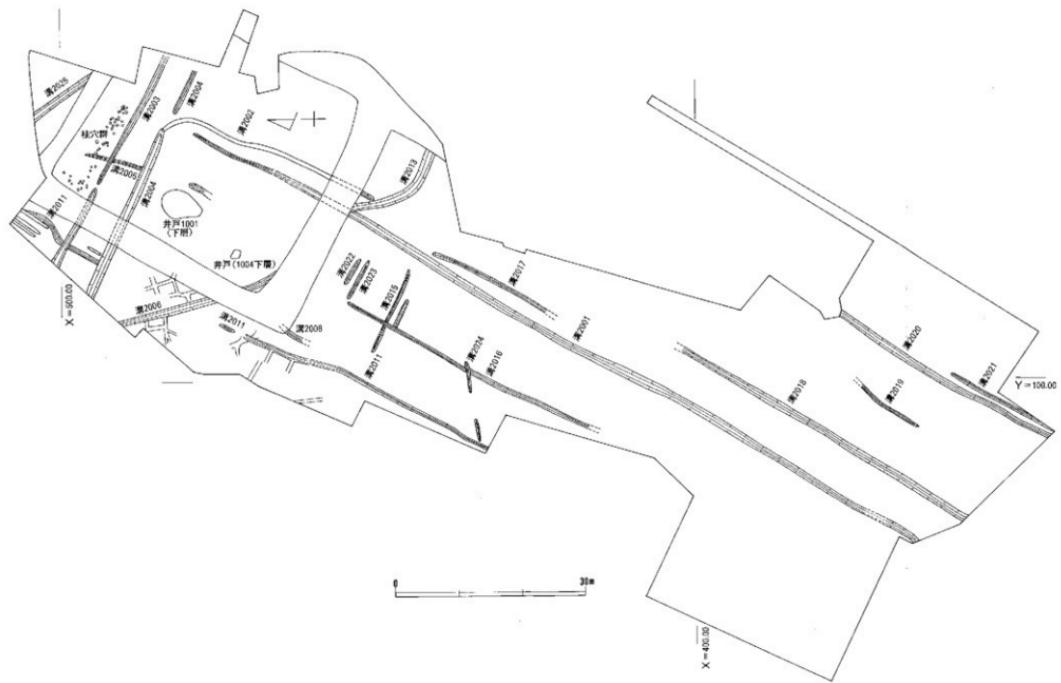
溝2005は、柱穴群と重複して検出した。溝の両端とも調査区内で消滅し、検出長約9.5m・幅約0.2mを測る。柱穴・溝2003・溝2004に切られている。

IVの溝は、I・II・III以外の溝全てが該当する。この溝がもつ方向は、明石川流域にみられる条里制地割にほぼ一致し、周辺遺跡の平安後期~鎌倉期の遺構にもこの方向を持つものが多い。第1面検山の中世後半近世・近代の溝も基本的にこの方向をもつ。

第2面のいずれの溝も断面がU字状を呈し、明黄褐色又は灰白色のシルト質細砂を埋土とする。全般的に南北に延びる溝が溝2001・2018・2020のように幅50cm以上、深さ10cm程度と比較的規模が大きく掘り込みがしっかりしているのに対し、東西のものは小規模で、深さも5cm以下と浅く断片的に残存している傾向にある。

溝2003は、前述したとおり柱穴群を区画する性格を持つ可能性があり、規模も南北方向の溝に匹敵することから、地割境の溝と見ることもできる。埋土内に炭・焼土を含む他須恵器長頭壺が出土している。隣接する溝2004は本溝に平行している。この2本は幅約5mの道路側溝となる可能性もあるが、断定出来ない。

以上のように溝の方向からみて、少なくとも調査区周辺の地割は、IIIの方向からIVの方向へ変遷することが確実に認められる。時代が下がるにつれ方向が東へ偏っていることを考えると、大きく西へ振ったI・IIの方向を持つ溝は8世紀を遡る可能性が考えられる。



第28図 A地区第2面全体図

5. 第3面の概要（第29図、図版33～35）

調査区の北半と南半の2ヶ所において水田に伴う溝・畦畔・掘立柱建物を検出している。両地点はいずれも微高地にあたり、谷部にあたる調査区の中央部では上層からの土壤化の程度と相まって、平面での遺構の検出はできなかった。

遺構を検出した面は主に第IX層にあたり、弥生時代後期～古墳時代前期の時期と考えられるが、第VII層の遺構及び更に上層の第2面の遺構としてとらえられるものも一部第IX層で検出している。

6. 第3面の遺構

北半部の遺構・南半部の遺構に分けて述べてゆくこととする。

a) 北半部の遺構（第29図、図版33・34）

水田に伴う遺構として3本の溝及び不定形な区画となる水田畦畔の痕跡を検出した。

①溝（第29図、図版33・34）

溝は溝3001～3003の3本を検出している。

溝3001は調査区北北西壁より延びて南へ走る溝である。中央で溝3003が取りつく。幅約1.2m・深さ約0.25mで浅いU字形の断面をもつ。埋土は褐色土である。溝の終息は明確ではないが南端で西へ屈曲するものと考えられる。溝内より古式土師器片と考えられる土器片が若干出土している。

溝3002は調査区北東壁より延びて北北西壁へと入る溝である。幅約0.8m・深さ約0.2m、浅いU字形の断面をもつ。埋土・層位から見て溝3001と同一層位にあり、溝3001と同一もしくは溝3003ともども溝3001に取りつく溝である可能性が極めて高い。

溝3003は溝3001に西側より取りつく溝である。幅約0.5m・深さ約0.1mで浅いU字形の断面をもつ。埋土は褐色土である。

以上の溝3001～3003は第VII層を肩部の土とするもので、後述する第IX層において検出した水田畦畔よりも新しい水田に伴うものであると考えられる。

②水田畦畔の痕跡（第29図、図版33・34）

畦畔の痕跡は、その殆どが畦畔下の還元化した変色によって認識しており、不分明な所が多い。また、数枚の水田に伴う畦畔の痕跡が同一面で出現している可能性也非常に高い。

畦畔の全体的な状況としては微高地の縁辺に沿って扇形に展開している状況が伺える。

水田の規模が明確な畦畔の検出はないが、東半部には2条の溝状の畦畔が南北方向にあり、縱長に細かく区切られた状況が伺える。畎畠の痕跡と考えられる。

また、北北西端には2条の畦畔がS字状に走る部分が検出されており、『ぬるめ』状の遺構

の可能性が考えられる。

b) 南半の遺構（第29図・第30図・第31図、図版35）

南半部は遺構ののる微高地とその縁辺を巡る旧河道に位置している。

水田に伴う溝、第2面に相当する可能性の高い建物2棟、住居址状遺構を検出している。

遺構は旧河道の埋没・微高地の成長過程によって3面前後に分けることが出来る。

土層堆積模式図を第31図にあげた。旧河道の堆積Bとしたものは遺構面を形成する以前に本調査区を大きく流れるものである。旧河道の堆積Bはポイントバー①～③を順次形成し、徐々に埋没してゆく。ポイントバーの内側に遺構が出現する時点では旧河道は幅10m程度になり（旧河道の堆積A）、最終的には完全に埋没する。

旧河道が完全に埋没した時点で形成される遺構面（1a面）は北半部の第3面・B地区の第1面に相当すると考えられ、弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物が多量に出土している。

1a面より下層には2面程度の面が考えられ、溝3101・溝3102が検出されている。これらの溝は水田の用水に伴うものと考えられ、旧河道の埋没に従って掘削されていったものと考えられる。

これに対して1a面には水田の用水に伴う溝は検出されておらず、住居址状遺構・土壌の存在、多量の土器が出土していることなどから推して、生活址としての土地利用がなされていた可能性が高くなっている。

①建物（第30図、図版35下）

擲立柱建物を2棟検出した。

建物3001

東半に位置する。N85°Eに長軸をとる南北梁行2間（3.8m）・東西桁行3間（3.8m）の側柱建物である。内部に位置する柱は小径で間仕切りの柱と考えられる。

建物の方位から推して、第2面目において検出した溝2006の走行に近く、第3面で検出しているが、同時期の建物である可能性が考えられる。

建物3002

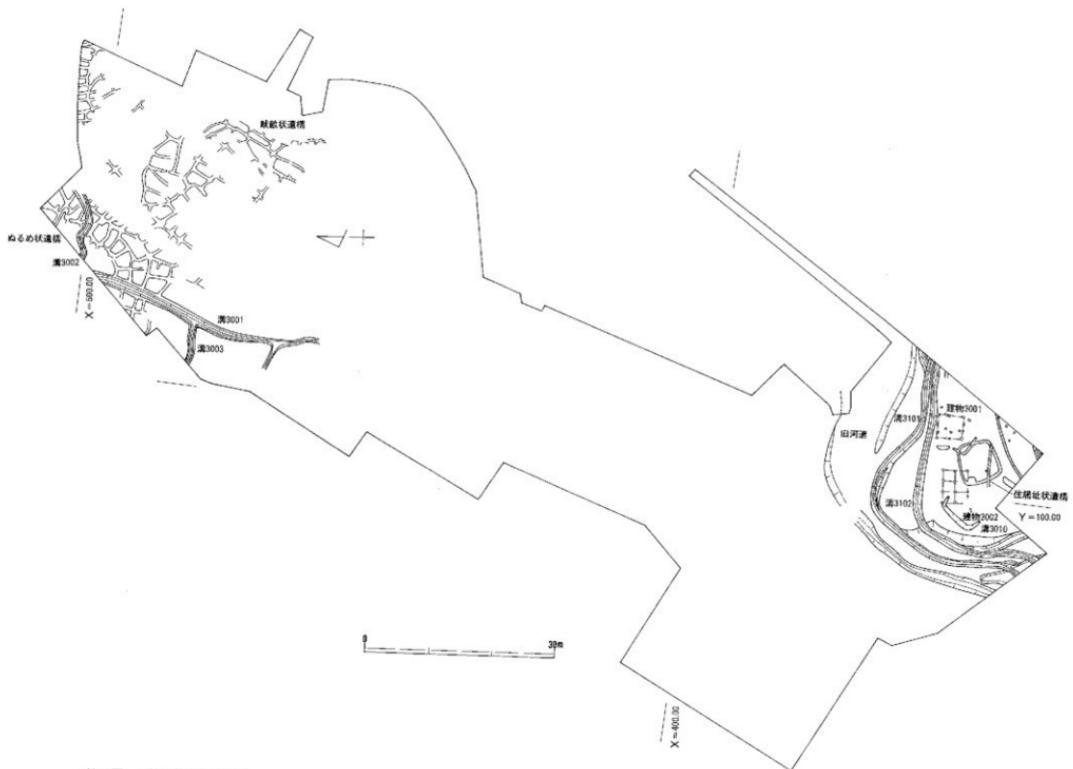
建物3001の西側に位置する。N83°Eに長軸をとる南北梁行2間（3.9m）・東西桁行3間（5.8m）の総柱建物である。

建物の方位から推して、建物3001と同じく第2面目において検出した溝2006の走行に近く、第3面で検出しているが同時期の建物である可能性が考えられる。

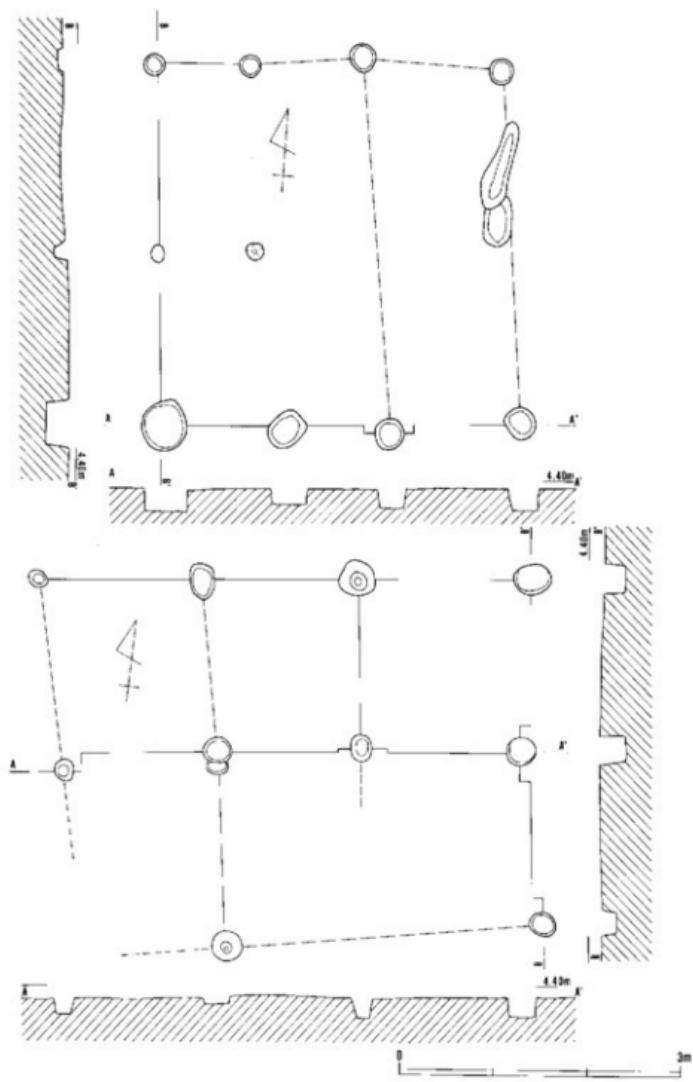
②住居址状遺構（第31図、図版35下）

建物3002と重複し位置する。層位的には1a層より切り込む遺構である。

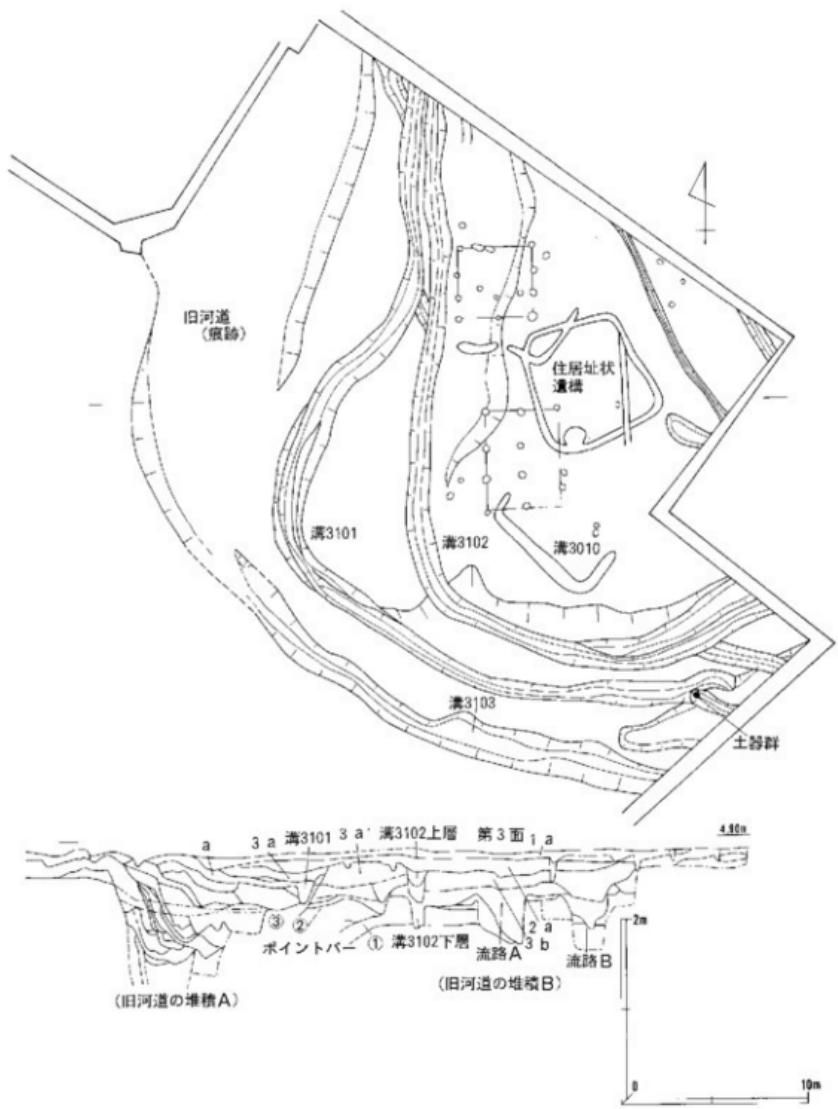
幅約0.2m・深さ約0.15mのU字形の溝が不整な隅丸方形状に巡る。規模は南北約6.0m・東西約5.7mを計る。隅丸方形の南西隅には径約110cm・深さ約8cmの土壌が存在する。



第29図 A地区第3面全体図



第30図 建物3001(上)・建物3002(下)



第31図 第3面造構配置図(A地区南半)・土層堆積模式図

遺構の性格は住居址の可能性があるが、方形に囲まれた内部からは区画に伴う柱穴は検出されておらず詳らかではない。

遺物は溝内から土器片が出土しており、時期は古墳時代初頭前後と考えられる。

住居址状遺構の北東隅には『く』の字に彎曲する溝が重複しており、また、『コ』の字に通る溝3010についても同様の形状・性格の溝と考えられる。

溝3010は幅約0.6m・深さ約0.1mの規模を持ち、溝内からは多量の土器が出土している。時期は古墳時代初頭前後と考えられる。

③溝（第31図、図版35.1.）

水田の用水に伴うと考えられる溝3101～溝3103を検出している。

溝3101は幅約0.8m・深さ約0.2mの規模、U字形の断面形状を持ち、旧河道Aが埋没する最終段階で微高地の縁辺を東から西南へと走っている。調査区の南端の部分では分枝しており、土器群が検出されている。用水の取り入れ口に伴う祭祀と考えられる。

溝3102は上層・下層の二つに分かれる溝である。下層の溝は溝3101よりも古い時期に掘削されており幅約0.4m・深さ約0.3mの規模である。この時点では、微高地の形成も充分ではなく、流路A・Bといった複数の溝が同時に存在していたようである。

溝3102は上層は溝3101が埋没した後に掘削されたと考えられる。幅約0.5m・深さ約0.3mの規模である。

溝3103は旧河道Aがほぼ完全に埋没した時点で掘削されたと考えられ、旧河道の縁に沿って掘削されている。幅約2.0m・深さ約0.4mの規模である。

これら溝の時期は出土遺物からみて、弥生時代後期末に納まるものと考えられ、極めて短い時間の内に掘り替えられていったものと考えられる。

第3節 遺物

1. 第1面の遺物

溝1001・溝1003出土の江戸時代の遺物と塗敷地A・Bに伴う各遺構から出土した古代末～中世の遺物がある。この内、溝1001の遺物は土器・木器・金属器の多種にわたり、また出土遺物量がもっとも多いものである。

溝1001の出土遺物

土器（第32図～第40図、図版45～56）

出土した上器は上師質土器（無釉・施釉・瓦質）・陶器（無釉陶器・施釉陶器）・磁器に渡る。以下、種別・器種別に述べる。

(1)～(28)は土師質土器の範疇で捉えられるものである。

(1)～(20)は上師質小皿である。回転糸切り手法による底部切離し・ロクロナデ調整を施すロクロ成形の皿(1)～(8)と、口縁部内外面がヨコナデ調整・体部外面がユビオサエ調整を施す手づくりによる(9)～(19)と、ロクロを使用し釉を施した(20)がある。(1)～(8)は明石城武家屋敷跡(1992年)のB類、(9)～(19)は同A類に相当する。法量の点では前者は8cm前後、後者は10cm前後を計る。また、(8)には灯心が入る孔として底部に穿孔が制作時より施されている。後者は、外面のヨコナデが杯部の約半分まで施される(9)～(15)・(19)と口唇部付近に止まるもの(16)～(18)に細分できる。(20)は透明釉を内面と外面中位まで施したものである。

(21)は鹽水入れの破片である。底部外周以外には透明釉を施している。

(22)は上師質火消し壺の蓋口縁部片である。側面に墨書きが存在するが読みは不明である。

(23)は焰硝である。外面体部に凹き目を残していない。明石城武家屋敷跡(1992年)の土師質鍋器形分類のB類に該当する。

(24)～(27)は銷座である。

(28)は瓦質土器の底部である。火舎の底部片と考えられる。

(29)～(52)は無釉陶器をあげた。

(29)～(32)は無釉陶器皿である。(29)は明石城武家屋敷跡(1992年)の無釉陶器皿A類に相当する。体部外面のロクロ削りは体部中位まで及ぶ。(30)～(31)は受口部をもつB類に相当する。この内、(30)は受口部が口縁端部とほぼ同じ高さにある。また、灯心を置く抉りを入れている。(31)は受口部が口縁端部よりも上部に出る製品である。灯心を置く抉りは受口部の付け根に窓をあけてつくり出している。(32)はA類の形態に耳を貼り付ける個体である。ロクロ削りは体部上位まで及んでいる。

(30)～(32)は焼成等が類似しており同一産地と考えられるが、産地は不明である。

- (33)～(35)は火入れである。(33)は貼り付けの把手が着くもので丹波焼である。
- (34)は体部外面下半・内面上半に釉がかかる。
- (35)はやや径に対して器高の低い浅筒型の火入れである。
- (36)は片口鉢である。体部外面上半に釉がかかる。肥前系陶器。時期は17世紀後半から18世紀前半と考えられる。
- (37)はこね鉢である。
- (38)～(45)は擂鉢をあげた。うち、(38)～(43)は丹波焼擂鉢である。
- (38)は内面へ肥厚した口縁端部をち、7条のクシ目を施している。これは相野窯址分類(1992年)のG2類に相当する。
- (39)は7条のカキ目を施す。相野窯址分類(1992年)のE類、(40)は5条のクシ目を施す。F類に相当すると考えられる。
- (41)(42)はそれぞれ7条・8条のクシ目をもつ。
- (43)は6条のクシ目をもつ。口縁端部は切り離した状態、口縁部内面に凹線をもつ。下相野窯址分類(1992年)A類、17世紀初頭の時期が考えられる。
- (44)は三角形に肥厚した口縁部外側面に1条の沈線が巡る。内面口縁端部直下には稜をもつ、内彌して体部に至っている。クシ目は10条が1単位で施されている。備前焼の可能性が考えられる。
- (45)は外側面は幅広く、3条の沈線が巡る。クシ目は10条が1単位で施されている。撲焼もしくは明石焼ではないかと考えられる製品である。
- (46)～(48)は壺・瓶類である。
- (46)は頸部にカキ目を施す。底径約5cmの小振りな瓶である。
- (47)には底部外面に刻印が押されている。(47)・(48)は共に底部・体部境に削りを施している。(48)は丹波焼の可能性がある。
- (49)は半洞窯もしくは鉢と考えられる製品である。外面口縁部下に沈線を巡らす。洞部には横方向の『叩き』を施す。外面には釉がかかる。
- (50)は壺もしくは甕の肩部片である。内面には格子目状の叩き痕が残る。肥前系陶器。時期は17世紀後半から18世紀前半と考えられる。
- (51)は口縁部内径30cmを計る大型の甕である。口縁部は内外に水平に拡張し、面上に沈線がある。また、体部外面には8条以上の沈線が巡っている。丹波焼と考えられ、器高は50cm前後の製品であると考えられる。
- (52)は壺の肩部片と考えられるが小片のため定かではない。肩部に1条の凹線をもつ。
- (53)～(84)は施釉陶器をあげた。
- (53)～(66)は碗であり、うち(55)・(64)・(66)を除いては肥前系陶器である。

(53)～(56)は『京焼写し』もしくは『京焼風』と呼ばれる肥前系の施釉陶器碗である。

(53)・(54)はやや腰の張る器形で、体部外面には樓閣山水文を呉須描きした後に器面に透明釉を施している。精良な胎土をもち全体に黄色味の強いクリーム色を呈している。(54)は体部外面下位から高台部にかけて露胎で、高台裏には「森」の刻印名がある。ともに時期は17世紀末～18世紀初頭である。

(55)～(57)は呉器手碗で、高台置付きは露胎、(56)・(57)では砂の付着が見受けられる。

(55)は肥前系陶器の可能性が高い。(55)・(56)時期は17世紀末～18世紀前半。(57)は17世紀末～18世紀初頭の製品である。

(58)はやや小振りの鉄釉碗である。体部外面下位から高台部にかけて露胎である。17世紀中葉から末の時期の製品である。

(59)は青緑釉の掛かる内野山窯の製品である。高台内は雜に仕上げられている。置付きには砂目跡が残る。

(60)～(63)は刷毛目を施した碗である。何れも高台置付きを除き釉が掛かる。(60)は内面に刷毛目を施す。1690年～18世紀前半の製品である。(61)は内面に打刷毛目・外面に刷毛目を施す。高台置付きには離れ砂が付着している。18世紀前半の製品である。

(62)は内・外面に刷毛目を施す。1690年～18世紀前半の製品である。

(63)は内面に刷毛目を施し、外面には掌手の技法を施した製品である。1690年～18世紀前半の製品である。

(64)は体部外面下端から高台部にかけて露胎の製品である。柴束を描く。肥前系の施釉陶器の可能性がある。時期は17世紀末～18世紀初頭の製品と考えられる。

(65)は砂目積みの目跡が高台置付きに残る。時期は17世紀前半である。

(66)は天目茶碗の底部である。瀬戸・美濃系の製品である。外面体部上半には天目釉がかかること。体部下半以下は露胎である。1650年～1660年代である。

(67)～(80)は皿をあげた。

(67)～(71)は『京焼写し』もしくは『京焼風』と呼ばれる肥前系の施釉陶器皿である。

(67)～(70)は口径13cm前後の深皿である。

何れも内面底部中央には樓閣山水文を呉須描きした後に器面に透明釉を施している。精良な胎土をもち全体に黄色味の強いクリーム色を呈している。(54)は体部外面下位から高台部にかけて露胎で、(67)の『清水』の他高台裏には何れも刻印名がある。時期は(67)は17世紀末、(68)～(70)は17世紀末～18世紀初頭である。

(71)は底径11cmを計る皿である。内面に樓閣山水文を描く。17世紀末～18世紀初頭の時期と考えられる。

(72)・(73)・(76)は内野山窯製である。(72)は内面に蛇ノ目釉剥ぎが施される。見込み及び

高台疊付きに各4ヶ所の砂目積み痕が残る。18世紀代前半の時期である。

(73)は中皿もしくは鉢である。内面に蛇ノ目釉剥ぎが施され、鉄泥漿を塗布している。

(74)は中皿である。内面に蛇ノ目釉剥ぎが施され、鉄泥漿を塗布している。17世紀後半～18世紀初頭の時期と考えられる。

(75)は12弁の輪花皿である。内面には刷毛目を施す。高台疊付きは露胎である。

(77)・(78)は三鳥手の大皿である。(77)は蓮弁・花、(78)は蓮弁の豪族を施す。17世紀後～18世紀前半の時期と考えられる。

(79)は見込みに砂目積み痕が残る皿である。17世紀前半の時期と考えられる。

(80)は二彩手の大皿である。17世紀後半～18世紀初頭の時期と考えられる。

(81)～(84)は筒形の容器である。

(81)は『京焼写し』もしくは『京焼風』と呼ばれる肥前系の施釉陶器の向付と考えられる。内面の口縁部以下及び外由底部は露胎である。17世紀末の時期と考えられる。

(82)は香炉と考えられる。口縁部は内面に折り曲げて玉縁状に造りだし、内面の口縁部・外腹体部に黒褐色釉を施している。

(83)は小破片の為器形は明確ではない。隅丸方形に近い不整円の筒形の容器で、火入れ・香がなどが考えられる。形状は口縁端部は上部に面を持ち、外側面を一部窪ませている。破片の下端は屈曲をみせており、体部・底部の境になるとされる。口径は10cm前後、器高は6cm前後と推定される。口縁部内外面には黒褐色釉を施している。

(84)は六角もしくは陶落としの四角形の筒形の容器である。外腹体部に線刻・スタンプによる装飾を施し、外面及び口縁部端に線釉をかける軟質の施釉陶器である。

(85)は徳利の下半部である。外面に刷毛目を施す。

(86)～(130)は磁器をあげた。うち、(86)～(109)は肥前系磁器碗類である。白磁・青磁・染付・色絵の製品があり、器種では小杯・猪口・碗がある。

(86)・(87)は口縁部が端反りする染付の小杯である。(86)は口径約7.0cm、17世紀末～18世紀前半の時期と考えられる。(87)は口径約4.7cmを測る。

(88)・(89)は(86)・(87)に比べ口径がやや大きい。(88)は白磁で口径約8.0cm、17世紀末～18世紀初頭の時期と考えられる。(89)は染付で口径約9.6cmの口縁部が端反りする小碗である。外面に蝶を描く。1650年～1660年代の時期と考えられる。

(90)は杯部が外方へ真っ直ぐ開くコンニャク印判手の猪口である。外面の文様は折松葉と菊文であろう。口径約8.0cmを測る。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(91)・(92)は半球形の器形をもつ小杯である。器高が3cm前後と低く、皿に近い。

(91)は紅茶を印したコンニャク印判手の小杯で口径約6.0cm、1690年～18世紀前半の時期と考えられる。(92)は口径約7.0cmを計る、1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(93)～(96)は腰が張らず体部が内寄しつつ外方へ開く器形をもつ碗・小杯である。口径は8cm強とやや小振りである。

(93)は小片であるが、芙蓉手の小杯と考えられる。17世紀後半の時期と考えられる。

(94)は白磁碗である。口径約8.0cmを計り、高台置付きは露胎である。

(95)は染付碗である。口径約8.6cmを計る。外面には型紙刷りの技法によって『南無』の文様が施されている。1690年～18世紀前半の時期の有田製と考えられる。

(96)は色絵の小杯である。内面に燕が描かれている。

(97)は染付碗で、コンニャク印判によって外面に草花文を施す。口径約8cmを計る。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(98)は白磁碗である。口径約8.2cmを計る。

(99)は所謂、くらわんか手と呼ばれる粗製の尖付碗である。外面に草花文を施す。高台置付きには砂が付着する。口径約8.8cm、17世紀末～18世紀前半の時期と考えられる。

(100)は色絵の染め付け碗である。口径約9.8cm、外面には梅花文であろう。17世紀後半～18世紀初頭の時期の有田製と考えられる。

(101)は染付碗で、口径約10.0cm、外面に橋と草花を描く。また、高台裏には「大明年製」の崩れ鉢が書かれている。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(102)は染付碗で、口径約10.0cm外面にはコンニャク印判と手描きの併用で草花を描く。

また、高台裏には「大明年製」の崩れ鉢が書かれている。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(103)は尖付碗である。口径約10.2cm外面には型紙刷りの技法によって梅文が描かれる。

口縁部の文様は槍堀か。1690年～18世紀初頭の時期の有田製と考えられる。

(104)は染付碗で、口径約10.1cm、外面にはコンニャク印判と手描きの併用で紅葉を描く。また、高台裏には「大明年製」の崩れ鉢が書かれている。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(105)は染付碗で、口径約10.2cm、外面に橋と草花を描く。また、高台裏には「大鉢年製」の崩れ鉢が書かれている。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(106)は青磁染付碗である。内面には型紙刷りの技法によって五井蓮花が描かれる。18世紀初頭の時期と考えられる。

(107)は染付碗で、口径約9.4cm、器高6.0cm底径約5.4cmを計る。草花が描かれ、1670年～1700年の時代と考えられる。

(108)は染付碗で底径約5.4cmを計る。波文が描かれ、1670年～1700年の時期と考えられる。

(109)は青磁碗で、口径約11.0cmを計る。17世紀中葉の時期と考えられる。

(110)～(116)は肥前系磁器皿類である。うち、(110)～(112)は手塙皿。

(110)は口径約9.0cmの染付輪花皿。六弁と考えられる。外面には宝文には唐草文を施す。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

(111)は糸きり粧工の染付手塙皿。内面に草花文(水仙か桔梗か)を描く。長径11.0cm。17世紀末～18世紀初頭と考えられる。

(112)は口径約8.0cmの菊花型白磁皿。内外面に菊花、見込みに陽刻(寿か)を施す。

(113)(114)は小皿である。(113)は口径約13.0cm、内外面に染付を施す。高台骨付きにはハナレ砂が融着する。17世紀後半の時期と考えられる。(114)は口径約13.6cm、外面には宝文、内面には草花文(菖蒲か)を施す。高台置付きにはハナレ砂が融着する。1670年～1690年の時期と考えられる。

(115)は底径約13.0cmの中皿「七寸皿」である。内面には色紙に波文・草花文・紅葉?を描く。高台裏にはハリ支え痕が2箇所残る。1660年～1680年の時期の有田製と考えられる。

(116)は粗製の白磁小皿である。口径12.9cm見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。17世纪末～18世纪前半の時期と考えられる。

(117)は青磁三足香炉である。外面及び内面体部下半まで施釉される。口径約12.2cm。17世紀後半の肥前系磁器と考えられる。

(118)～(123)は染付・青磁の瓶・壺類を上げた。いずれも肥前系りーの磁器と考えられる。

(118)は染付油壺。明オーリーブ灰色を呈し、やや粗製である。17世紀末～18世紀前半の時期と考えられる。

(119)～(122)は瓶類。(119)(121)は17世紀末～18世紀前半、(122)は17世紀後半に逆上する可能性が高い。(119)は草花文、(120)は虫を描く。

(123)は青磁壺。高台置付部は露胎。1630年～1650年の時期が考えられる。

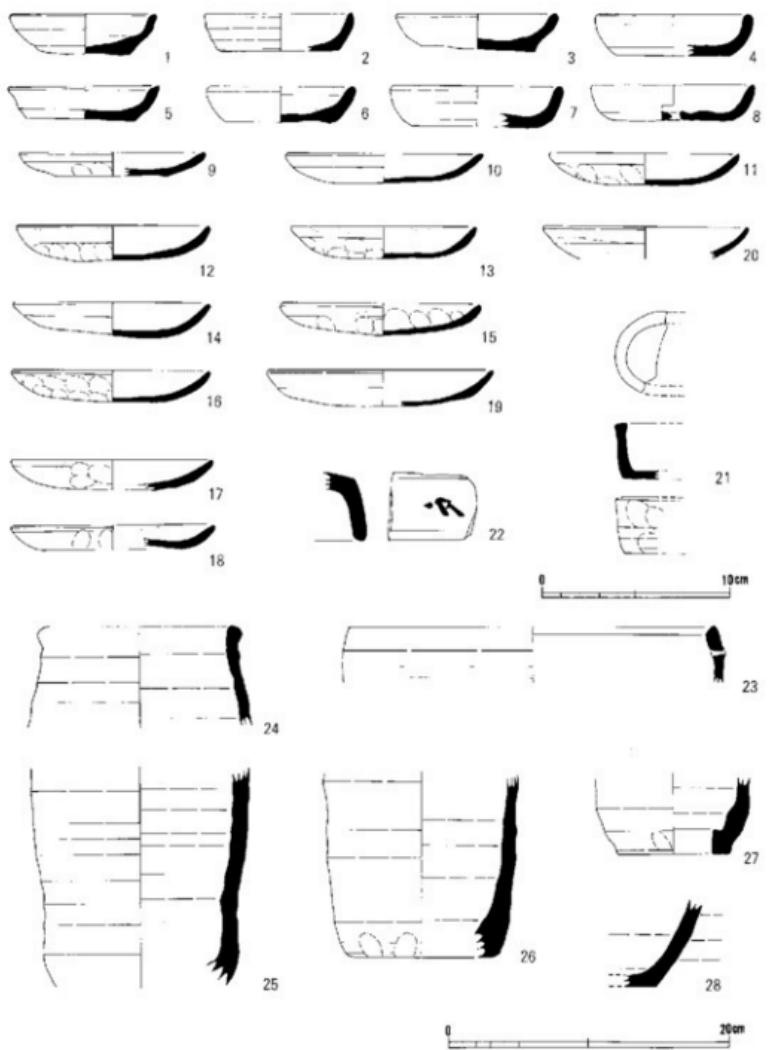
(124)肥前系磁器の蓋類。径8.2cm。牡丹唐草文を描く。17世紀末18世紀前半の時期と考えられる。

(125)は型押し成形によって造られた口径4.2cmのミニチュアである。輪花は十弁前後、見込みにコンニャク印判によって施文する。1690年～18世紀前半の時期と考えられる。

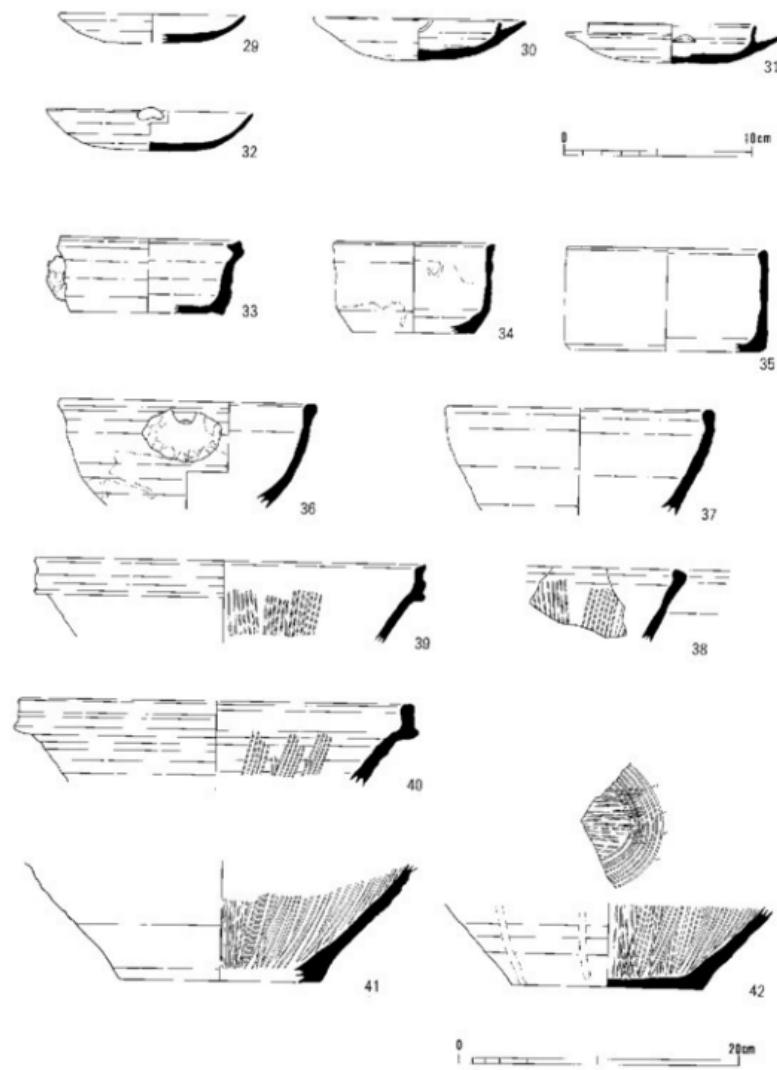
(126)(127)は水滴である。(126)は赤絵の鶴型水滴の胸部の破片。(127)は上部を欠く。ともに17世紀後半～18世紀前半の時期と考えられる。

(128)～(129)は明染付である。(128)は碗片である。牡丹花を描く。口径7.5cm前後と考えられ、明末、17世紀前半の製品と考えられる。(129)は皿片。底径は約9.0cmである。これは溝1002の出上であるが、明染付は今回の出土では2点のみであるため、並べて図示した。やや古く、18世紀代のものである。

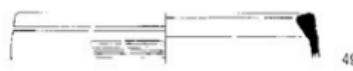
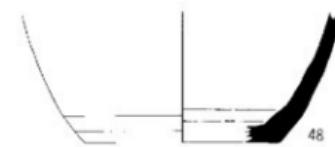
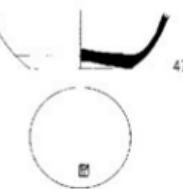
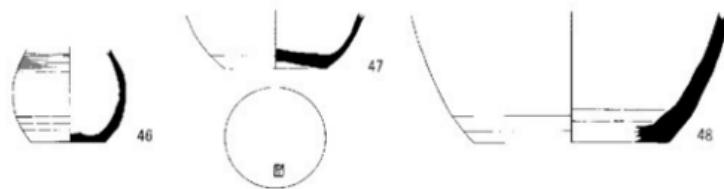
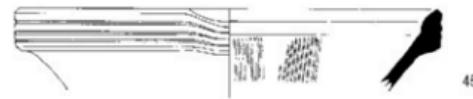
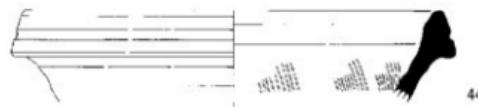
(130)は龍泉窯系の青磁皿を転用した而子である。



第32図 溝1001 出土土器（1）土師器・瓦器他

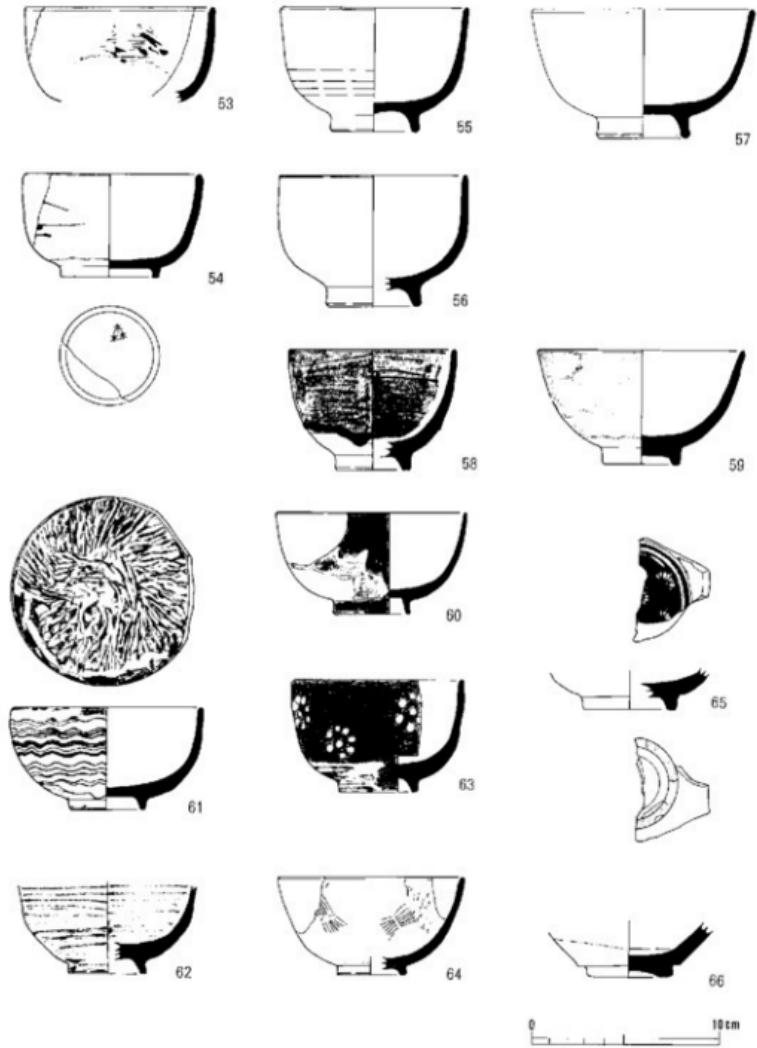


第33図 溝1001 出土土器（2）無釉陶器

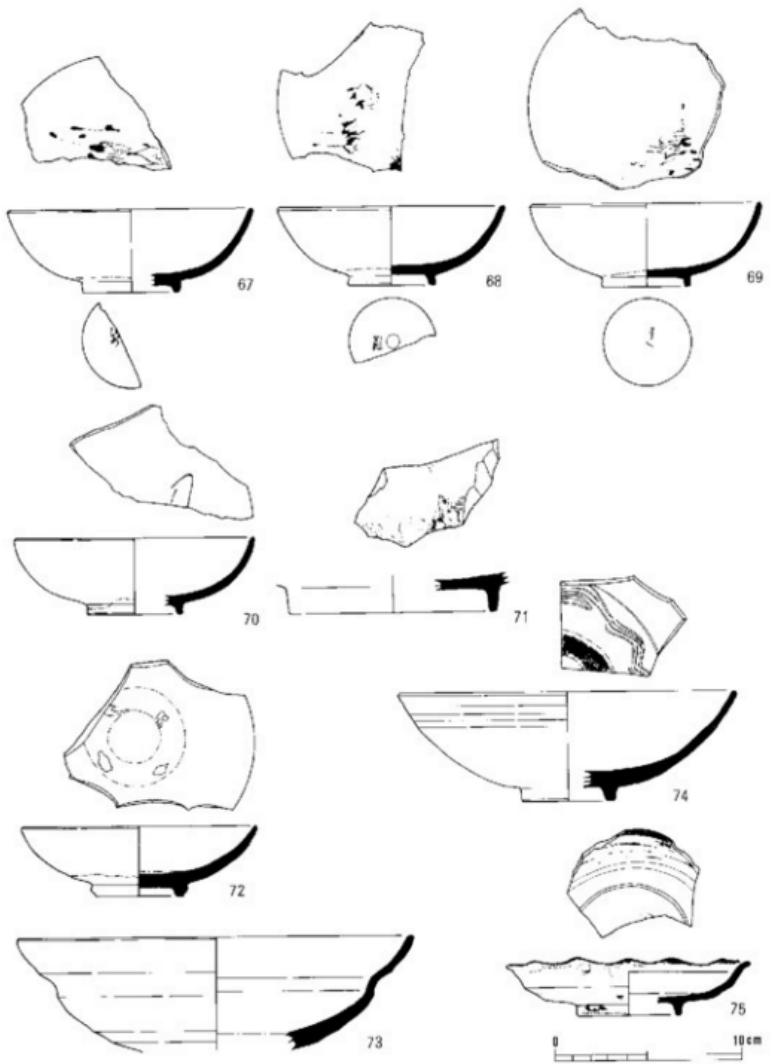


0 20cm

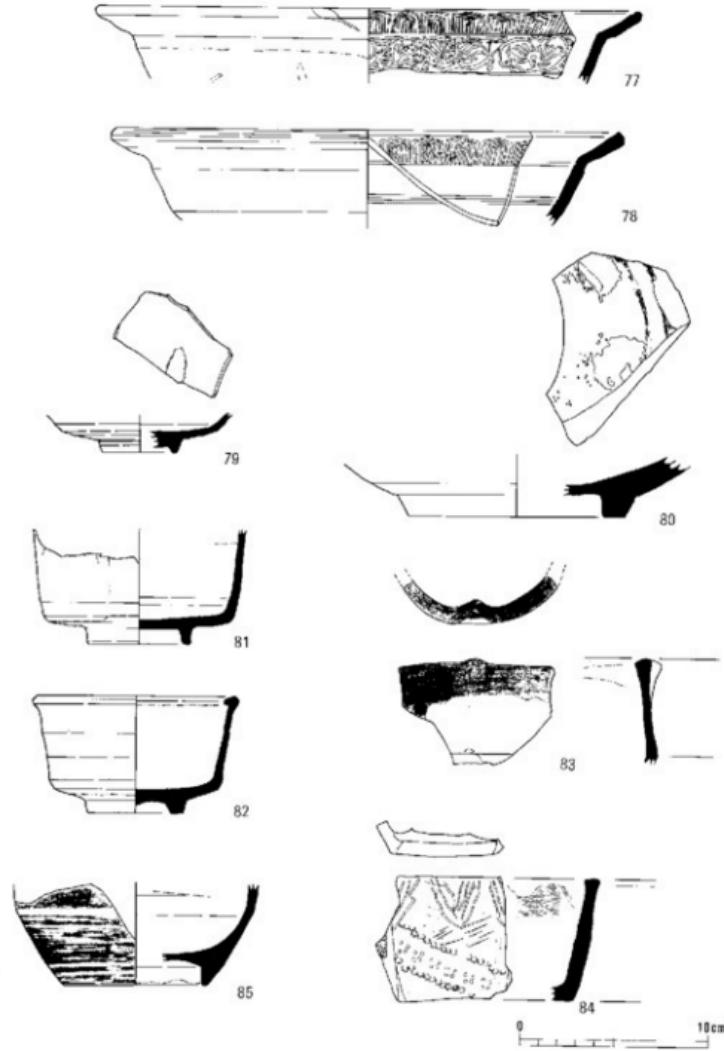
第34図 满1001 出土土器（3）無釉陶器



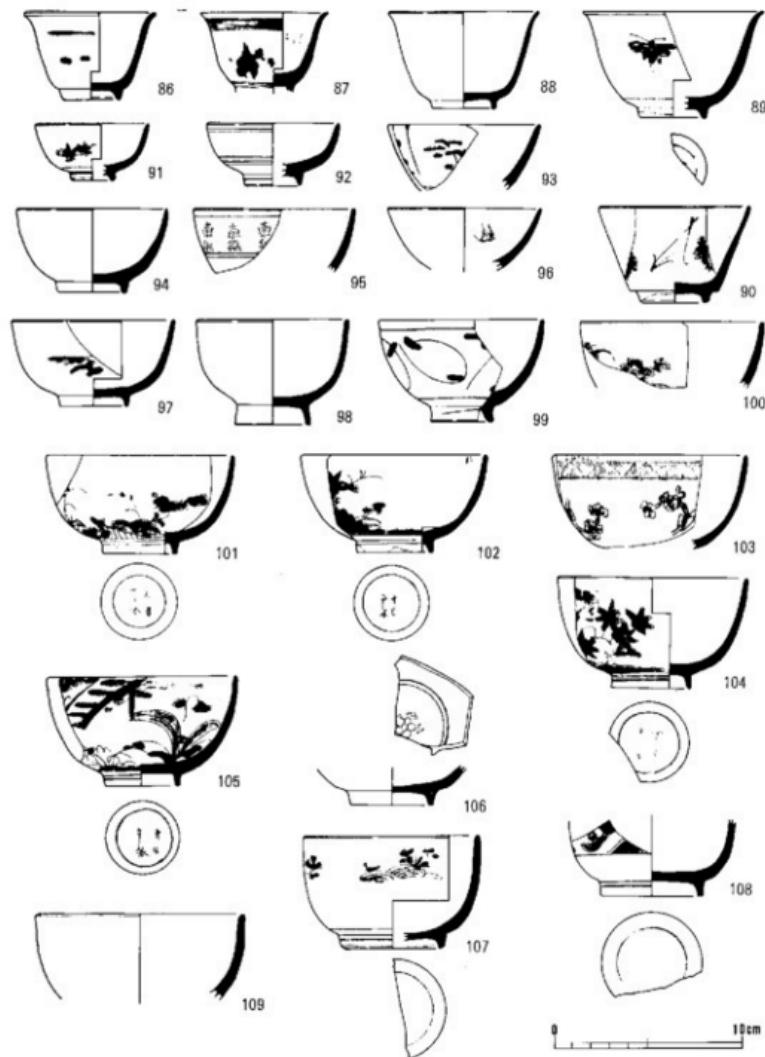
第35図 溝1001 出土土器（4）施釉陶器



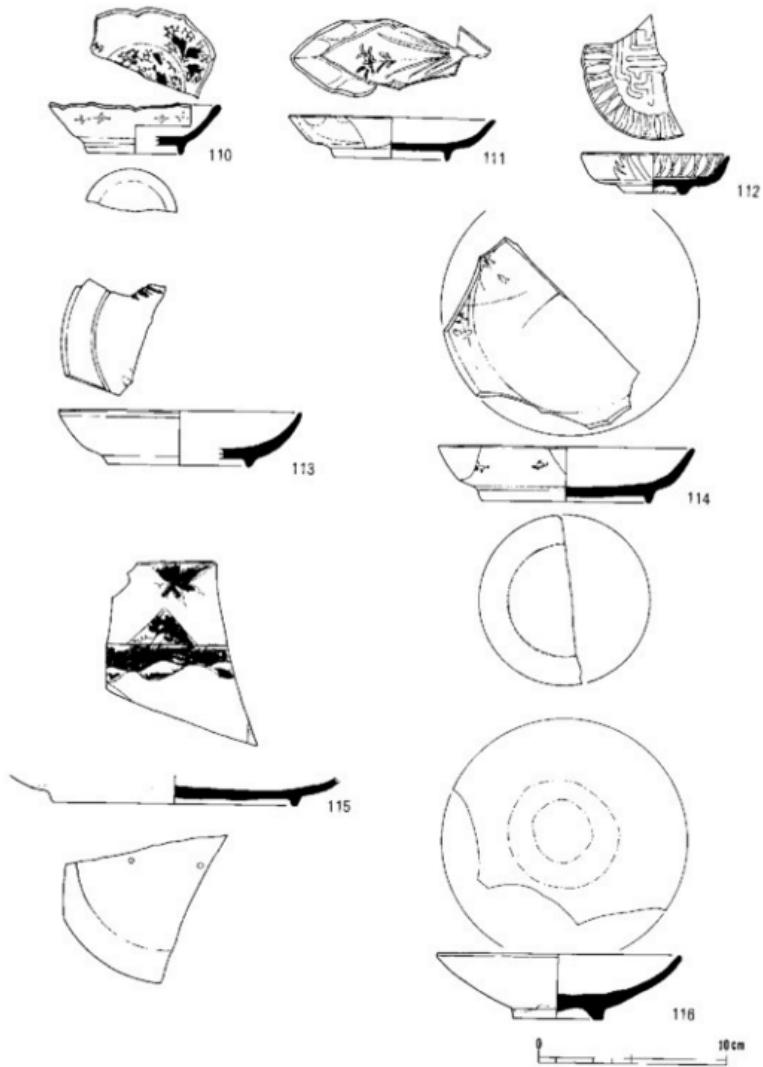
第36図 清1001 出土土器（5）施釉陶器



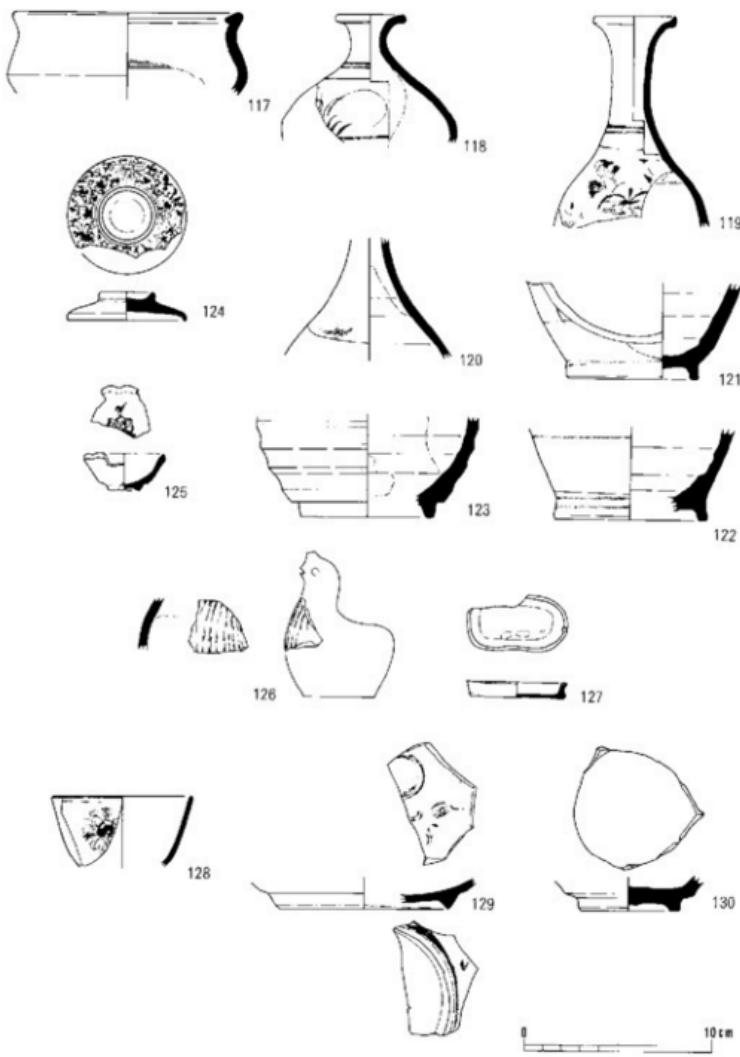
第37図 溝1001 出土土器（6）施釉陶器



第38図 满1001 出土土器（7）磁器



第30図 满1001 出土土器（8）磁器



第40図 溝1001 出土土器（9）磁器・溝1002 出土土器

木製品（第40図～第48図、図版74～80）

満1より出土した木製品は小片を含めると約300点に達する。本報告では内112点を掲載した。ここでは器種ごとに纏めた。

文字が記された木製品

墨書き及び焼き印によって文字が記された木製品は16点出土している。

(131)は宝永参年(1706年)の紀年鉢を持つ。下部を折損している。墨書面より裏面に向かって打ち込まれた木釘が6箇所遺存している。正月吉日の古祥句が書かれており、形状からみて箱物に付けられていたと考えられる。(132)は下部に穿孔がある。一部欠失しているが、ほぼ完全に残る木札である。元々は曲物の底板であったと考えられる。(133)は表面左隅に釘穴とおぼしき穿孔がある。表裏面ともに丁寧に削られており、元々は箱物の材であったと考えられる。(134)は上部・下端の一部を折損する木札である。送り主・送り先の人名が記されている。太郎兵衛の上にある2文字は「鈴木」の可能性が考えられる。(135)は上部・左側を折損する木札である。表裏面ともに比較的に粗に削られている。元々は箱物の材であったと考えられる。中央右隅の穿孔は木札に軽用される以前に施されたものと考えられる。(136)は折敷の底板の破片である。左下端に隅丸の角をもつ。墨痕は3箇所に残るが、文字としては捉えられない。(137)は上部に穿孔、下端が尖る形状をもつ木札である。「ふしへ村」は青田南遠跡の南西約2kmに位置した村名である。(138)は上部に穿孔、下端にむけてやや細くなる形状をもつ木札である。(139)は上端に切り込みを入れる木札である。切り込み部分には縛られていたと考えられる痕跡が残る。墨書きは削られ部分的に残存している。(140)は上端を欠く。下端が尖る形状をもつ木札である。(141)は上部の一部・下端を折損している。角頭の紐身の木札であろう。(142)は上・下端を折損している。(141)と類似するが法量に違いがあり同一の破片ではない。墨書きは右辺で途切れしており、墨書きのある板を再加工したものと考えられる。(143)は下辺以外は全て折損している。(144)(145)は文面、板の材質・厚さからみて元は一枚の板であった可能性が強い。両者とも裁断され一部加工が施されたため、接合はない。(145)裏面の天に続く文字は「神」の可能性が高く、天神と書かれていた可能性がある。(144)(145)は万四郎や天の文字が重複して書かれており、習字に使用された板と考えられる。(146)は焼き印が施されたものと考えられる。

木札状木製品

(147)は(139)と同様の形態をもち、縛られていたと考えられる痕跡が残っているが、墨痕は見受けられない。(148)は端部に穿孔がある。墨痕は見受けられない。

食膳具・容器

(149)～(155)は漆器である。(149)は赤漆を上塗りする蓋である。(150)は黒漆を上塗りする椀、金彩で文様を施す。(151)～(153)は赤漆を上塗りする椀、(151)は黒漆で木瓜文を描いている。(155)は黒漆を上塗りする椀、金彩で草花文を描いている。

(156)はくりものの杯である。

(168)は楊枝である。上端を斜めに削り、下端を尖らせる形態である。断面は長方形であり、下端に刃部を削り出してはいない。

(157)～(167)は箸である。箸は図示した他に9本分の破片が出土している。出土した箸は全て白木であり、塗り箸はない。また、(157)が片口箸(片方の端を細くしてあるもの)である以外は全て寸胴箸(全体に同じ太さに作られているもの)の範囲で捉えられるものである。両口箸(中央部が太く両端を細く削るもの)の出土はない。(157)は作りの粗い製品である。

寸胴箸は断面形状によって大まかには『丸』と『方形』に、また、作りの精粗によってさらに①～③に細分ができる。

丸形の寸胴箸は①～③に細分できる。①断面が丸く、作りが極丁寧なもの—(158)(159)(160)他3点・②断面が丸に近い多角形で、作りが丁寧なもの—(161)(162)他2点・③断面が多角で、作りが雑なもの—(163)(164)他1点である。

方形の寸胴箸は⑤⑥に細分できる。⑤断面が方形で、作りが丁寧なもの—(165)他2点・⑥断面が方形で、作りが雑なもの—(166)(167)他1点である。

これらの箸の内(160)は先端部約2cmが細く削られている。(167)は先端約7cmを多角形に削り出している。(165)は先端約6cmを箇状に削り出している。また粗製品の(163)(164)(167)の3本は大振りな製品であり、料理箸の可能性も考えられる。

(170)～(175)は折敷の底板である。両端の残るものは(170)(171)(175)の3点で小・中・大きさに分かれる。それぞれ、(170)は長さ12.3cm、一边が4寸。(171)は長さ22.3cm、一边が7寸5分。(175)は長さ33.1cm、一边が1尺1寸のものと考えられる。(170)は木釘が残り、脚をもつとのと考えられる。(175)の示す1尺1寸は東京大学医学部付属病院地点^aの出土例及び文献にある『足打御膳』の示す法量である。

(169)は折敷底板片である。板状に再加工され釘状のもので波形の模様が彫られている。

(176)(177)(180)は膳の破片である。(176)は蓋側板と考えられる。内外面に黒漆が施されている。(177)は膳の脚板と考えられる。内外面に黒漆が施されている。くりかた(コの字部分)の左右、足に相当する部分の幅に違いがあることから、あるいは立ち上がり高足膳の脚となるかもしれない。(180)は箱膳の足の破片と考えられる。外面に黒漆が施される。

(178)(179)は箱物の破片である。(178)は側板。(179)は蓋と考えられるが、左右端の形状が違いあるいは箱物以外の破片かもしれない。

(181)～(186)は小径の曲物の蓋もしくは底板である。(185)は蓋である。中央にあたる部位に切れ込みが存在する。(182)は端に小孔があり、蓋の可能性もある。(181)・(183)～(186)は底板と考えられる。(188)～(190)は曲物の側板である。(188)は内外面が黒色を呈しており、黒漆もしくは柿渋を塗布したものと考えられる。

(187)は大径の曲物の底板である。縁に小孔が2箇所存在する。

(191)～(193)は柄杓の柄である。(193)は黒漆もしくは柿渋を塗布したものと考えられ、全面黒色を呈している。

(194)～(199)は柾の側板と考えられる。(194)(195)については全長が10cm以下と短く、或いは御櫃等の蓋の側板とも考えられる。共に下端に木釘穴がある。(195)は上端にも同様の木釘穴が開いている。

(200)は柾もしくは柾の若もしくは底板である。側面に2箇所木釘が残存している。

(201)～(206)は、何れも柄・樽に伴う木栓と考えられる。(201)(202)は差し口が細く作られたもの、(203)(204)(205)は円柱形のものである。(206)は飲み口に差し込む木栓である。

服飾具

(207)(208)は漆塗りの横櫛である。(207)は代用金彩による文様を施す。(208)は頑い櫛目の製品である。

(212)は煙管の羅字である。両端は欠損している。

(209)(210)は鏡匣の破片と考えられる。内外面に黒漆を塗布している。

(211)は2本の溝に歯を差し込む、所謂陰卯下駄である。台部上面の磨減痕から考えて、右足用と考えられる。

工具・柄類

(213)は刃物の鞘である。刀幅は約1.5cm程度しかなく、切り出し小刀等の工具用刃物の鞘と考えられる。

(215)は刷毛の柄である。柄から先端へと末広がりに移行する撫肩の形態である。先端を割り間に毛を挟みさらに糸で縛めつけ固定したものである。先端部には糸を通す横方向の溝が1本及び貫通した小孔が3か所あいている。また、糸は漆によって固められており、漆の付着した糸が残存している。

(217)は籠状の木製品である。仙台城三の丸出土品⁴に類例がある。(216)もまた、籠もしくはしゃもじの柄部の破片と考えられる。

(218)は片手使いの柶の柄と考えられる。柄頭部ではなく、元部分から柄尻にかけてが残存している。元部分には差し込み痕及び側面2か所に模等のあたり痕が残っている。

(219)は柄状の木製品である。2つ割りの丸木を両側から打ち込んだ2本の鉄釘によって接合している。

(214)は楔もしくは添え木と考えられる。

(220)は柄状の木製品である。握りにあたる考えられる部分は端部に向かって丸く細く削り出され、地方の部分はやや太く方形に削りだされている。工具・農具の柄もとしは木刀の柄の可能性が考えられる。

部材

用途不明の木製品の内、組み合わせて製品となるものを14点を部材としてあげた。

(221)小型の脚である。上辺に3本をほどきを割り出している。

(222)は粗粗工である。変形の粗工に半円の材をくみあわせている。共に不齊欠損する。

(223)は2本の鉄釘が打ちこまれた長方形の材である。把手・撮みの類と考えられる。

(224)はほどきを切ったを円形の木製品の破片である。両面ともに磨かれた厚手の製品である大型の鍋・釜類の蓋の可能性が考えられる。

(225)は外側には釘孔及び金具の痕跡と考えられる帯状の変色部分がある。内面には溝が彫りこまれ、そこより折損している。内外面共に黒漆が塗られている。調度品の破片の可能性が考えられる。

(226)は一端は薄くけずられ、他端は折損している。(225)と同様に外側に黒漆が付着しており、調度品の部材と考えられる。

(227)は箱物に使用されたと考えられる方形の板材である。一边には釘孔及び切り込みが見受けられる。また、他辺には刃物による条痕が見受けられる。

(228)～(230)は小さな枠物の部材と考えられるもので、いずれも両端に組合せ、もしくは差し込みのために加工を施している。

(228)は両端を相欠はーき様に加工しており、全体に一寸程度の間隔で鉄釘が遺存している。

(229)は両端を平ほど状に加工しており、一端には2方向に釘孔があく。外側には漆を塗布している。

(230)は両端を相欠き様に加工している。

(231)(232)は両端を引る薄板材である。

(231)は外側には黒漆が塗布されており、中央に穿孔がある。重箱等の材が再加工された可能性もある。

(232)は両端に釘孔が2個づつ開けられている。錫蓋等の可能性が考えられる。

(233)(234)は角材に加工を施したものである。

(233)は一方の先端には2方向にほどき孔をあけ、他方にはほどきをさるものである。立方体の枠組様のものが推測できる。

(234)は一方を斜めに落としており、他方を仕口様に加工しているが、(221)と同様に斜めに踏ん張る小型の脚の可能性もある。

用途不明品

(235)(236)はその形状から糸巻きの可能性がある。(236)については、同様の形状のものを糸巻きとした例が大坂城三の丸(1983)¹⁶⁾・仙台城三の丸(1985年)¹⁷⁾の調査で出土している。

但し、(235)(236)いずれにも糸巻きによる擦痕は見受けられない。

(237)は弧を描く断面形状から小さな樽や桶の側板の可能性もあるが、蓋の痕跡はなく、蓋等の可能性もある。

(238)は両端を刃物によってきれいに切断した栓状の製品である。

(239)は両端を加工した細身の把手状の製品である。

溝1004・1003の出土木製品（第48図、図版81）

溝1001以外から出土した木製品としては溝1004・1003から5点が出土している。

(240)(241)溝1004の遺物である。

(240)は一本下駄(連鎖下駄)、台部上面の磨滅痕から考えて、左足用と考えられる。

(241)は桶の底板である。

(242)(243)(244)は溝1003の遺物である。

(242)は両面に墨書きがある。

(243)は口著である。断面が方形に近い多角形のものである。(244)は小型の桶の側板である。

【註】

(1)(146)を除く溝1001出土の15点及び溝1003出土の(242)は『木簡研究 第13号』(木簡学会 1991年)に紹介を発表しているが、発表後の再度の紹介によって加筆・修正を行っている。本報告をもって正しい紹介とする。

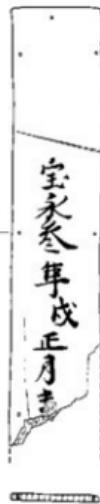
(2)現在の明石市轟江。

(3)『東京大学本郷構内の遺跡 疾学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室編 1990年

(5)『大坂城三の丸跡Ⅱ 大手口における発掘調査報告書』

大手前女子大学史学研究所・大坂城三の丸跡調査研究会 1983年

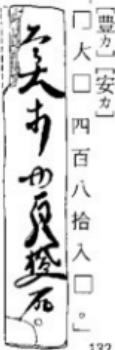
(6)(4)と同じ。



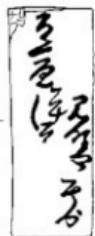
131



132

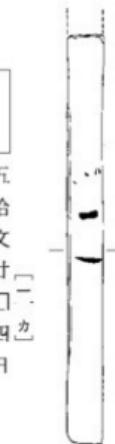


133



「すさか」「五七入カ」

明カ
見伊カ
屋右衛門



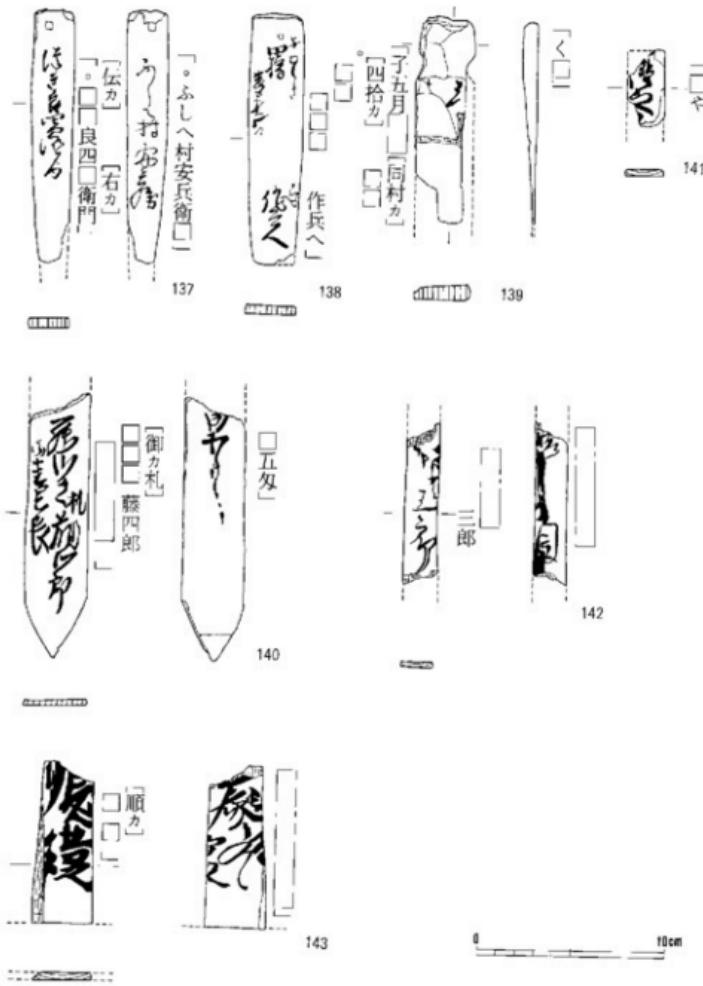
135



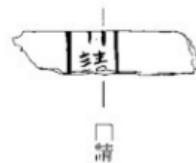
136

10cm

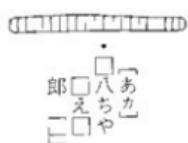
第41図 満1001 出土木簡（1）



第42図 溝1001 出土木簡（2）



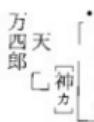
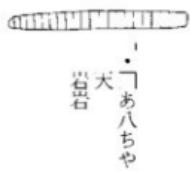
146
146



144



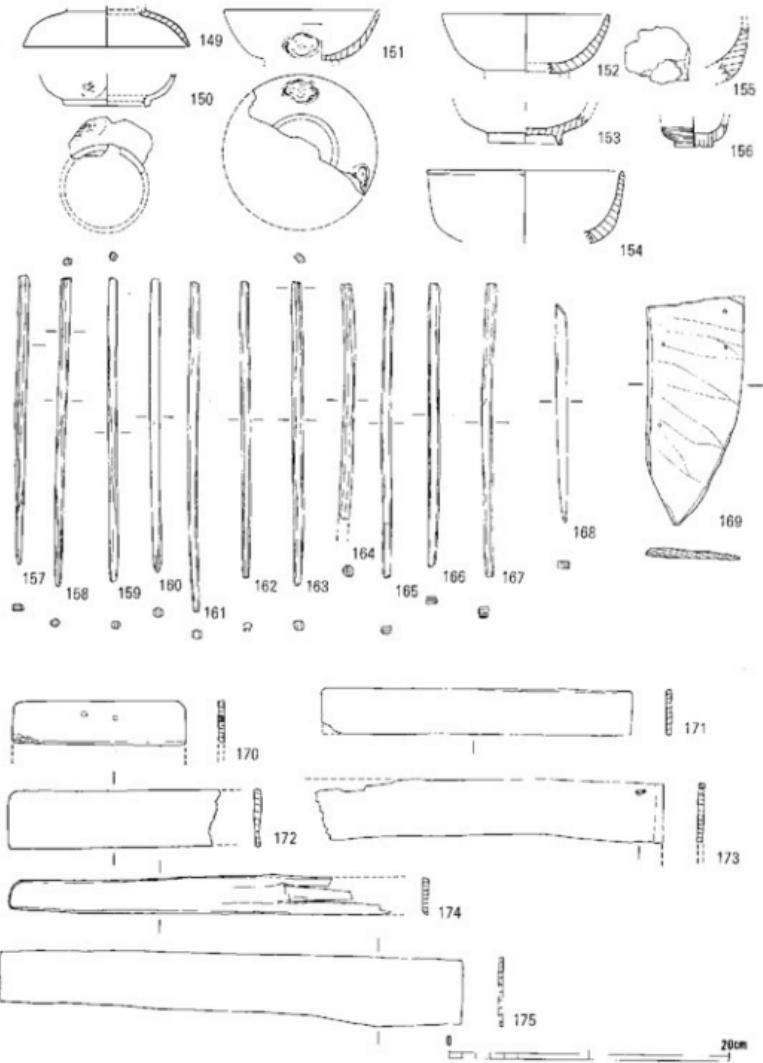
145



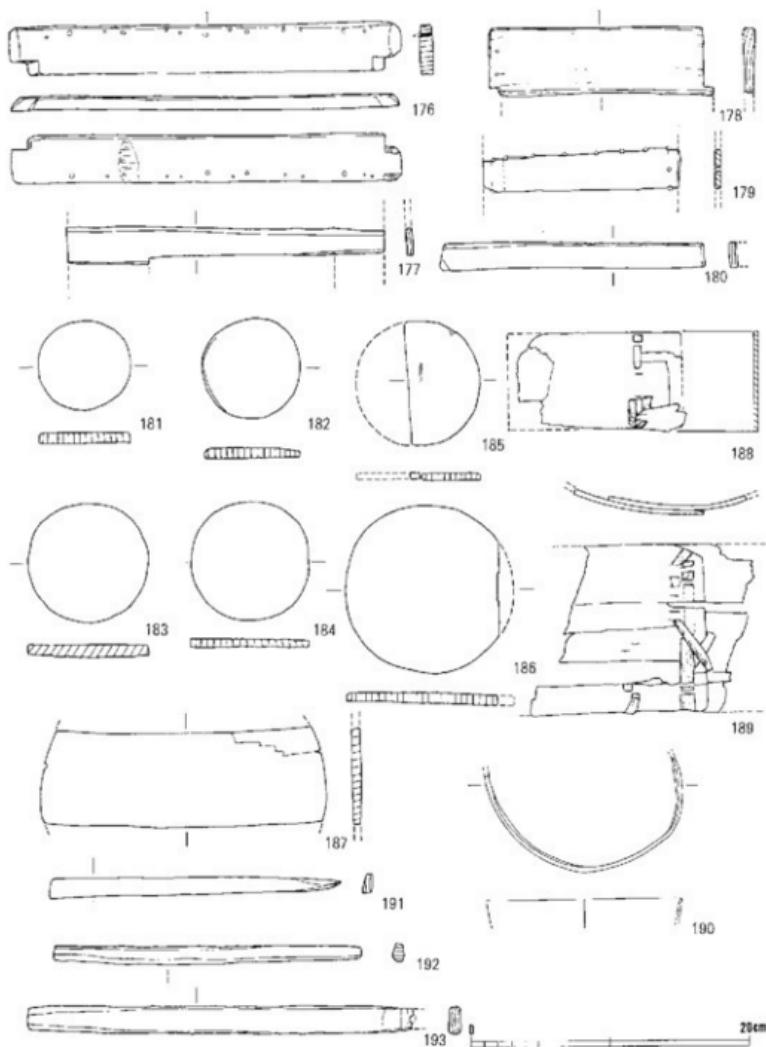
147



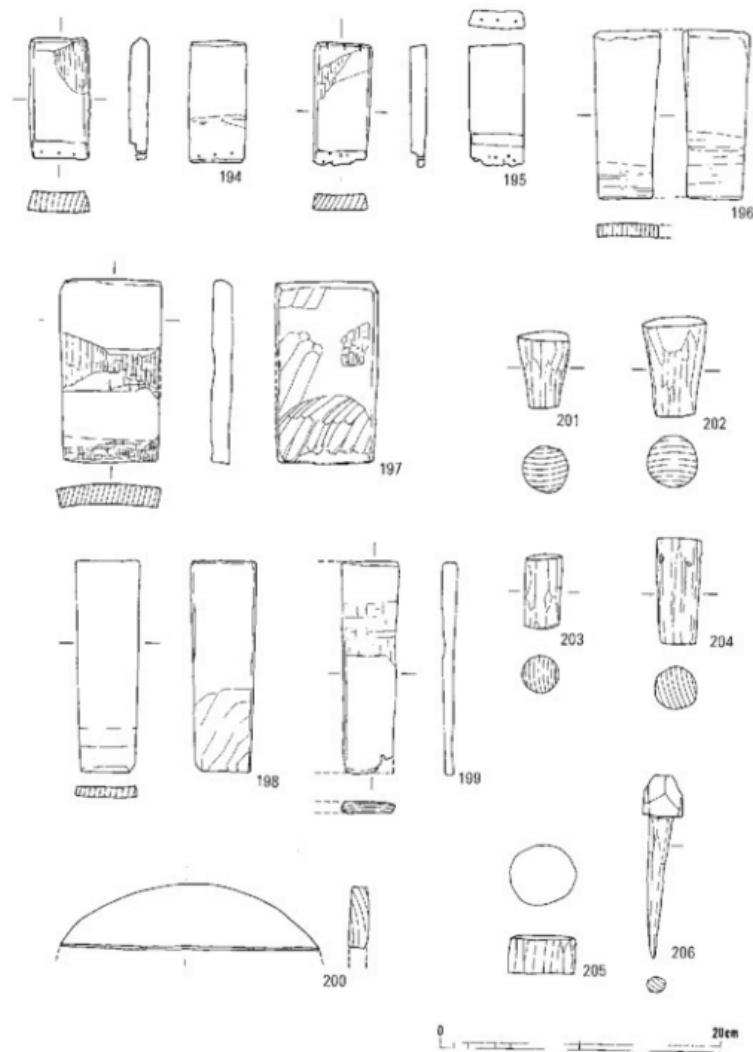
第43図 满1001 出土木簡 (3)



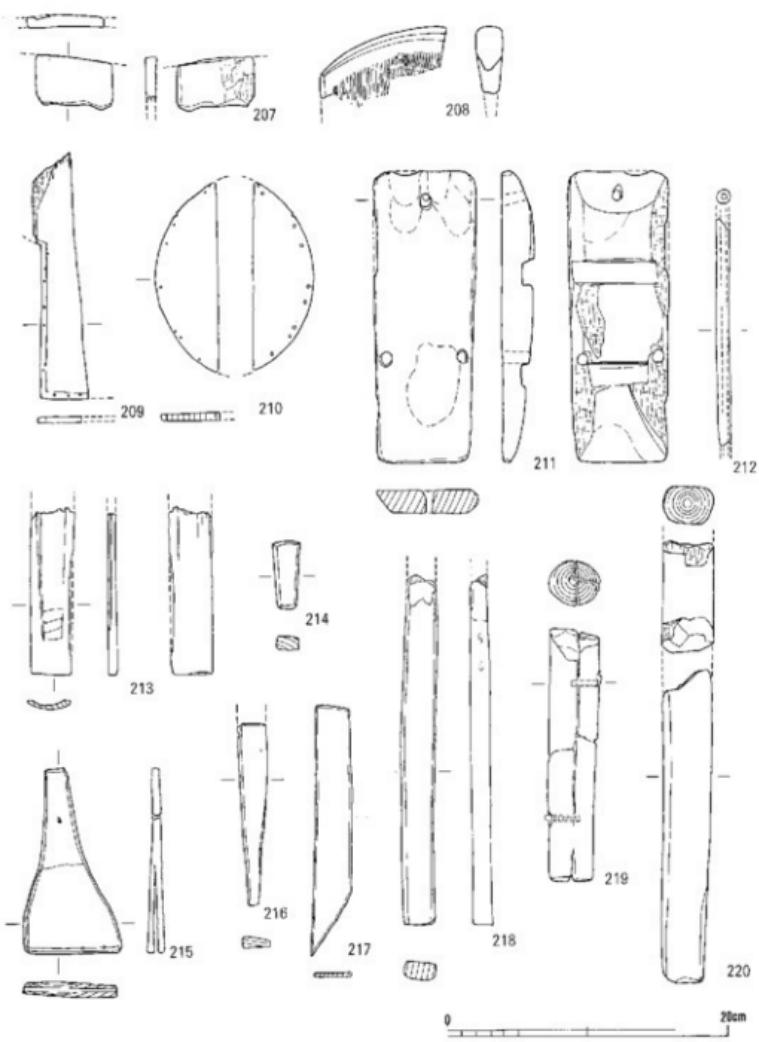
第44図 溝1001 出土木製品（1）食膳貝・容器



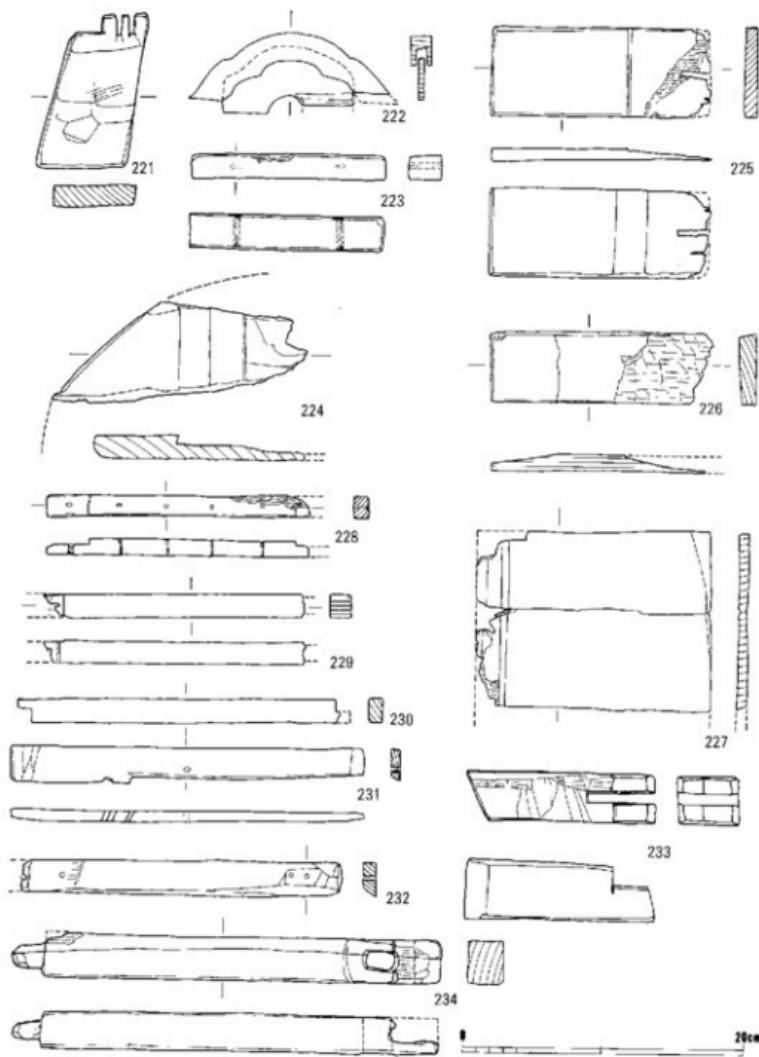
第45図 溝1001 出土木製品（2）容器



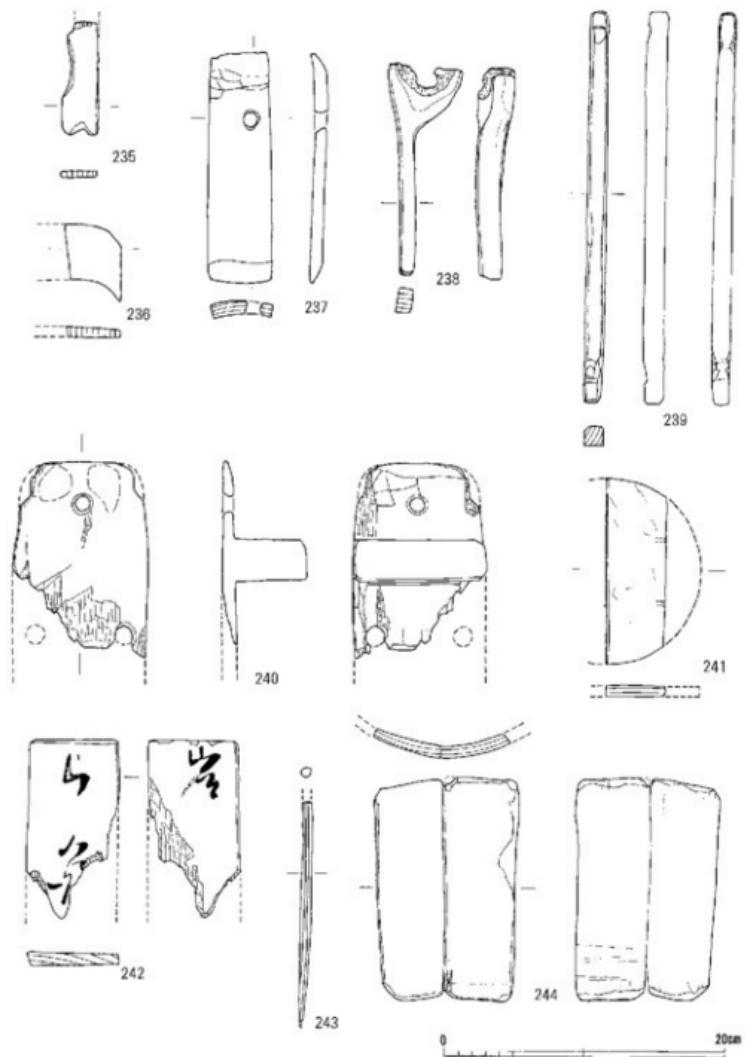
第46図 溝1001 出土木製品（3）容器・栓



第47図 满1001 出土木製品（4）服飾・工具



第48図 溝1001 出土木製品（5）部材



第49図 溝1001 出土木製品（6）用途不明品・溝1004・溝1003 出土木製品

溝1004出土の土器（第49図、図版57、58）

溝1004から出土した遺物のうち、図化したものは(267)、(270)、(271)である。

(267)は、土師器鉢である。体部が球形を呈し、退化した短い断面三角形の紐が付く。口縁は内彎し、端部は肥厚する。

(270)は土師器溜鉢である。体部内面に横方向のヘラ調整とタテ方向のクシ描きがみられる。また、体部外面には煤の付着がみられる。(271)は肥前系陶器皿である。溝最上層から出土したものである。底部内面に4か所の胎土目がある。

溝1002出土の土器（第40図・第49図、図版56・57・58）

溝1002から出土した遺物のうち、図化したものは(129)、(245)～(252)、(260)、(261)である。(245)は土師器小皿である。所謂手づくね系のもので体部及び底部内面に指押さえの痕跡がみられる。(246)～(252)は土師器羽釜である。(246)～(249)は最大径が体部の中央から下半にあるものである。断面三角形を呈する短い紐が口縁部直下に付く。(247)が明瞭な鉢を有するのに対し、(249)はわずかに突起が認められるほど退化している。(246)～(248)は体部は右上がりの平行叩き、内面は、ヘラ調整、口縁内外面はヨコナデ調整を施す。(250)～(252)は細片のため傾きはやや不正確である。(250)、(251)は体部に長く水平な鉢が付き、口縁部は長く直立し、端部で内彎する。(252)は口縁下部に断面三角形の紐が付く。

(260)、(261)は須恵器溜鉢である。(260)は直線的な体部を持ち、口縁端部は、下部が垂下する形態である。(261)は口縁端部が肥厚し、内面へ畳曲する形態である。

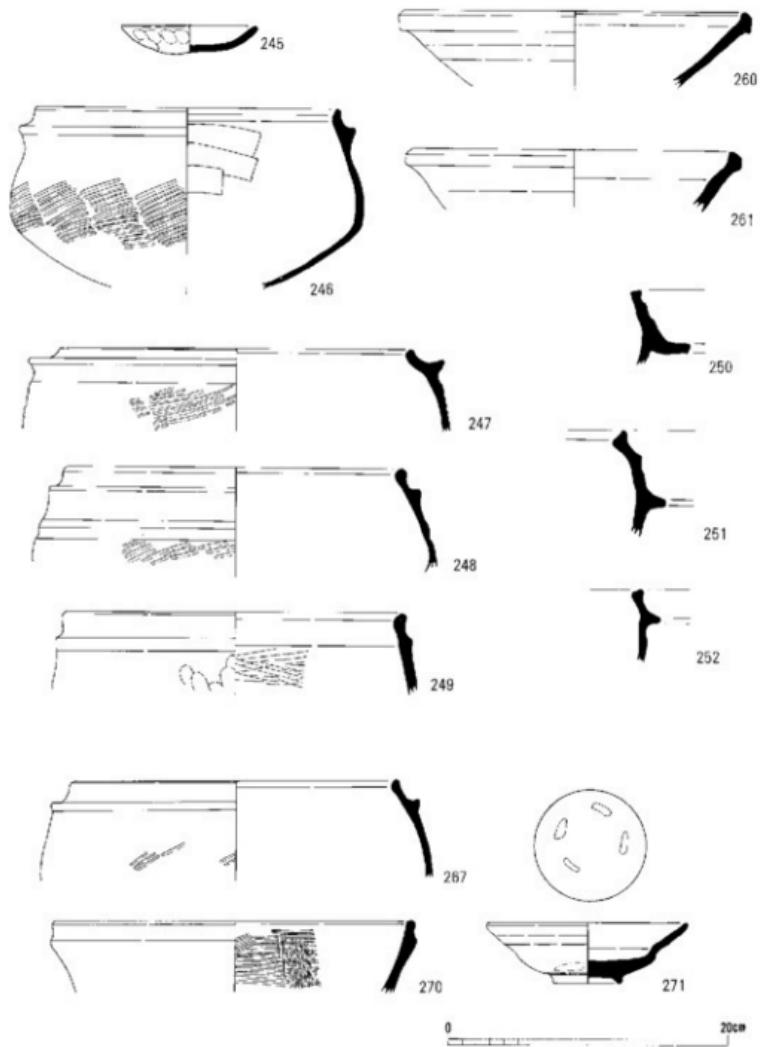
溝1002出土の一石五輪塔（第51図、図版86）

(272)・(273)のいずれも砂岩質の一辺11cm程度の角石材を用い、規模もほぼ同一のものである。これらの一石五輪塔の石材と極めて類似した石材の一石五輪塔が三木市東部でも見られる。これらの一石五輪塔は明石川流域で牛庵されたものと推定される。

(272)は空・堆輪を欠き、残る部分も表面が風化しており、裏面は全面剥離し、残存状態は不良である。ここでは全容の明らかな(273)について述べる。

(273)も全面に風化がすすみ、水輪以上と地輪2つの3つに折損されているが、接合可能である。復元高79cmを測る。先端を片刃状に尖らせた長い地輪を有する所謂埋め込み式の一石五輪塔である。本来平面形が円となるべき空・風・水輪は曲面を削り出すことなく、元の角石材を最低限の加工を施しただけで平面形は方形を呈している。特に半球状となるべき風輪の退化が著しい。また、各部の境界はわずかに窪める程度の最低限の加工しかせず、形態的には退化が進んだものとみることができる。

一石五輪塔は室町後期に量的のピークに達する。以後技術的に省力化するとされている。そこでこの一石五輪塔も近世に属する要素が強い。しかし、近世に属する一石五輪塔が水輪部の高さが減じ偏平化したものが多くなる傾向にあるのに対し、本品は退化しているものの比較的高



第50図 溝1002・溝1004 出土土器



第51図 溝1002 出土一石五輪塔

さをもっている。類例が無いため断定できないが本製品の所調時期は中世末から近世初頭と想定する。なお、刻印または墨書きは全く確認できなかった。

屋敷地A柱穴内出土の遺物

屋敷地Aの柱穴から出土した遺物のうち、図化したものは(274)・(275)の2点である。

(274)の小皿は、底部に浅い突山を持つ所謂ヘソ皿で、口縁径8.1cmを測る。(275)の皿は真っ直ぐ外反する口縁を有する。口縁部径12.9cmを測る。

井戸1001内集石出土の遺物

井戸1001内集石からは(278)～(280)の土器と(281)・(282)の木器が出土している。

(278)は土師器脚付鍋の脚部である。断面円形を呈し、体部との接続部は内面にハケ目を施す。接続部の形態から脚は体部下半に取り付くものとみられる。(279)は瓦器焼である。内嚙する体部を持ち口縁端部は丸く終わる。内面に荒いヘラ磨きが認められる。(280)は須恵器焼である。わずかに内嚙する体部を持ち、口縁端部は丸く終わる。(281)は用途不明の板材である。全長31.5cm、幅11.7cm、厚さ最大で2.8cmを測る。(282)は曲物側板片である。図化していないが同一個体と思われる破片が1片出土している。高さ4.2cm、厚さ0.1～0.15cmを測る。

井戸1002出土の遺物

井戸1002からは(283)・(284)・(287)・(288)・(292)の土器と(293)～(300)の木器が出土している。



第52図 屋敷地A内の柱穴 出土土器

(283)は土師器碗である。底部に「ハ」字状に開く高台が付く。(284)は土師甕鉢である。内面に横方向のハケ目の後8条のクシ描き条線を施す。(287)は須恵器壺である。備前系の可能性がある。(288)は須恵器壺底盤である。見込み部が浅く窪み、底部に糸切りを施す。(292)は陶瓶置足片である。全容の復元是不可能である。方形とおもわれる透し孔がみられる。(293)は折収敷である。現存長23.8cm、幅8.0cm、厚さ0.3cmを測る。2層1対の釘孔と思われる穿孔を4か所行っている。

(294)は曲物底板と思われる。径14.2cm程度に復元できる。(295)・(296)は漆器碗である。口縁部、高台部のみ残存している。いずれも井戸1002の最下層から出土している。外表面は黒ウルシ、内面は黒ウルシの上に赤ウルシを喰布する。口縁径約9.0cm、高台径約6.5cmに復元できる。(297)は齒部一本の下駄である。前格孔が中央に穿孔されているため左右の判断は明確でないが指の磨滅状態から左足と推定される。全長14.0cmと小型であることから子供用と思われる。歯部は著しく磨滅し、先端部には指部分の磨滅が見られ、かなり使い込まれている。

(298)～(300)は井戸水溜用の曲物である。ただし曲物本来の天井は釘穴、底板の痕跡がなく不明であったため、実測図は井戸水溜としての天地としている。

(298)は径43.0cm、残存高16.8cm、板材の厚さ0.4cmを測る。側板は1か所を1列内10段継じて左前にて継じ合わせる。内面には0.3～0.8cm間隔で斜平行のケビキを入れる。(299)は径42.6cm、高さ19.2cm、板材の厚さ0.3cmを測る。側板は2箇所を1列外13段継じと1列内2段継じで右前にて継じ合わせる。内面には0.3～0.9cm間隔で斜平行または斜格子状のケビキを入れる。(300)は径42.0cm、高さ37.4cm、板材の厚さ0.3cmを測る。側板は1か所を1列外11段継じで右前にて継じ合わせる。また、外面の中ほどと下部に焼きによる刻みを入れている。内面には0.5～0.8cm間隔で斜平行または斜格子状のケビキを入れる。

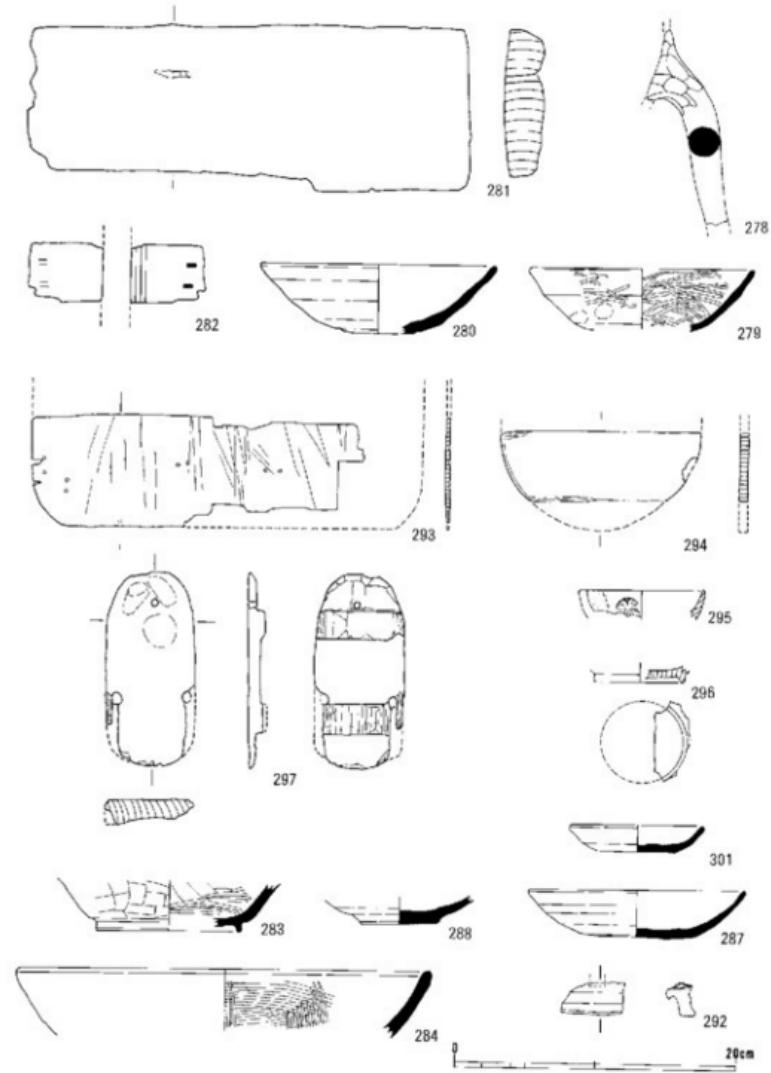
井戸1003出土の遺物

(302)は井戸1003の水溜に転用された削物の臼である。

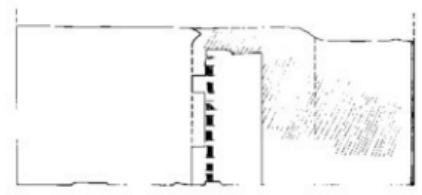
体部はわずかに内嚙して立ち上がり、口縁端部は狭い水平面を持つ。高さ46.6cm、口縁部径33.8cmを測る。体部に半円状の把手2つを彫り込む。また損壊した箇所に曲物の底板の転用と考えられる小判型の板材を木釘で打ちつけ補修している。

井戸1004出土の遺物

井戸1004からは(303)・(304)の土器と(305)～(309)の木器が出土している。

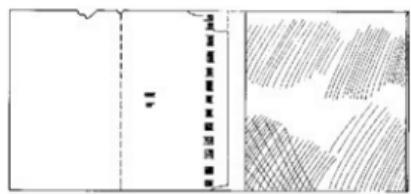


第53図 井戸1001・井戸1002・井戸1003 出土土器・木製品



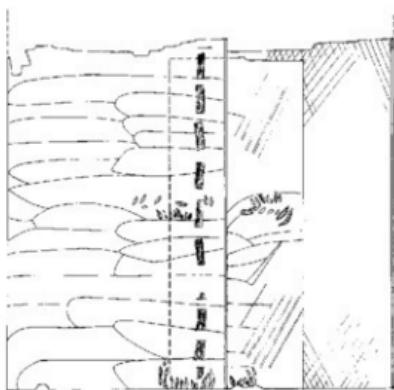
298

井戸1002 水灌転用の曲物



299

井戸1002 水灌転用の曲物

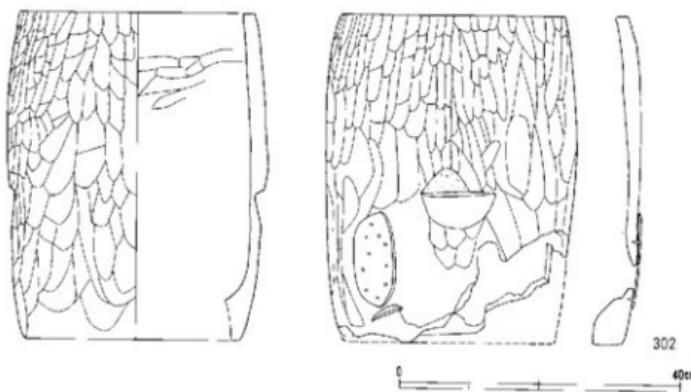


300

井戸1002 水灌転用の曲物



第54図 井戸1002 水灌転用の曲物



第55図 井戸1003 水溜転用の臼

(303)・(304)は井戸埋土内より出土した須恵器碗である。(303)はやや内側気味の体部で口縁端部は僅かに外反し、丸く終わる。見込み部の凹みは見られず、高台も付かない。(304)は破片のため傾きはやや不正確である。直線的な体部を持ち、口縁端部は丸くおわる。

(305)～(309)は井戸側板材である。(305)は全長24.0cm、幅11.0cm、厚さ7.6cm、(306)は全長24.0cm、幅8.0cm、厚さ7.0cmを測る板材である。(307)は全長61.5cm、幅15.3cm、厚さ1.0cmを測る。短辺がカーブしていることから曲物底板からの転用したものとみられる。板の割れを樹皮紐結束で補修し、再利用した痕跡がある。(308)は全長89.9cm、幅18.2cm、厚さ1.8cm、(309)は全長89.9cm、幅18.4cm、厚さ3.4cmを測る板材である。(308)は左右の上下に、(309)は左右の下部に組み合わせのための切り欠きが鋸により設けられている。いずれの材も表面が磨滅するほど使用しているが、井戸材としての加工痕より古い削り痕がみられること、板材の中央下部に井戸材として不要な切り欠きがみられ、それらは左右の切り欠きよりも磨滅が激しい。以上の点から(308)・(309)の2点は転用材の可能性が高い。

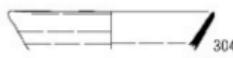
集石造構出土の遺物

図化したものは(310)～(315)で各時期の遺物が混入している。

(310)は土師器土縁である。破片のため傾きはやや不正確である。「く」字状に外反する口縁をもち、縁は体部上半部に付き、断面三角形を呈し、退化してわずかに突起するのみである。(311)は土師器鉢口縁部である。体部外面に5本／1cmの刷毛目を施す。口縁は内側し、端部はわずかに外へつまみ出す。(312)は土師器縁である。やや内側する体部を有し、口縁は「く」字状に外反する。口縁の一部にのみ刻み目を施している。



303



304

0 20cm



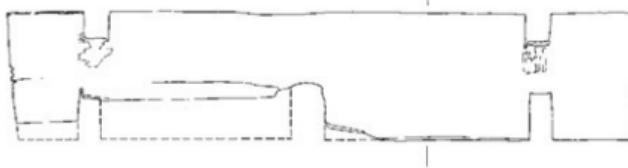
305



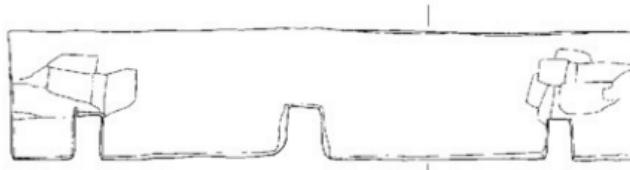
306



307



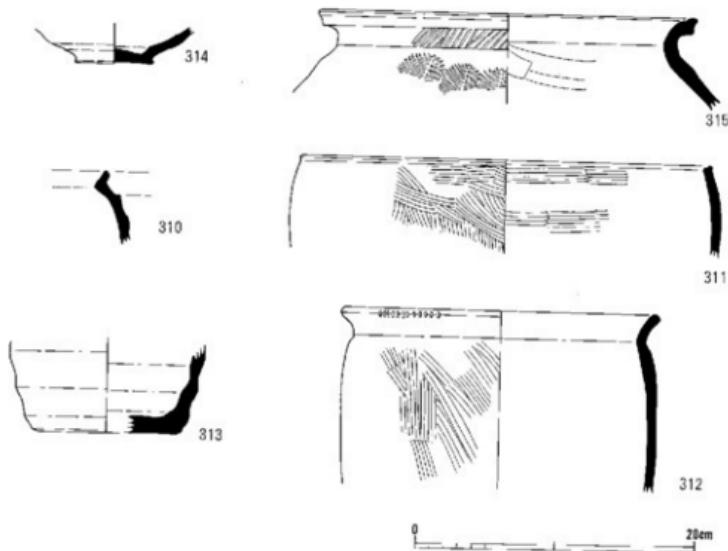
308



309

0 40cm

第56図 井戸1004 出土土器・井桁



第57図 集石造構 出土土器

(313)は銷壺と推定される。やや内擣した体部は横上げの痕跡を残している。

(314)は須恵器梶底部である。底部は糸切りを施す。(315)は須恵器甌である。口縁端部が上下にわずかにつまみ出している。体部外側には緩杉タタキが施されている。

溝1006・溝1011出土の遺物

(321)は土師器小皿である。溝1006より出土した。所謂ロクロ系のもので口縁部径9.5cmを測る。溝1011より出土した。(320)(322)(323)は須恵器鉢である。底部に糸切りを施す。

2. 第2面の遺物

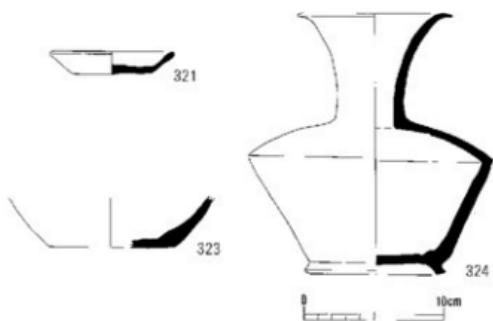
溝2003出土の遺物

(324)は須恵器長頸壺である。溝2003より出土した。腹部が直線的に開き、肩部は「く」字状に屈曲する。体部との境付近の底部には「ハ」字状に隆張った台が付く。頸部はゆるやかに外反し、端部で外へ屈曲させやや水平な面を持つ。

第1面・第2面含層出土の遺物

A地区の包含層から出土した遺物のうち、図化したものは(325)～(348)である。

(325)～(332)は須恵器小皿。平らな底部から短い体部が立ち上がり口縁端部は丸く終わる。



第58図 溝1006・溝1011・溝2003 出土土器
付く。(321)は天井が平らに近く、端部はわずかに段をなす。

(322)～(326)は須恵器杯である。(322)(323)とも平生な底部と直線的な体部を持つ。口縁端部は(322)がやや内弯し丸く終わる。(323)は口縁端部がやや外反し丸く終わる。(324)(325)は底部に墨痕が見られるが判読不可能である。(324)(325)とも直線的な体部を持ち、口縁端部は丸く終わっている。(324)は体部下半に段を有する。底部はいずれも平らで(325)は直立する高台が付く。(326)は短い体部に把手状の突起が付く。底部は平坦で、低く幅の狭い高台がハ字状に付く。

(327)・(328)は須恵器碗である。体部が内彎しながら立ち上がり口縁端部で外反して終わる。(327)は体部に1条の沈線がめぐる。底部は回転糸切りである。

(329)～(346)は施錫陶器である。錫片が多く全容を復元できるものは少ない。このうち(342)は灰釉、(345)は綠釉を施している。(343)は付高台の皿である。

(347)・(348)は埴輪である。いずれも破片のため、径や全容は不明である。(347)は円筒埴輪である。窓が剥離している。内外面ともタテハケを施す。また、内面に接合痕を残す。

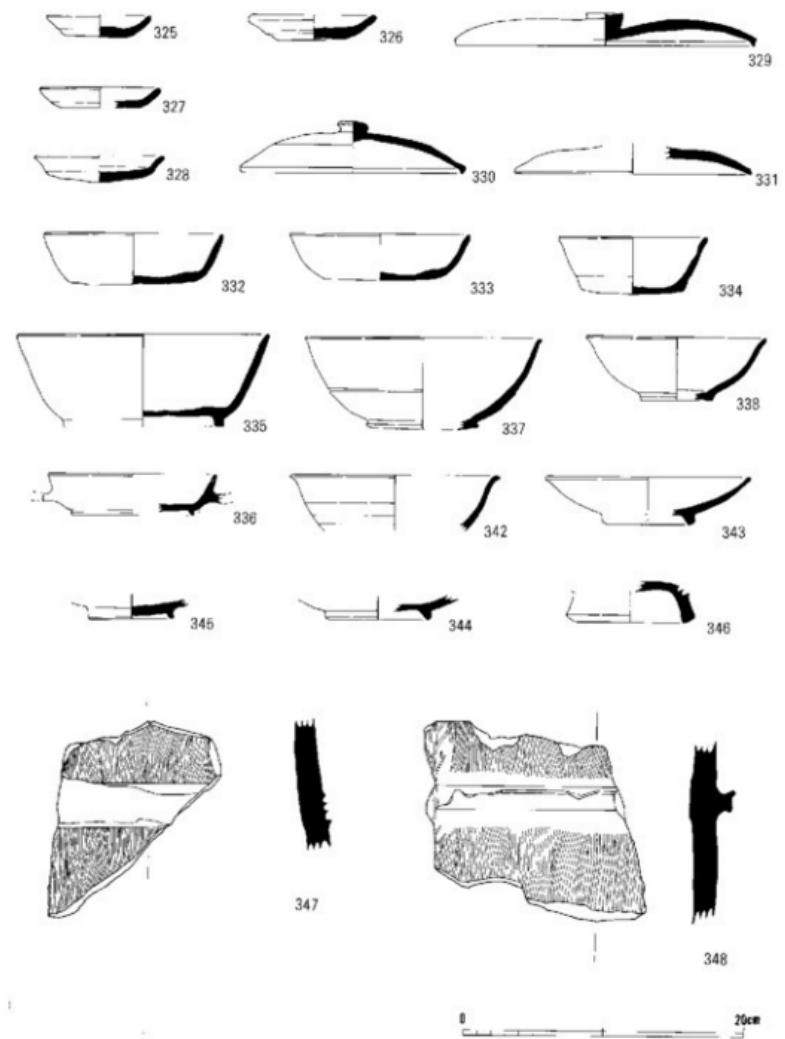
(348)は鰐付円筒埴輪である。外面には9本/cmのタテハケを施す。内面は剥離のため調整は不明である。窓は大きく突出し、断面がM字形を呈する。窓は剥離して残存しないが、体部に窓を接合するための刻線が施されている。これは脱利な刃物でタテ方向に目印をつけ、その後斜め方向に0.5cm間隔に刻線を施している。

鱗付円筒埴輪は前方後円墳クラスの古墳にのみ存在することが指摘されている。吉田南遺跡周辺では中期の前方後円墳である吉田干塚古墳がそれに該当しうる。しかし、出土した埴輪は比較的残存状態がよいためから、本調査区の近辺に中期に属する有力な古墳が所在していた可能性も否定できない。

底部は糸切り。(326)は土師器小皿である。所謂ロクロ系のもので底部糸切りである。

(329)～(331)は須恵器杯蓋である。(329)は全体に大きく歪む。天井部は平坦で偏平なつまみが付く。口縁端部は垂直に折り曲げられている。

(330)はやや高く丸い犬井部で横部は外へ屈曲し段を持つ。天井部中央に偏平なつまみが



第59図 第1面・第2面 包含層 出土土器

3. 第3面出土の遺物

第3面 出土の遺物は溝内出土の上器を図示した。

(380)は小型の壺で、口縁部は欠損している。底部内外面は矧い押さえを行い、一部に刷毛目が認められる。焼成は良好である。溝3101より出土した。

(381)は口径が17.4cmの壺である。屈曲した口縁は外端面に面をもち、窓凹線状の沈線をもつ。外端にわずかに刷毛目を残している。旧河道肩部より出土した。

(382)は器高が11.4cm、口径が11.3cmの小壺の壺である。口縁は僅かに屈曲して立ち上がる。体部外面は叩きを施す。溝3101から分岐する部分にある土器群から出土した。

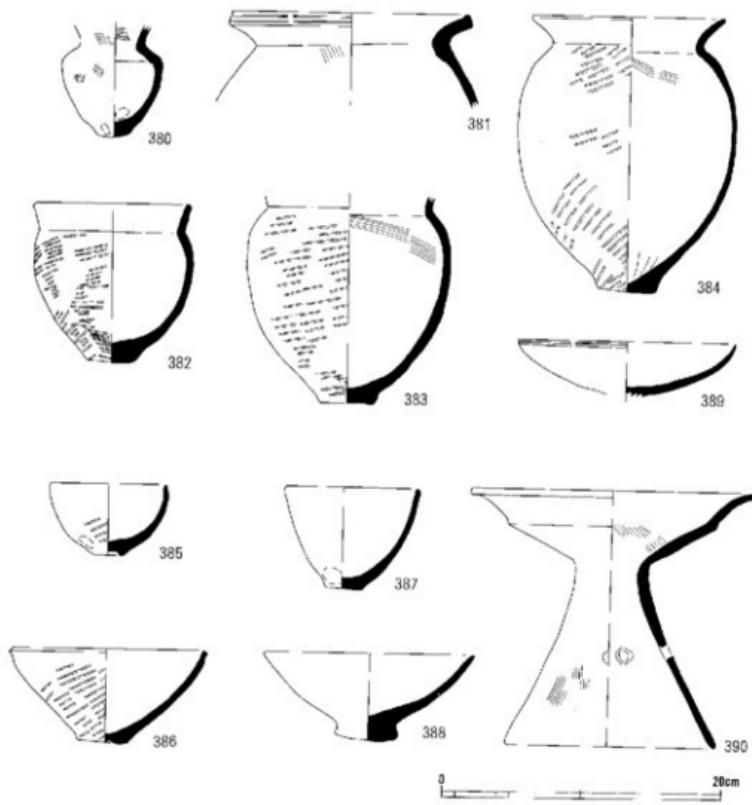
(384)はやや右上がりの叩きを残す甕である。口縁部を欠く。残存器高は14.9cm、復元腹径は器高14.6cmで内面に刷毛目を残す。溝3103より出土した。

(385)から(388)は鉢。(385)と(386)は外面に叩きを行っているが、その他は調査不明である。(385)は器高が6.2cm、口径が8.55cm。(386)は器高が6.8cm、口径14.2cm共に溝3101から分岐する部分にある土器群から出土した。

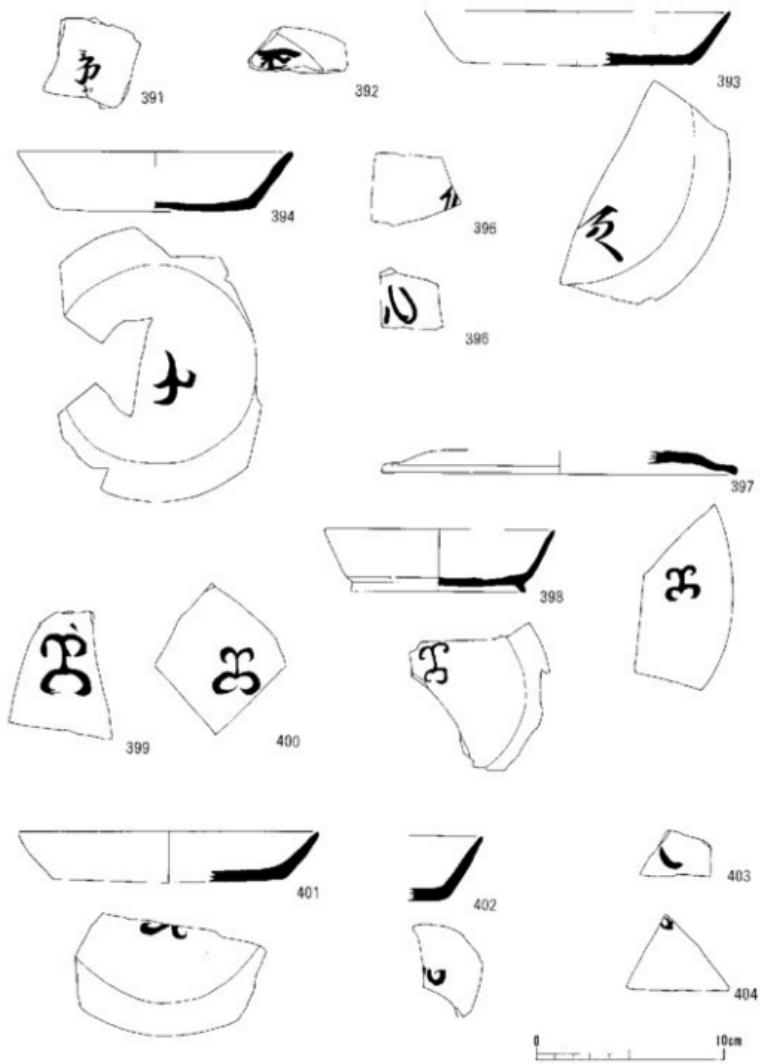
(387)と(388)は遊離した土器である。ともに臺盤が築しく調整は不明である。(387)は器高が7.4cm、口径が9.75cm、旧河道が埋没するまでの層位より出土している。(388)は器高が6.3cm、口径が15.1cm、旧河道埋没後の層位より出土している。

(389)は高杯の浅い杯部である。口縁端部をわずかにつまみ上げ、外端面に凹線を残す。外面にヘラ磨きを行っている。旧河道肩部より出土した。

(390)は器高が18.5cm、口径が20.3cmの器台である。受部は段をもち、屈曲して外反し、脚部は単純に開く。内外面の一部に刷毛目が認められる。溝3010より出土した。



第60図 第3面 溝出土の土器



第61図 墓書土器

4. 墓書土器

墓書土器は14点出土している。このうち13点について図示した。

墨書の内容は以下の3種類にわけて考えることができる。

- ① 文字もしくは文字の一部である可能性の高いもの。(391)～(393)・(395)・(396)がそれにあたる。
- ② 記号と考えられるもの。(394)・(397)～(400)がそれにあたる。また、残る一点(335)についても(397)～(400)と同様の墨書である可能性が高い。
- ③ 文字もしくは記号の一部と考えられるもの。(401)～(404)がそれにあたる。

(394)についてはこれまでの吉田南遺跡の調査においても出土例があり、また、龍野市小丸遺跡においても出土例が知られている。

(397)等の類例についてはこれまでの吉田南遺跡の調査においても出土例がある。

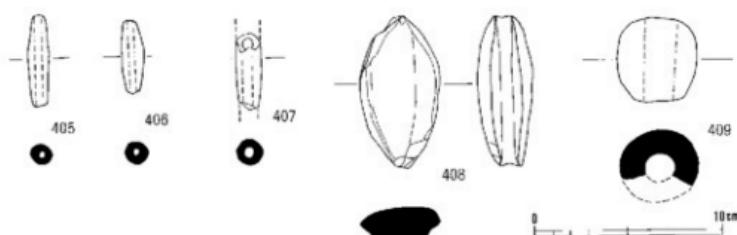
14点いずれの墨書についても読みはできず、性格等についても明らかにはできなかった。

墨書土器の出土地點は概ね集石・井戸造構の周辺に集まっている。内訳は、(393)が満2003内、(401)が満2013内、(391)(402)が集石遺構1001内から出土である。また、(400)は第1面上の出土であり、それ以外は第2面までの包含層からの出土である。

5. 土鍤

(405)～(409)の土鍤はすべて包含層から出土したもので(409)を除いて土師質である。

(405)～(407)は円柱状を呈する管状土鍤である。いずれも胴部にわずかに膨らみを持つ。(405)は現長5.0cm、径1.1cm、(406)は現長4.0cm、径1.1cmを測る。(407)は現存長4.2cm、径1.4cmを測る。(408)は平面形が梢円を呈する有溝土鍤である。側面に断面U字状を呈する溝を切っている。(409)は須恵質で球状を呈する有孔土鍤である。



第62図 土鍤

6. 金属器

金属器は10点図示し得た。(415)以外は鉄製品である。

(413)～(415)は溝1001より出土した。(413)・(414)は手鎌である。(414)は鎌の眼釘であるが、取り上げ時に脱落したため、別々に図示した。柄の木質が残存している。

(415)は煙管の雁首である。唐返しの内側には灰落としの際に付いた打撃痕がある。肩付き河骨形で火皿と首部の境には補強帯がついている。形態からみて古泉編年の第二段階(17世紀前半)にあたるものと考えられる。

(416)は溝1003より出土した。小刀と考えられる。残存長19.0cm、刃幅1.2cm～1.8cm、棟幅0.4cm、刃渡り15.4cm以上の両刃の製品である。

(417)は第2・3面より出土した鉄鎌である。全長4.2cm、刃幅1.2cm、頭部長1.3cmを計る。両刃・短頭・闇鍔被、刃部の断面形は半刀に近く、飯塚分類(1969年)では斧箭式にあたる。

(418)(419)は屋敷地A内のピット56から出土した小札である。(418)は全長5.5cm・幅2.0cm・厚さ0.2cmを計る。上端部を斜めに切り落とした形態をとる平小札である。

(419)は破片であり、上下・大きさとともに不明であるが、孔の位置から推して(418)よりも大きい製品であった。と考えられる。

(420)(421)屋敷地A内のピットから出土した鉄釘である。(420)はピット52から出土した。頭部を欠損する。(421)はピット58から出土した。全長6.7cm・幅1.3cm内外・厚さ0.7cmを計る。

(422)は屋敷地A内のピット57から出土した刀子片である。端部に目釘孔と考えられる小孔が残存する。残存長6.4cm刃幅1.5cm前後、棟幅0.4cmの片刃の製品である。

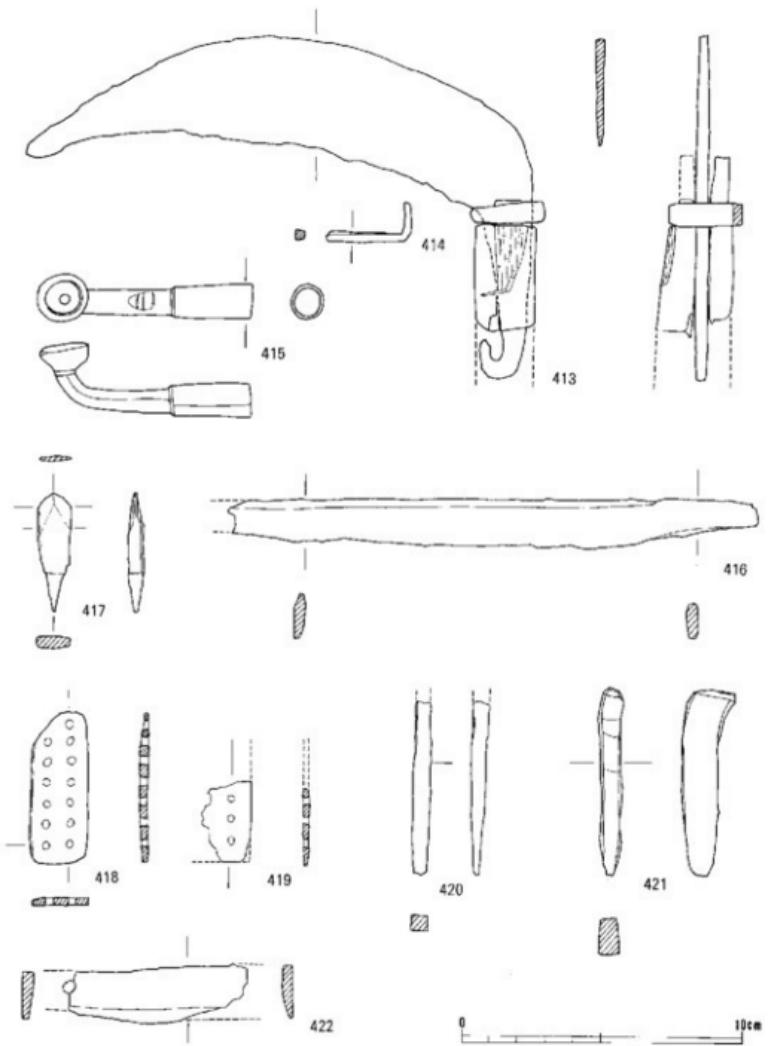
7. 石 器

3点示した。

(410)はサメカイト製凹基無茎石鎧である。基部端を一部欠損する。長さ20mm・幅12.5mm・厚さ3mm・重量0.5gを計る。A地区北半の第2・3面間より出土した。

(411)はサメカイト製の石匙である。台形の刃部につまみ部を造りだしている。刃縁部端は両端とも丸みをもち、一端は磨滅していると考えられる。長さ37mm・幅46.5mm・厚さ8.5mm・重量12.1gを計る。A地区南半の第3面を構成する土壤層より出土した。

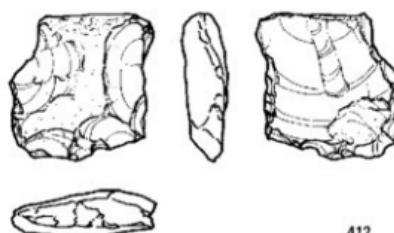
(412)はチャート製の楔形石器である。周辺に小剥離が連続する。截断面は見られない。長さ26.5mm・幅26mm・厚さ8mm・重量6.0gを計る。A地区北半の第1～3面間より出土した。



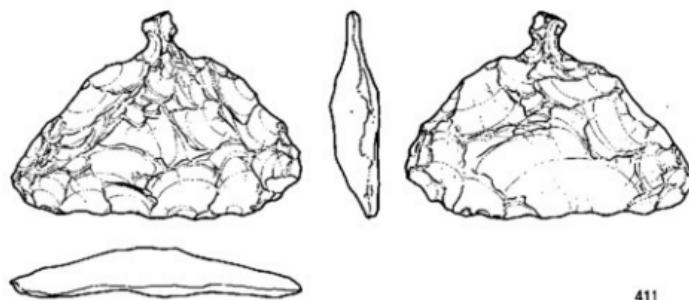
第63図 金属器



410



412



411

第64図 石器 (1/1)

第5章 B地区の調査

第1節 基本層序

現況では厚い盛土が施され、更に駐車場に伴うアスファルト敷が存在していたが、総て成人病センター建設前のものである。IH耕土以下の土層堆積は基本的にはA地区と同様である。

I層～IV層は全て水田土壤であり、溝・畦畔等については確認できず、平面による精査は行わなかった。Va層は中世前半の遺物を含み、B-1・2地区を南北方向に流れる溝・また、B-1地区北端を東西方向に流れる溝の埋土ともなっている。このため、一部で検出し、調査を実施した。Via層～Xa層は古墳時代前期～弥生時代中期末にかけての遺構面が存在する層位である。B地区ではこのVia層～Xa層を主に対象として平面精査を実施した。

層序	堆 積 土	土地利用	出 現 レ ベル	遺構面	時 期
I 層	旧耕土	水 田	標高5.20m～5.00m		
II 層	黄灰色土	水 田	“ 4.90m～4.70m		近世後半
III 層	灰色土	水 田	“ 4.70m～4.60m		近世前半
IV 層	灰褐色土	水 田	“ 4.60m～4.40m		中世後半
V a層	白灰土		“ 4.50		中世前半
V b層	黄色土		“ 4.50m～4.30m		
VI a層	褐色（マンガン）		“ 4.50m～4.10m	第1面	古墳時代前期～
VI b層	黄白色土				弥生時代末
VII a層	褐灰色土				
VII b層	灰白色土				
VIII a層	褐色土		“ 4.50m～3.80m	第2面	
VIII b層	黄白色土				
IX a層	暗緑色土		“ 4.40m～3.60m	第3面	
IX b層	緑色土～黄緑色砂				
X a層	灰色土		“ 4.35m～3.55m	第4面	弥生時代後期初
X b層	灰白色砂				～中期末

表2 B地区の基本層序一覧

第2節 B-1 地区の調査

1. 土層堆積

B-1 地区の土層堆積については第65図に挙げた。以下、第65図をもとに土層堆積について記述しておく。

層の上 $\frac{1}{3}$ を占める堆積（1～6層）は近世の堆積である。調査区の北端の4・6層の水田段差は中世に逆上るもので、同一部分に溝1007（北溝・南溝）が存在する。

第1面で精査の対象としたVla・Vla層即ち第20層・第24層は南半では間にVlb層（第23層）を挟み分層可能であるが、徐々に第24層の出現レベルが高くなり、中央では一層となる。更に北半では第2面のVla層（第28層）を含めて土壤化し、分層不可能な層となっている。これに加え北半～中央部では中世前半の水田土壤（Va層）が深く及んでいることがあげられる。これらは下層の地形に起因するもので、北半に微高地が存在し南側へ傾斜を見せているためである。これは第4面-Xa層（第55層）では顕著に見受けられるが、第1面においても解消されていない。北端と南端での比高差は約50cmである。

第2面で精査の対象としたVla層（第28層）は先述した事由により北半では不分明となり検出出来ず、南半に限って遺構検出が可能となった。検出可能な部分での北端と南端での比高差は約40cmである。

第3面で精査の対象としたIXa層（第47層）は北半では微高地上を洪水砂が削り込み、面的な残り具合はよくない。検出可能な部分での北端と南端での比高差は約60cmである。

第4面で精査の対象としたXa層（第55層）は北半と中央部に微高地があり、南側へ向かって傾斜を見せている。最高所と最低所の比高差は約70cmである。

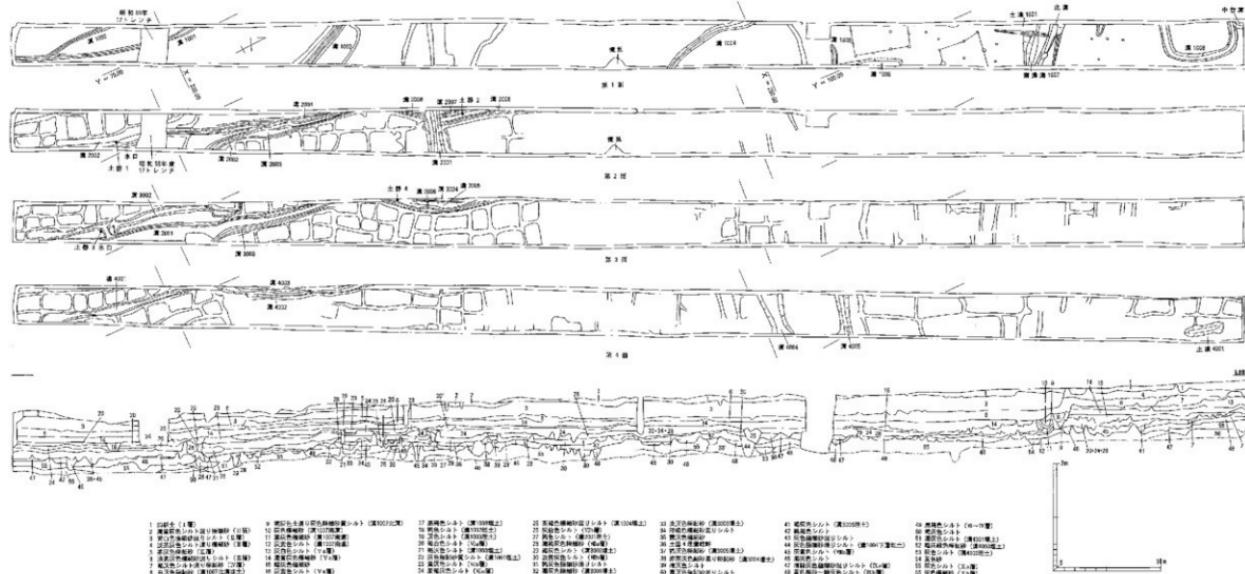
以下に各遺構面の状況と遺構について述べて行く。このうち、畦畔の検出については、洪水砂の被覆の程度が非常に薄く、上・下の水田土壤が近接している部分が広範囲に存在した。このため複数枚の水田畦畔及び還元化したその痕跡を同一面で検出せざるを得なかった。調査区の幅の狭さと相まって、今回の調査では各水田個々の規模等をおさえることは出来なかつたといえる。

このため、以下、各面での個別の水田区画等については説明は行わない。大まかな水田の方位等の規則性と溝・水口等の個別の遺構を中心に述べて行くこととする。

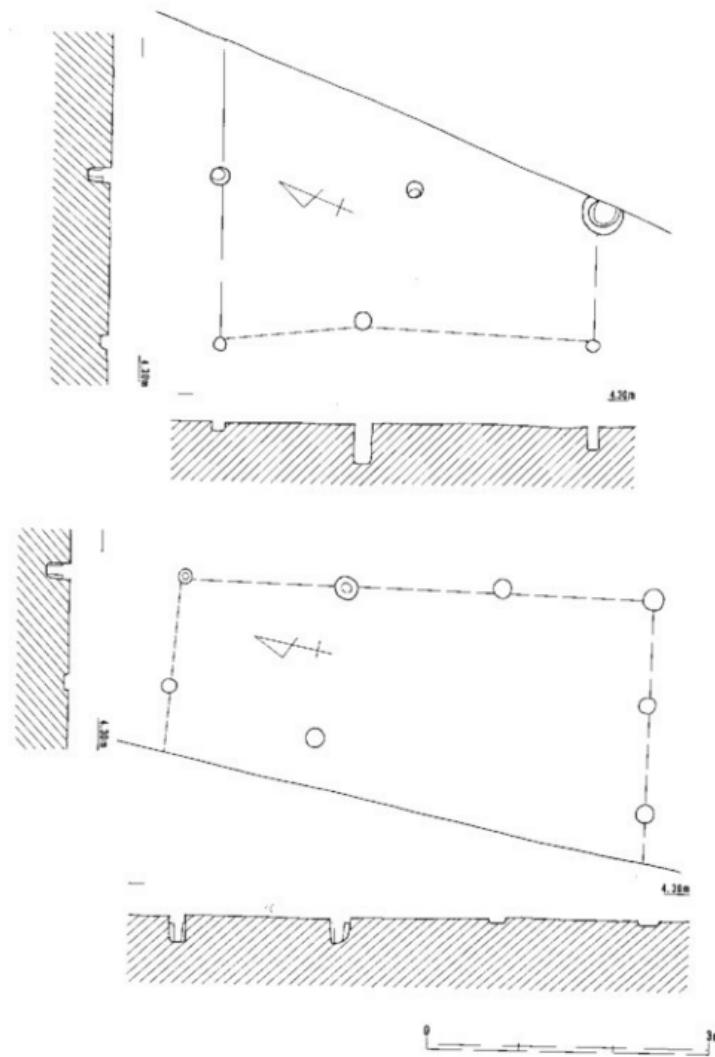
2. 第1面の概要（第65図、図版三七・三八）

Vla・Vlaの水田土壤を検出し、それに伴う溝・畦畔等の遺構の精査をおこなった。

水田址に伴う畦畔・溝6条の他、調査区の北半において、方形周溝墓状に巡る溝（溝1008）・



第65図 B1地区全体図



第66図 B1地区建物1001・1002

中世前半と考えられる溝（溝1007）・建物2棟を検出している。

遺構を時期別に見るならば中世前半・古墳時代前期・弥生時代後期末～古墳時代初頭に分けることが出来る。

中世前半の遺構は水田に伴う溝を以外には調査区の北半に建物がある。古墳時代前期の遺構は方形周溝墓底に巡る溝1008が調査区北端に存在する。これらの遺構はいずれも調査区内では微高地上に位置している。

弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構は水田の畦畔の痕跡・溝が主である。これ以外の土壙1001・溝1004・溝1006は多量の遺物を持ち、調査区の北半に固まって位置することから、生活址に伴う遺構の可能性がある。これに対し、水田の畦畔の痕跡・溝は調査区の中央以南で検出される。溝1002・溝1003はVIIa層に伴う溝であり、溝1003と同方位（N22° W）を示す畦畔が3本存在する。溝1004は方位が等しく、VIIa層に伴う可能性が高い。

また、溝1001と溝1003下層はVIIa層に伴う。また、第2面で検出される溝2001は第1面においても検出でき、VIIa層に伴って存在していた可能性が高い。

3. 第1面の遺構

A. 中世の遺構

①建物（第66図、図版10下）

掘立柱建物を2棟検出した。

建物1001はN19° Wに一方の軸を持ち、南北2間（4.0m）・東西1間以上（3.2m）の規模をもつ建物である。柱間の間隔にはばらつきがあるが、1.5m・2.5m・1.8m・1.4mである。

建物1002はN10° Wに一方の軸を持ち、南北3間（6.1m）・東西2間以上（2.8m）の規模をもつ建物である。柱間の間隔にはばらつきがあるが、南北方向は1.8m、東西方向は1.1mである。

2棟とも出土遺物・層位からの時刻の確定は出来ないが、方位・柱間等から勘案して中世と考えられる。

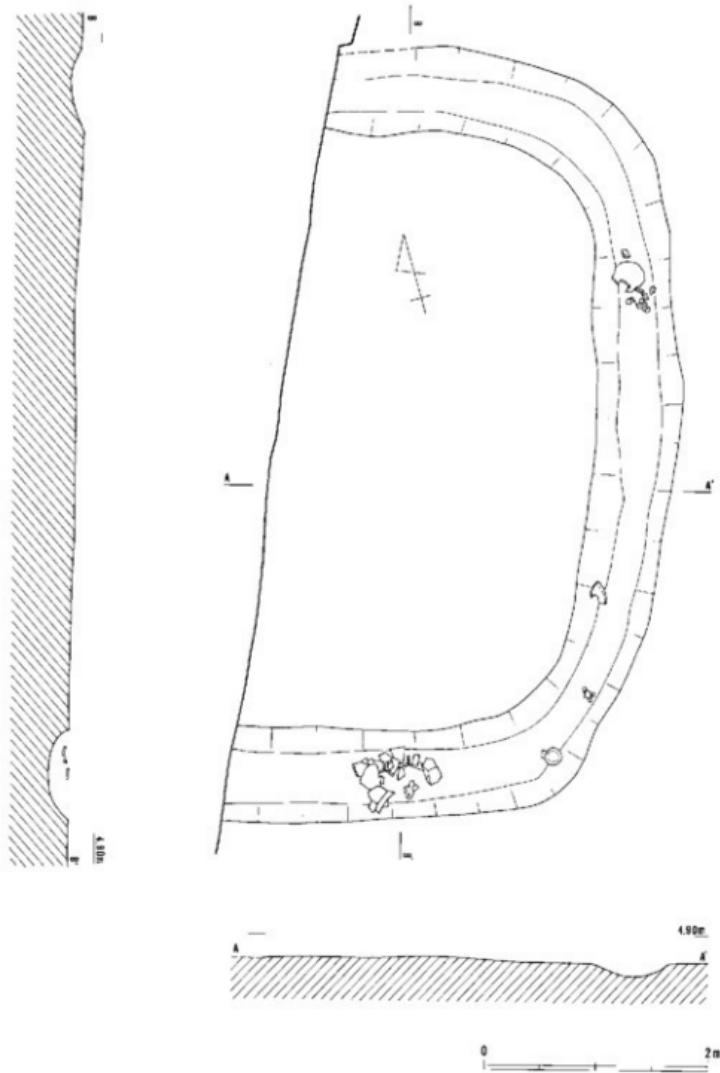
②溝（第66図、図版38上）

鎌倉時代と考えられる溝を3本検出している。溝1007は握り替えがあり、北溝と先行する南溝にわかれる。

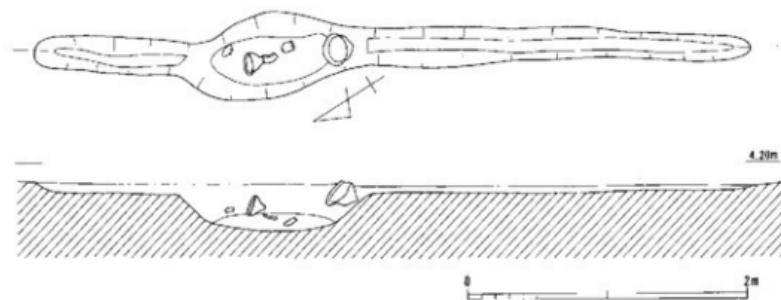
北溝は幅約1.5m・深さ約0.4mの断面じ字形の溝である。N47° Wに走行をもつ。

南溝は幅約1.5m・深さ約0.4mの断面じ字形の溝である。N66° W～N54° Wに走行をもつ。

以上の2本の溝の他に調査区北西端に懸かる中世とした落ち込みがある。後述するB-2地区から延びる中世南北溝の延長と考えられる。遺物は溝1007より須恵器片が出土している。



第67図 溝1008



第68図 土塙1001

B. 弥生時代末から古墳時代初頭の遺構

①方形周溝墓状遺構—溝1008（第67図、図版38下）

方形周溝墓状に巡る溝（溝1008）は調査区北端において確認されている。幅0.8m・深さ約0.2m、浅いU字形の溝がコの字形に検出されており、溝の内法で1辺約5.6mを測る。方位は1辺をN23°Eにとっている。

遺物は溝内からは、土師器甕（布笠式）と共に山陰系の土師器甕が出土している。

主体部の検出はないが、形状・出土遺物等から推して方形周溝墓の可能性が考えられる。

②土塙1001（第68図、図版43）

長径1.2m・短径0.6m・深さ0.3mの長楕円形の土塙に溝が取りついた形態の遺構である。方位をN30°Wにとっている。全長5.1m、溝幅は約0.2m、溝の断面形状はU字形、土塙の断面形状もU字形である。土塙内には土器と共に炭が多く入り、火を使った跡が伺える。竪穴住居に伴う土塙・溝の形状と類似するが、周辺に伴う壁溝・柱穴は検出されず、性格は不明である。

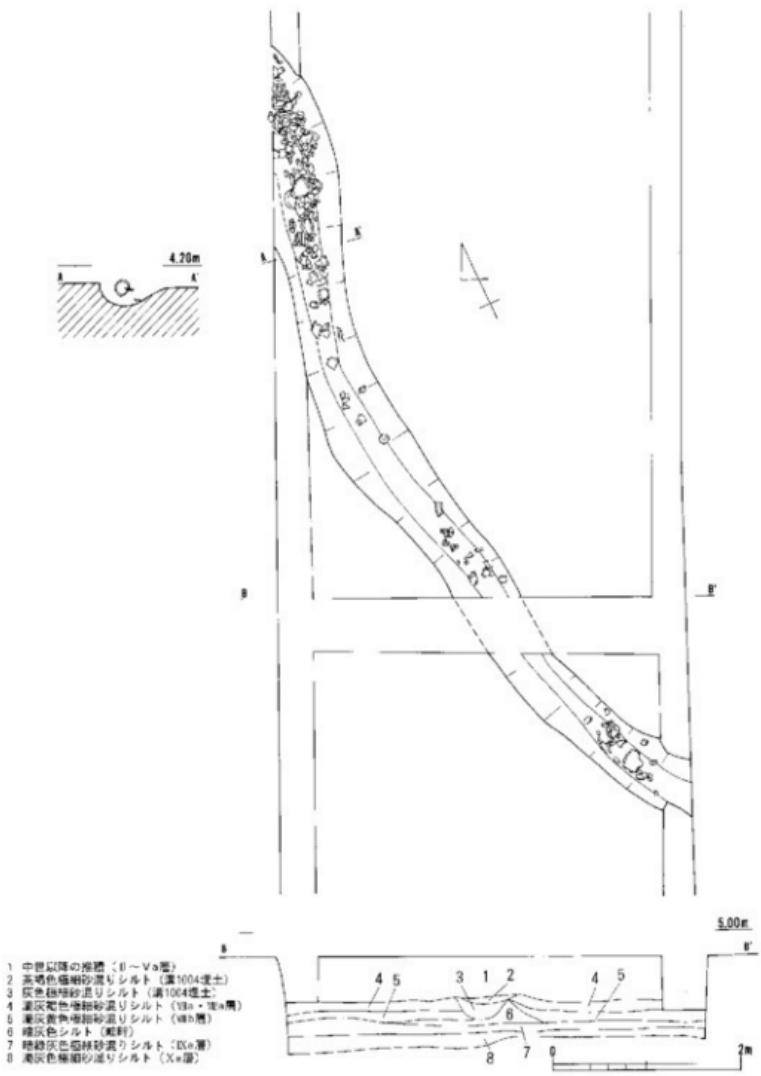
③溝1004（第69図、図版39）

溝1004は調査区北半で検出した。幅約0.7m・深さ約0.25mのU字形の断面を持つ溝である。溝は調査区を横断して検出されており、調査区内での検出長は約9m分である。溝はN10°W前後に走行をもつが、やや蛇行を見せており、厳密な規則性をもつものではない。

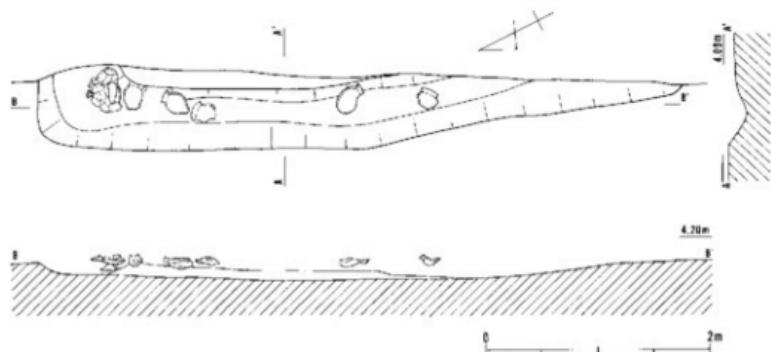
溝は上下2層に分かれるが、基本的には第1面のⅦa層に伴うものである。また、西壁では溝の下面に第3面より掘られた溝が検出されるが、平面的には検出されていない。

また、南東に約10m離れた昭和55年度の確認調査トレンチ（第10トレンチ）においても南東から北へ湾曲した状態の溝01が約7.5m分が調査されており、規模・位置・層位・土器の出土状況からみて一連の溝であると考えられる。

溝の特徴として溝内に多量の土器が投棄されている点があげられる。土器は長さ2m程度の



第69図 溝1004



第70図 溝1006

土器群となって1~2mの間隔を空けて検出されている。この点は昭和55年度の調査分においても同様の状況を示している。土器の時期は弥生時代後期末前後と考えられる。

溝の性格は明確ではない。溝肩よりも高いレベルで検出されている土器が多くあることから土器を投入して造りだした畦畔である可能性も残る。

④溝1006（第70図、図版40）

調査区北半で検出した。幅約0.55m・深さ約0.15mのV字形の断面を持つ溝である。溝は調査区の東壁より出、L字形に屈曲し、再び東壁に入っている。

調査区内での検出長は約5m分である。溝の一辺はN25°E前後に走行をもつ。溝内からは甕を中心に6個体分の土器が出土している。

造構の性格は不明である。時期は弥生時代後期末前後と考えられる。

4. 第2面の概要（第65図、図版41）

VIIa層の水田土壤を検出し、それに伴う溝・畦畔等の遺構の精査をおこなった。

先述した通り、調査区の南半で遺構の検出が可能であった。

調査区の全体の景観としては、調査区の北半では上面からの土壤化等によって第1面との分離は不可能な状態になり、遺構は殆ど検出できていない。これに対し、南半では、南西に伸びる微高地の先端とその縁辺に水田に伴う溝・畦畔・土器を伴う水口祭祀と考えられる遺構等が検出されている。

遺構面の標高は溝2001以南ではT.P3.9m~T.P3.6mである。この標高差は、溝2003~溝2008が巡る東側に微高地が存在し、南西に向かって傾斜しているために起こっている。

5. 第2面の遺構

①溝（第65図、図版41）

溝は微高地を走る溝2001と微高地の縁辺を走る溝2003～溝2008、更に一段低位な部分を走る溝2002の8本を検出している。

溝2001は先述したとおり第1面においても機能していたと考えられる溝で、位置的には微高地の上を東から西へ流れていたものと考えられる地点にある。幅約0.8m・深さ約0.2mを測り、両側に比較的太い畦畔をもっている。第1面まで使用されることから推して、時期的に第2面中では新しい溝であるか、もしくは主要な溝として機能していたかの何れかと考えられる。畦畔の内、ほぼ調査区と並行して走る畦畔は溝2001と同時に存在していた可能性が高い。

溝2001に直交する溝2006～溝2008は第2面の検出状態では溝2001に通じていないが、断ち割りによる精査を行った所埋土の違いがあり、それぞれ溝2001と通水していた時期があった可能性が高い溝である。

溝2006は幅約0.4m・深さ約0.05mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。溝2001と直交するが、更に北側へは延びない。溝2001に取りつき、水を引き込んでいた時期が存在した可能性が考えられる。

溝2007は幅約0.35m・深さ約0.06mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。また、溝2008は幅約0.3m・深さ約0.1mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。溝2007・溝2008の2本の溝ともに溝2001との交差部では溝底が浅く上がっており、先端部ではスプーン状の形状になっている。レベル的にも溝2001側から水が流れ込む形状となっている。特に溝2007は屈曲し西へと流れる形状を示しており、上器の埋納遺構が存在していることから見ても用水に関して重要な位置を占める部分であったと考えられる。

溝2003～溝2005は微高地の縁を北西から南東へと彎曲しながら流れていたと考えられる位置にある。

溝2003は幅約0.2m・深さ約0.05mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。溝2004は幅約0.5m・深さ約0.09mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。溝2005は幅約0.3m・深さ約0.03mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。

この内、溝2004は溝2003ときりあい新しい。溝2003を掘り換えた溝と考えられる。また、溝2005はやや微高地の上部を流れ、他の2本との先後関係は不明である。

溝2006は溝2003～溝2005の何れかと同一の溝と考えられるが、詳らかではない。

溝2002は溝2003～溝2005に対して更に低位に存在しており、微高地の根部に位置している。

溝は調査区東壁より出現し北東へと流れ調査区西壁際で曲がりを見せている。幅約0.6m・深さ約0.1mの規模で浅い皿状の断面形状をもつ。溝幅・断面形状・流末の形態などから推し

て獣歎の可能性が高い。

調査区の東壁際では溝2004との間に水口が開いており、甕の胴部下半が据えられている。
②水口及び土器埋置地点（第65図・第71図、図版41）

第2面では水口及び土器を埋置している地点は3ヶ所である。

水口の1ヶ所は溝2002の南端流末に位置している箇所である。この箇所は遺構の残存状況が良くなく、単なる溝のオーバーフローとも考えられる。

明瞭な水口としては、先述した溝2002・溝2004間のものがあげられる。

溝2002と溝2004は同じ洪水砂によって埋没しており、水口は開いた状態で埋没している。比高差は乏しいが、溝2004から溝2002側へと導水したものと考えられる。

水口の南側には甕の胴部下半が天地逆にして据えられた状況で検出されている。

甕の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

土器を埋置している地点は溝2007が屈曲し西流する部分である。土器は溝2007と溝2008間の畦畔内に二重口縁盃が傾倒しの状態で埋置されている。埋置は畦畔を浅く溝状に掘り土器を置き埋め戻したものと考えられる。

壺の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

6. 第3面の概要（第65図、図版42）

IXa層の水田土壤を検出し、それに伴う溝・畦畔等の遺構の精査をおこなった。

先述した通り、調査区の南半を中心に遺構の検出が可能であった。

調査区の全体の景観としては、調査区の北半では洪水砂によって遺構は削平されており、畦畔の痕跡も部分的に残存している。南半では、南西に伸びる微高地の先端とその縁辺に水田に伴う溝・畦畔・土器を伴う水口祭祀と考えられる遺構等が検出されている。遺構面の標高はT.P 4.2m～T.P3.6mである。この標高差は、溝3001～溝3006が走る東側に微高地が存在し、南西に向かって傾斜しているために起こっている。

遺構の配置状況は第2面と良く似ており、第2面の遺構配置は第3面の遺構配置を踏襲する。

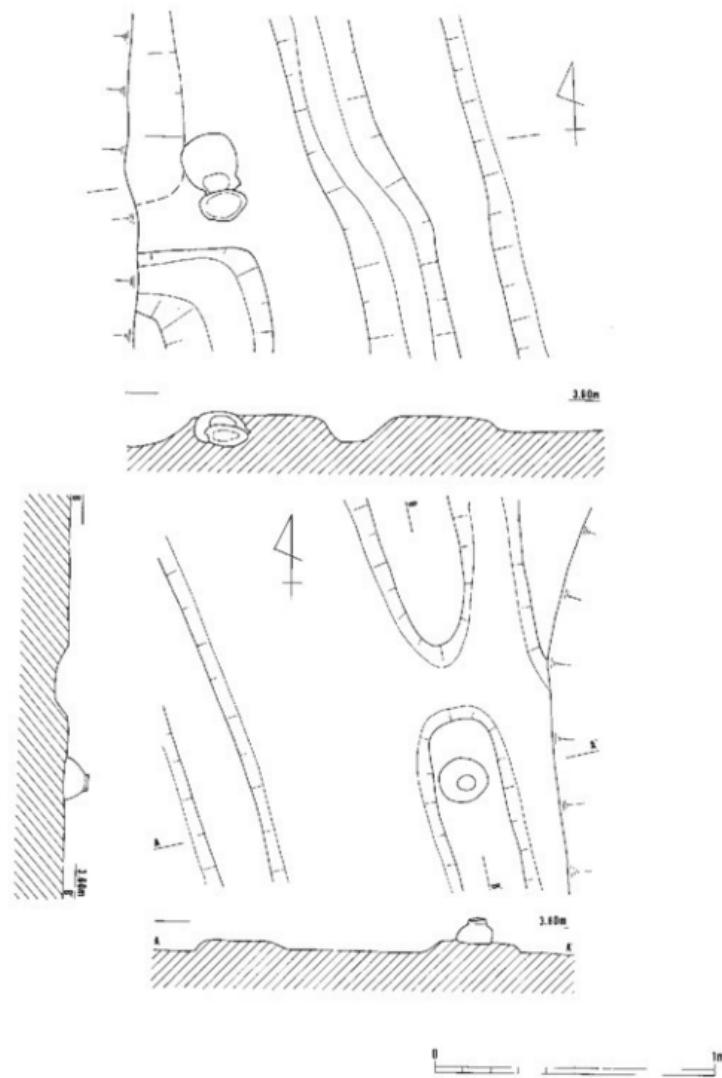
溝は微高地上を走る溝2001以外の第2面において検出された大方の溝と近似した位置に検出されている。

7. 第3面の遺構

①溝（第65図、図版42）

溝は微高地の縁辺を走る溝3001・溝3003～溝3006、更に一段低位な部分を走る溝3002の6本を検出している。

溝3004～溝3006は調査区中央西壁より調査区内に入り弧を描き再び調査区外へ消える溝であ



第71図 第2面 水口及び土器埋置状況

る。位置的には溝2006～溝2008の直下に存在する。

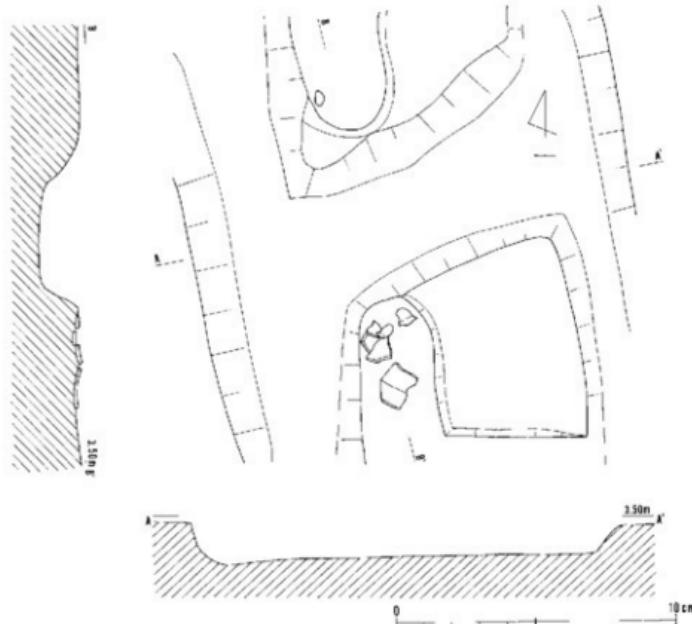
溝3004は幅約0.75m・深さ約0.02mの規模である。断面形状は浅い皿状を呈している。溝3005は幅約0.5m・深さ約0.04mの規模である。断面形状は浅い皿状を呈している。溝3006は幅約0.45m・深さ約0.05mの規模である。断面形状は浅いU字形を呈している。この内、溝3006は溝3005と切り合い新しい。

満3004～満3006が消える西壁には畦畔内に土器が埋葬されている。畦畔部分には溝が交錯しており、溝と畦畔の対応関係は不詳な点が多いが、第2面の状況から推して、用水に関して重要な位置を占める地点であったと考えられる。

溝3003は幅約0.3m・深さ約0.06mの規模、断面形状は浅い皿状を呈している。微高地の上部に近く、第2面の溝2005とほぼ同じ位置にある。

溝3001は幅約0.4m・深さ約0.08mの板模である。断面形状は浅いU字形を呈している。

溝は第2面の溝2004とほぼ同じ位置・走行をとっており、南端で水口が2箇所検出された。



第72図 第3面 水口・土器検出状況

溝3002は溝3001・溝3003に対して更に低位に存在しており、微高地の裾部に位置している。

溝は第2面の溝2002とほぼ同じ位置・走行をとっており、調査区東壁より出現し北東へと流れ調査区西壁際で直角に近い曲がりを見せていている。幅約0.5m・深さ約0.14mの規模で浅い皿状の断面形状をもつ。南端の流末の形態は溝2002同様袋状に終息した状態である。

溝幅・形状から推して、獸歎の可能性を考えられる。

水口は溝3001との間に2箇所開く他、水田にも確認できる。

②水口及び土器埋置地点（第65図・第72図、図版42）

第3面では水口及び土縁を埋置している地点は4ヶ所数えられる。

先述した溝3004～溝3006の土器埋置地点以外はいずれも溝3002に伴うものである。

この内、第72図に上げたものは水口の両側に破碎した土器片を置いている。

遺物の時期は弥生時代後期である。

8. 第4面の概要（第65図、図版43）

Xa層の水田土壤を検出し、それに伴う溝・畦畔等の遺構の精査をおこなった。

遺構は調査区の全域で検出されているが、北半から中央部での残存状況は良くない。洪水砂による遺構の削平、上層からの土壤化によって畦畔の痕跡も部分的に残存している。南半では、南北に伸びる微高地の先端とその縁辺に水田に伴う溝・畦畔が検出されている。遺構面の標高はT.P4.0～T.P3.4mである。

畦畔以外には調査区北端で土壤1基・中央部で溝2本・南半で溝3本が検出されている。

9. 第4面の遺構

①上横4001（第65図）

調査区北端に位置する。長径3.6m・短径0.9m・深さ0.1m、浅いすり鉢状の断面形状をとる長楕円形の土壤である。本遺構面で検出しているが、面を切っており、若干新しい遺構である。

②溝（第65図、図版43）

溝のうち、溝4001は溝3002とほぼ同じ位置にある。調査区西壁から南東へ走り屈曲して東壁に入る溝である。幅約0.6m・深さ約0.12m、浅い皿状の断面形状を呈している。

溝4002・溝4003は西壁より調査区内に入り、弧を描いて南流し、再び調査区外へ消える溝である。溝4002は幅約0.7m・深さ約0.1m、浅いU字状の断面形状の溝である。溝4003は東肩のみが検出されている。何れかの溝は溝4001と同一溝の可能性が高いが、現状では判然としない。

溝4004・溝4005は調査区の中央を東西方向に流れる溝である。溝4004は幅約2.2m・深さ約0.2m、浅いU字状の断面形状をもつ。また、溝4005は幅約1.2m・深さ約0.16m、浅いU字状の断面形状をもつ溝である。

第3節 B-2 地区の調査

1. 土層堆積（第73図）

B-2地区の土層堆積は第73図にあげた。基本的にはB-1地区の堆積と同じであるが、微高地に位置し、上層からの影響・削平・土壤化等が激しく、中世以降の堆積が占める割合が大きく、調査区の南端を除き中世面の直下からB-1地区の第3面即ちIXa層が出現している。このため、B-2地区では、主に第1面をIXa層・第2面をXa層として調査を実施した。

2. 第1面の概要（第73図、図版四四）

第1面では一部でVIIa層、土にIXa層の水田土壤を検出し、それに伴う溝・土器群の精査をおこなった。また、B-1地区と同様に、鎌倉時代と考えられる溝を検出し部分的に精査をおこなった。この溝はB-1地区においてその延長が検出されているものである。N27°E前後に走行をもち、幅約0.5m・深さ約0.2mを測る。

溝1011は調査区北壁より出て湾曲し西壁へと入るもので、幅約1.4m・深さ約0.5mを測る。断面形状は浅い皿形を呈しており、地形に沿って湾曲した形状であることから推して、自然流路もしくは谷地形の凹地と考えられる。高杯等数点の遺物がその肩部より検出されている。

溝1012は調査区両半で検出された。N40°W前後に走行をもち、幅約0.6m・深さ約0.2mを測る。溝の北側には畦畔と考えられる高まりが存在しており、水田に伴う溝であったと考えられる。また、溝1012は層位的には溝1011の最上層と同じ埋土が入っており、同時期に存在した可能性がある。

溝1012と重なる土器群は層位的には上層に位置している。B-1地区のVIIa層に対応する層位と考えられるが、遺構の性格は不明である。

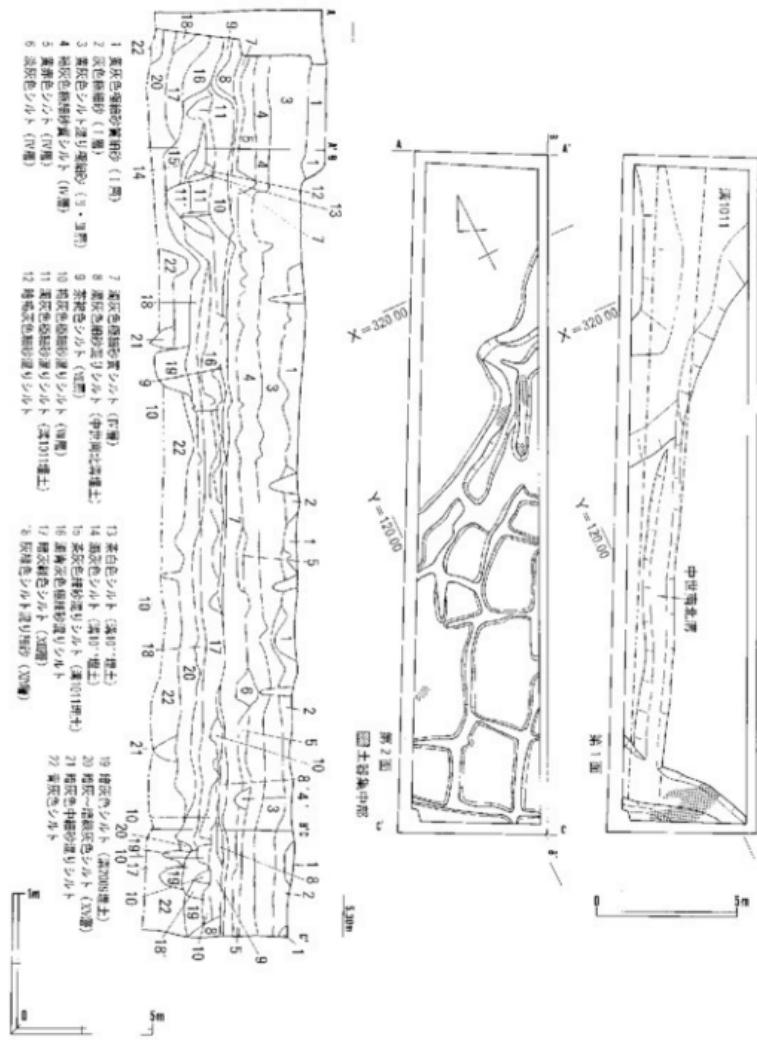
また、面的には水田址に伴う明確な畦畔は検出されなかつたが、断面では幾つかの畦畔が検出されており、一部では土器を畦畔内に包含している状況が確認されている。

3. 第2面の概要（第73図）

第2面ではXa層の水田土壤を検出し、溝・畦畔の精査をおこなった。

第1面で検出した溝1011と同様の走行に畦畔が検出されている。これらは微高地の縁辺に沿って水田が展開している状況を示すものと考えられる。しかし、全体として遺構の残りが悪く、且つ水田畦畔の痕跡が複合しており、個々の水田区画等は捉え切れない。

調査区北半部分に水口と考えられる土器の密集箇所を3ヶ所検出しているが、周辺の水田土壤の残り具合が悪く、導水の詳細な点については不明である。



第73図 B-2地区遺構配置図・土層断面図

第4節 遺物

1. 遺構出土の遺物

溝1004出土の遺物

まとまった量の土器が出上している。(423)から(427)は壺である。(423)は球形の胴部に外反して開く広口壺である。器高は24.0cm、口径は13.8cmである。(424)も広口壺で、口縁端部は面をもつ。(425)は口縁端部が上下に拡張され、沈線の間を梯階波状文で溝たし、さらに2個一対の円形浮文を8か所に施している。(426)と(427)は二重口縁の壺である。(426)は頸部に刻目をもつ突帯を巡らせる。頸部の内外面は丁寧なヘラミガキを行っている。口径は19.5cmである。(428)から437は壺である。(428)は体部外面を右上がりの粗い叩きのち下半部を削毛目で仕上げる。器高は19.4cm、口径は13.4cmである。(429)は外面を叩き、内面を削毛目を施し、器高は20.9cm、口径は14.3cmである。(430)は胴部最大径がやや上位にあり、器高は18.8cm、口径は17.9cmである。(436)は口縁端部をわずかにつまみ上げ、器高は13.1cm、口径は15.7cmである。(439)から(447)は鉢である。(439)から(441)は内湾気味の体部が開くもので、(439)は器高は6.4cm、口径は11.0cm、(440)は器高は7.4cm、口径は12.7cmである。(441)は底部が台状を呈し、器高は10.0cm、口径は18.9cmである。(443)から(445)は口縁部が屈曲している。(443)は器高は9.6cm、口径は15.7cm、(444)は器高は6.8cm、口径は18.0cm、(445)は器高は15.0cm、口径は30.1cmである。(446)と(447)は泡弾形を呈し、底部には穿孔が認められる。外面は右上がりの叩きを行い、(447)は器高は12.2cm、口径は17.0cm。(448)から(450)は高杯である。(448)は受部は深く、口縁部が屈曲し、外反して開く脚部に3箇所穿孔している。器高は15.0cm、口径は20.2cmである。(449)は受部の内外面をヘラミガキを行い、口径は15.9cmである。(450)は(448)とはほぼ同形で、器高は12.4cm、口径は19.4cmである。(451)は大形の器台である。受部は直線的に大きく開き、内面は丁寧なヘラミガキを行う。口縁端部は上下に拡張して面をなし、そこに上向きの鋸歯文を配したのち2個一対の円形浮文を施している。口径は44.1cmである。

溝1008出土の遺物

周溝内から出土した土器である。(452)は球形の胴部に小さい平底をもつ壺で、胴部最大径は13.2cmを測る。(453)は布留系の壺である。胴部は球形で、口縁端部はわずかに肥厚し、器壁は薄い。磨滅のため調整は不明であり、胎土に細砂粒を含有している。(454)は山陰系の大型の壺である。胴部はやや上位で最大径をもち、二重口縁へ続く。外面は叩きと刷毛目を併用し、下半の一部に縱方向のヘラミガキが認められる。器高は14.9cm、口径は31.7cmである。(455)は小さい平底の鉢で、外面は右上がりの叩きを施す。(456)は小形の受部を設けた高杯

で、口径は10.9cmを測る。(457) は屈曲して聞く脚部である。(458) は山陰系のいわゆる鼓形器台である。磨滅のため調整は不明であり、口径は18.6cmを測る。

溝1006出土の遺物

(461) は頸部が「く」字に屈曲する壺である。体部外面下半は縦方向の粗いヘラ磨き、下半は右上がりの叩き、内面は刷毛でなでている。口縁端部は丸み目を施し、口径は14.0cmである。(460) は高杯である。脚部はほぼ単純に開き、4か所に穿孔を行う。受部は内湾気味に開き、口縁端部は短い線状の凹凸をもつ。器高は25.9cm、口径は18.4cmである。

溝1009出土の遺物

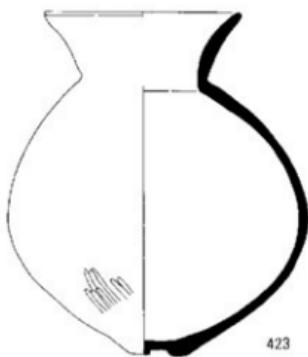
(459) は器高が8.5cm、口径が16.1cmの鉢である。口縁部は短く屈曲し、体部外面には一部にヘラ磨きが認められる。底部には木葉痕を留めている。(460) は口径が24.2cmの高杯の受部である。浅く内湾して凸岸から大きく外反し、口縁端部をわずかにつまみ上げている。

その他の出土の遺物

(463) は器高22.0cmの壺である。球形の体部は最大径が20.9cm、外面下半は一部にヘラ磨きを行い、内面は刷毛目で仕上げる。頸部は短く外反し、口縁端部を短くつまみ上げる。底部は上げ底氣味の平底である。(464) と(465) は二重口縁の壺である。(464) は口径が26.2cm、口縁外面に4条1単位の波状文を上下2段に施している。(466) は口縁端部を上下に拡張し、その外面に竹管状の工具で波状文を行い、さらに3個1単位の円形浮文を8か所に行っている。口径は19.3cmである。

溝2011他出土の遺物

(467) は頸部が「く」字に屈曲する壺である。体部外面は右上がりの叩きを行い、最大径は16.6cmである。口径は13.0cm、底径は3.6cmを測る。(468) は器高は8.3cm、口径は17.8cmの鉢である。口縁は短く屈曲し、体部外面に叩きを施す。(469) は台付鉢で器高は6.9cm、口径は8.4cmを測る。体部外面の一部に縦方向のヘラ磨きが認められる。(470) と(471) は高杯である。(470) は受部が大きく外反して開き、器高は13.7cm、口径は15.6cmである。(471) は受部が浅く、脚柱部が長い。調整は不明で、器高は25.9cm、口径は18.4cmである。(472) は大きく聞く脚部で、外面は縦方向の細かいヘラ磨き、内面は横方向に刷毛でなでて仕上げる。径は21.0cmである。



423



424



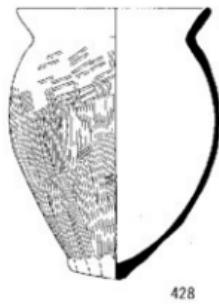
425



426



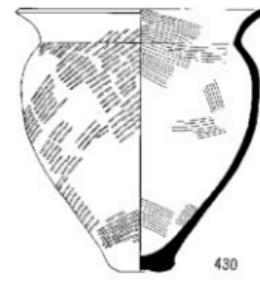
427



428



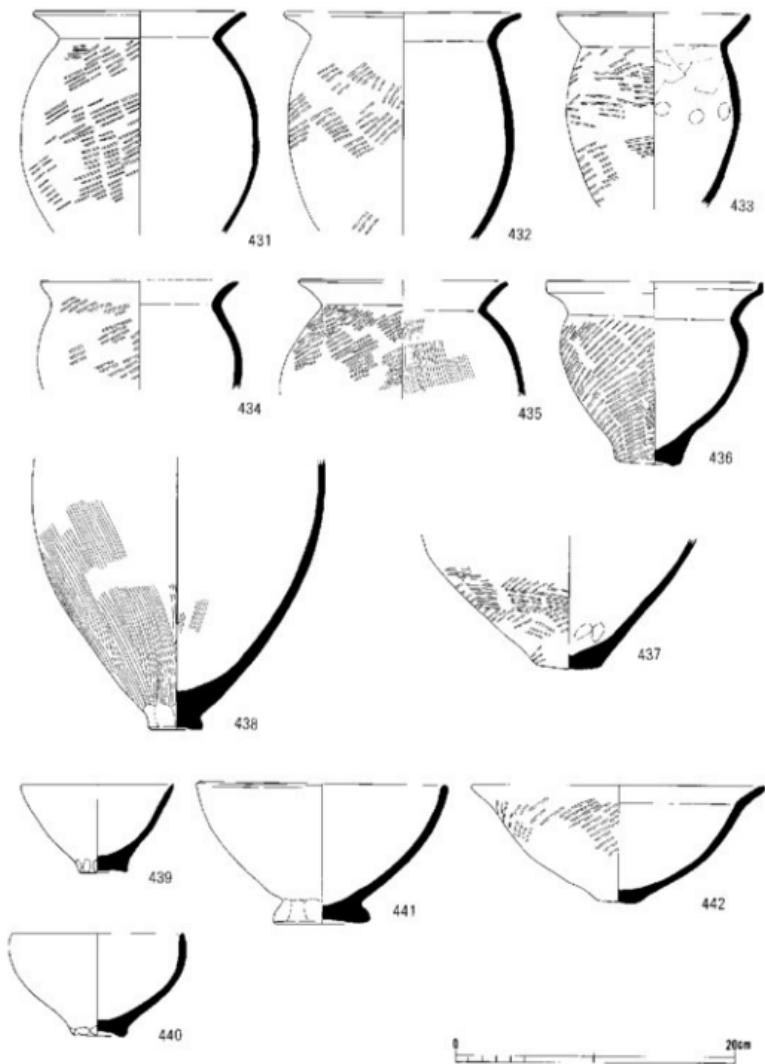
429



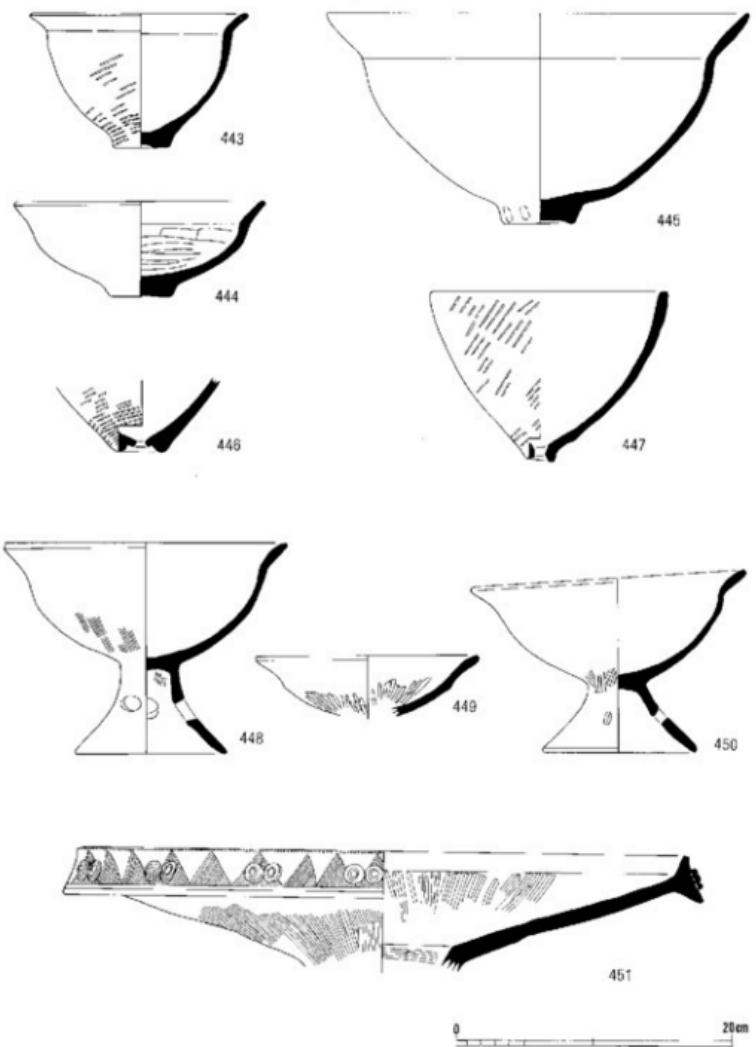
430

A scale bar with markings from 0 to 20 cm, with a 20 cm label at the end.

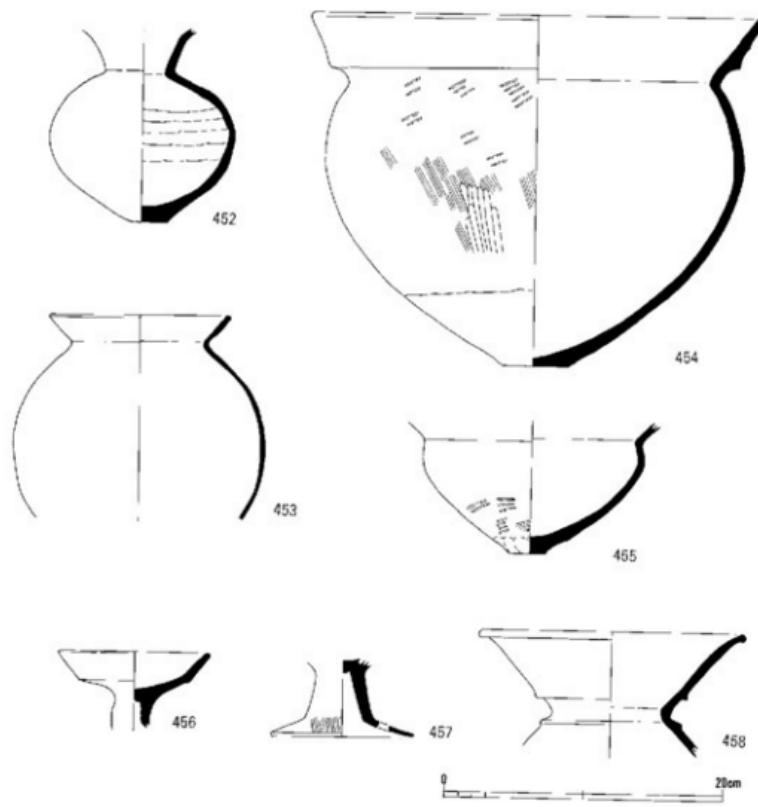
第74図 满1004出土土器(1)



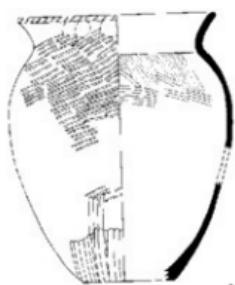
第75図 津1004出土土器(2)



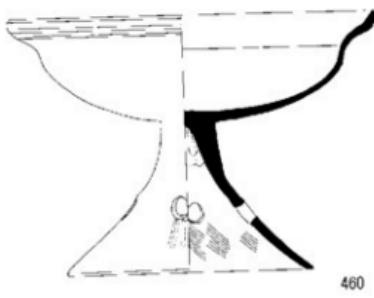
第76図 溝1004出土土器(3)



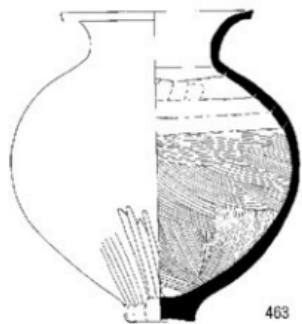
第77図 滋1008・出土土器



461



460



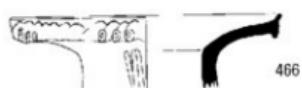
463



464

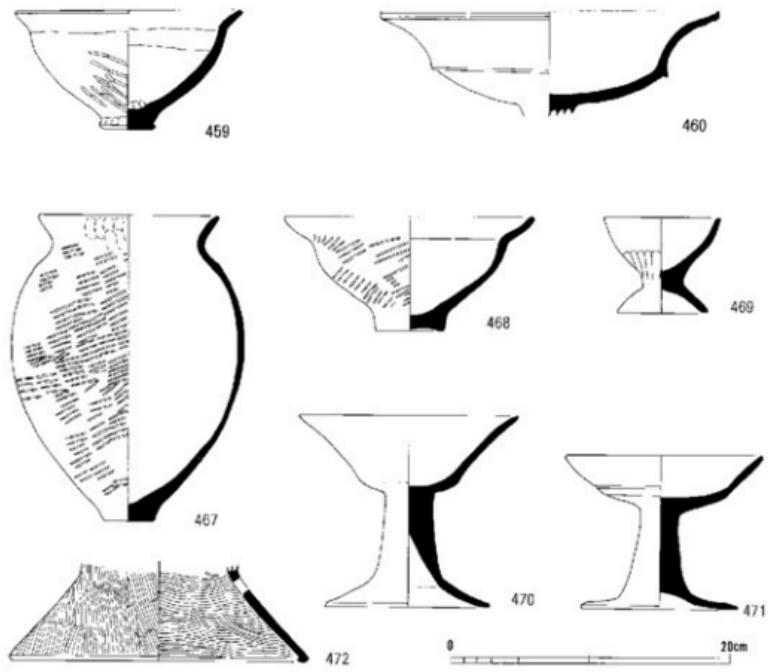


465



466

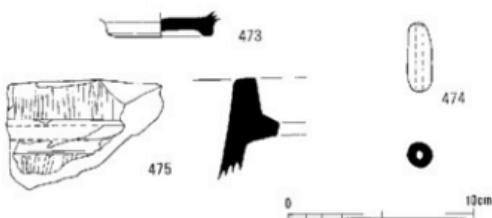
第78図 溝1006その他の出土土器



第79図 溝1009・溝2011他出土土器

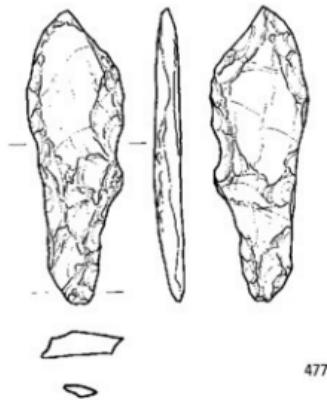
2. 包含層出土の遺物

B地区の包含層から出土した遺物のうち、区別したものは(473)～(475)と(477)の4点のもである。これからの中、(473)～(475)及び写真を載せた(476)は中世に属するものである。



第80図 包含層中出土の磁器・石鍋・土錐

で直線的に延び、口縁端部は水平な面を持つ。森田分類によるC-1群に属すると思われる。第1面までの包含層中より出土した。



第81図 B地区出土の石器 (1/1)

(473)は青磁碗底部である。第1面上より出土した。

(474)は土師質の管状土錐である。円柱状は呈しており、全長3.8cm、径1.3cmを測る。第1面までの包含層中より出土した。

(475)は滑石製石鍋である。破片であるため傾きは不正確であるが、口縁部まで

(476)は白磁碗の体部下半片である。石器は1点のみ出土、図示した。

(477)はサヌカイト製の石錐である。先端は磨耗するが、つまみ部と錐部の境は明瞭ではない。

長さ50.5mm・幅17.5mm・厚さ5mm・重量5.1gを計る。

第1面上の包含層中から出土した。

第6章 まとめ

今回の調査の成果として大きくは4点あげられる。A. 溝1001出土の江戸時代の遺物群（A地区）・B. 中世の屋敷地（A地区）・C. 古墳時代～中世の土地利用と地割り（A地区・B地区）・D. 弥生時代後期の水田遺構（主にB地区）。

以下、各点について簡単に触れて行く。

A. 溝1001出土の江戸時代の遺物群について

小破片を含め300点を越える土器が出土しているが、その大半を占めるものは肥前系陶磁器である。それ以外には丹波焼陶器、在地産と考えられる土師質土器類がそれに続く。

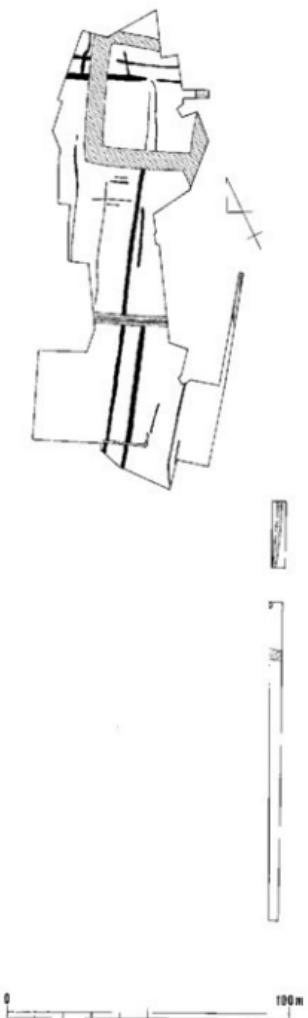
図示した肥前系陶磁器類を主とした個別の土器の時期は前述しているが、17世紀末～18世紀前半に集中していることが指摘される。17世紀後半を遡るものは、極少ない。水滴・皿類・壺類で若干が17世紀後半に遡る可能性があることを除けば、出土点数の多い碗類で有田製染付や青磁・鉄釉碗を除けば瀬戸美濃系天目茶碗・中國製青花（128）があげられるに留まる。即ち、17世紀後半へと遡るものは、文異・壺・大皿類や優品の碗であり、いずれも若干伝世された期間が想定されるものである。また、18世紀後半以降に下るものは陶磁器類ではなく、僅かに施釉土質上器2点が19世紀代の可能性のあるもので、上層からの混入を伺わせるものである。知りうる限り、18世紀前半よりも下るものはない。また、この土器群が指示する17世紀末～18世紀前半の年代は、共に出土した木簡に記された宝永参年（1706年）とも良く合致している。これらの遺物が一時期に一括投棄されたか、徐々に廃棄されたかは検討の余地があるが、少なくとも17世紀末～18世紀前半の50年足らずの極短られた時間に投棄されたことが推測される。

遺物を廃棄した主体については明確なことは不明であるが、出土した文字資料のうち、習字に使用したと考えられる（144）（145）は廃棄した主体に一番近い遺物であろう。また、遺物のうち、色絵磁器の出上は2点と少なく、近隣の明石城武家屋敷での出土量に比べ少量であるが、廃棄されている肥前系染付磁器を主とした陶磁器の質自体は、有田製・明青花を含め、全体として良品が多く、粗良品は少ない。この点から推して、遺物は武家屋敷の様式には劣るが比較的裕福な階層が廃棄した塵芥であったことと推測される。

地理的には、調査地点は18世紀前半には、西側に集落のあった古田村の村域に入っており、遺物は古田村の比較的裕福な階層から出た塵芥であった可能性が高い。

B. 中世の屋敷地について

屋敷地はA・B 2つの屋敷地を検出している。12世紀には建物が営まれ、14世紀まで継続している。ともに14世紀にはN26° E前後に建物の方位をとり、屋敷地Aは溝を巡らせるようになる。屋敷地が立地する部分は更に下層の旧地形（第3面）では共に微高地にあたり、两者



第82図 第1面と第2面の地割り

の間は谷部であった部分である。若干の高礫の地に住居を置き、周辺を水田としていたことも考えられる。これから屋敷地からは輸入陶磁器の出土量も極少なく、遺物からは、A・B間に際立った格差は現れていない。屋敷地Aには幅2mを越える溝が巡ることは確かであり、小札の出土上は注目されるが、屋敷地Aが更に東へ大きく広がる館庭の一部であるのか、単体の方形の屋敷地であるのか、検討の余地は残る。現状では、いずれの屋敷地も、独立自営農民の域を大きくはでないものの住居であったと考えておく。

C. 古墳時代～中世の土地利用と地割り

A地区第2面の概要においてI～IVの方位ら地割りを大別した。また、凡その時期も次の通りと考えている。

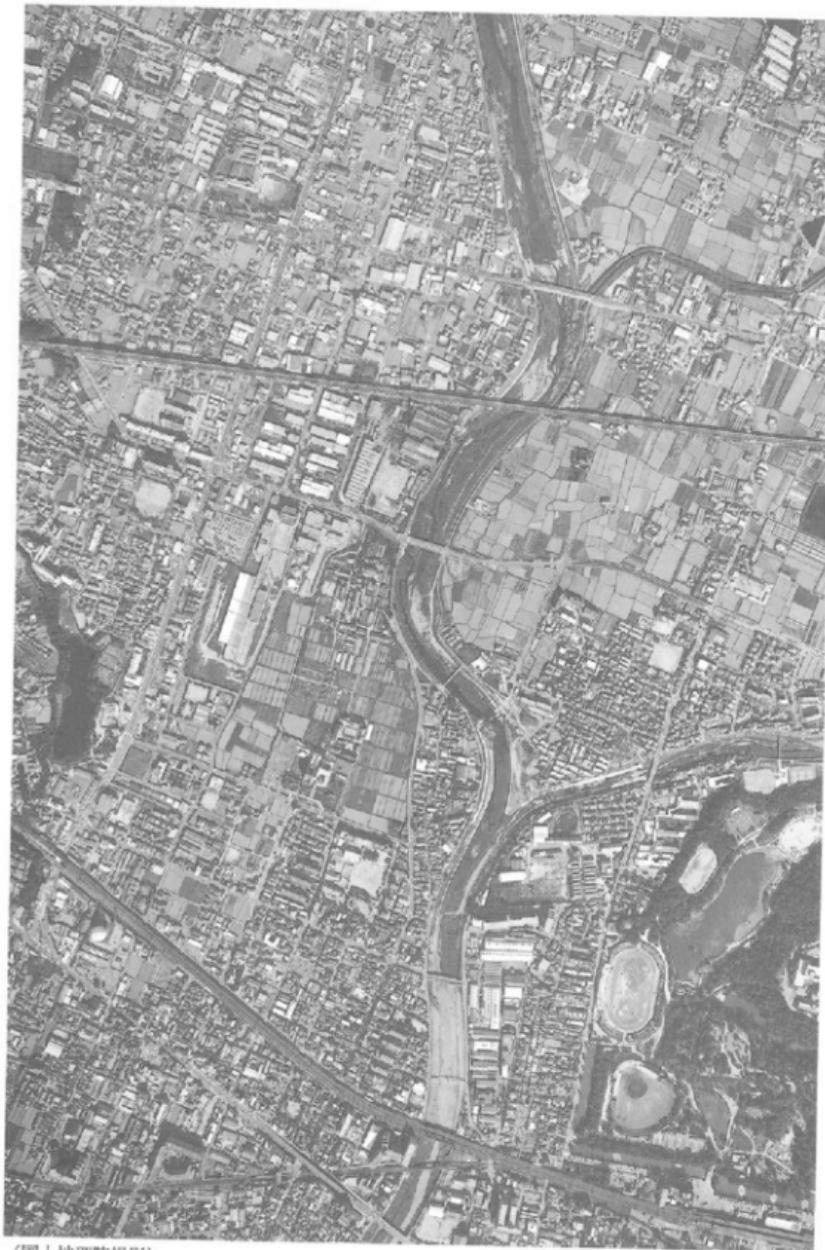
I - N35° W	8世紀以前
II - N10° W～N15° W	8世紀以前
III - N15° E	8世紀後半
IV - N27° E～N30° E	8世紀後半以降

非常に大まかに捉えるならば、西から東へと地割りの方向が変遷してきており、新しい時期ほど東へ振ることが判る。また、IVとした地割りは満2003が造られる8世紀後半から9世紀にかけてほぼ確定し、12世紀には一度N20° E前後まで西へ振り、14世紀にはN27° E前後にもどることが考えられるが、基本的には9世紀以後近世に至るまで若干変化しながらも大きくは踏襲してきたものと考えられる。

D. 弥生時代後期の水田遺構

弥生時代後期の水田遺構はB地区を中心に検出しているが、今回の調査では微高地の縁辺を掠めて検出したにすぎない。周辺地での調査による資料増加を期待する。

図 版



（国土地理院撮影）



1) 遺跡の遠景（北から）



2) 遺跡の遠景（南から）



1) 平成3年度 調査区遠景（南から）



2) 平成2年度 調査区遠景（西から）

図版四 A地区（平成二年）



第1面全景（航空写真）



1) 溝1001全景（南から）



2) 溝1001堆積状況（北から）



1) 屋敷地A遠景（南から）



2) 屋敷地Aを区画する溝1002（東から）



1) 溝1002（東から）



2) 溝1002—石五輪塔検出状況



1) 屋敷地Aを区画する溝1004（西から）



2) 溝1004堆積状況（西から）



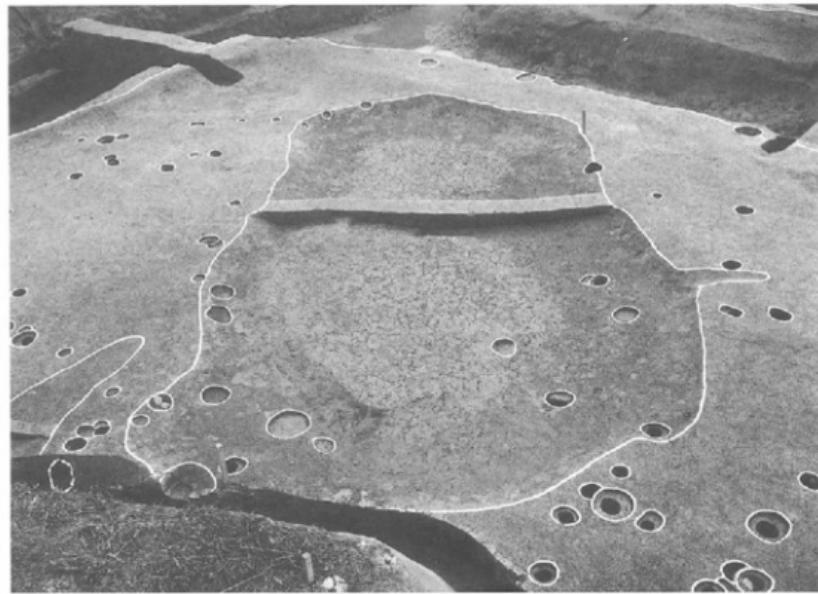
1) 屋敷地A内の遺構（北から）



2) 屋敷地A内の遺構（西半部）



1) 屋敷地A内の遺構（東南半部）



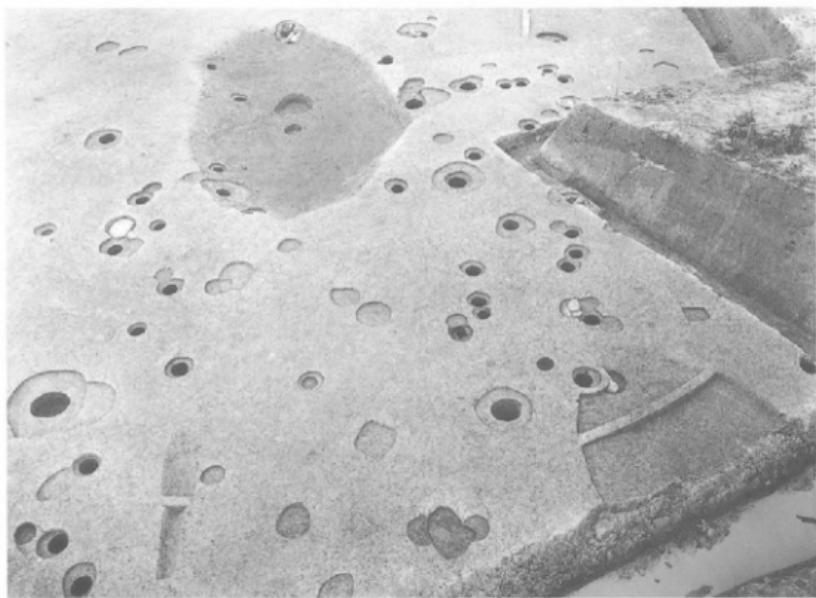
2) 池状落ち込み（北から）



1) 屋敷地A内の遺構（北東半部）及び溝1004



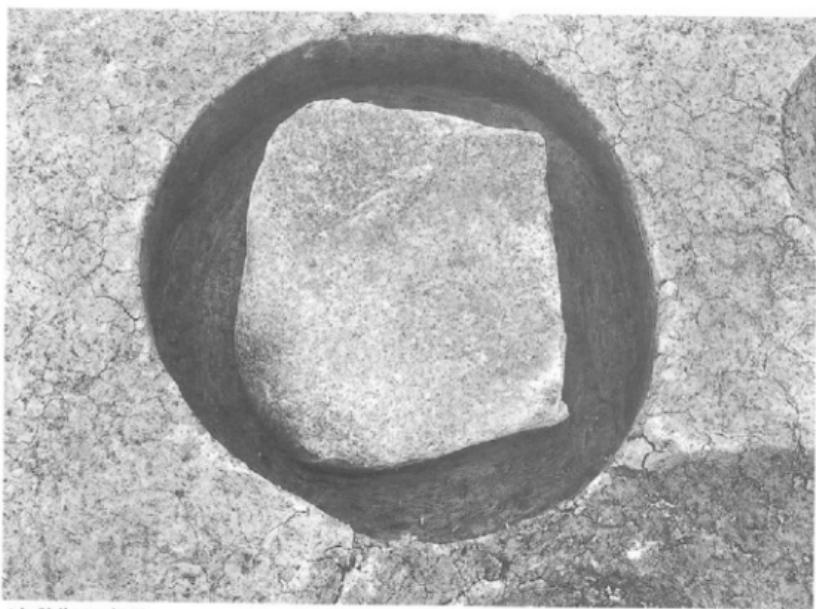
2) 第1面の遺構（北から）



1) 建物1002（南から）



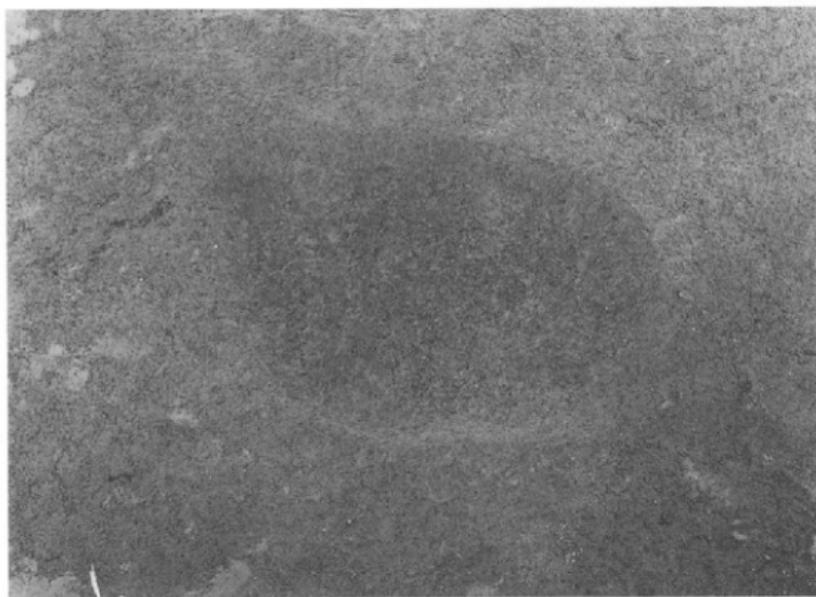
2) 建物1001（東から）



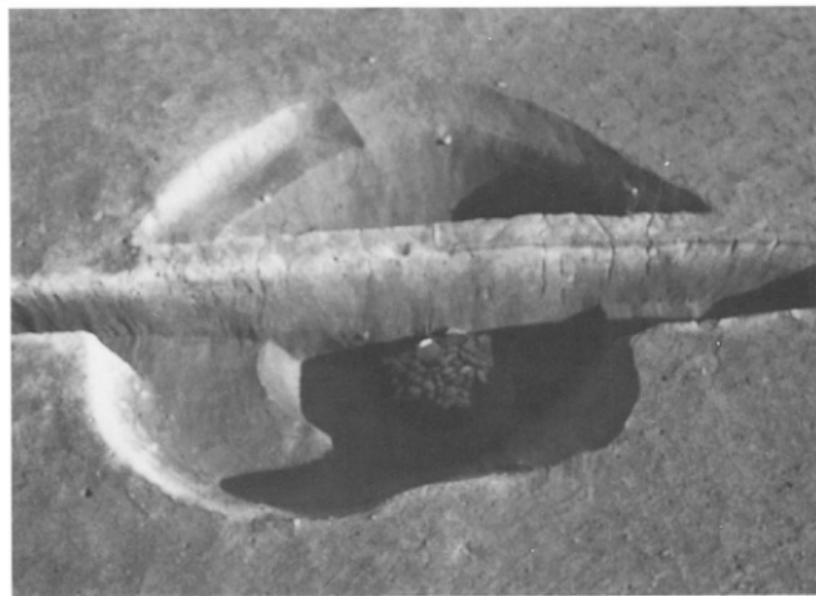
1) 建物1001根石



2) 建物1004柱根



1) 焼土壤



2) 井戸1001(西から)



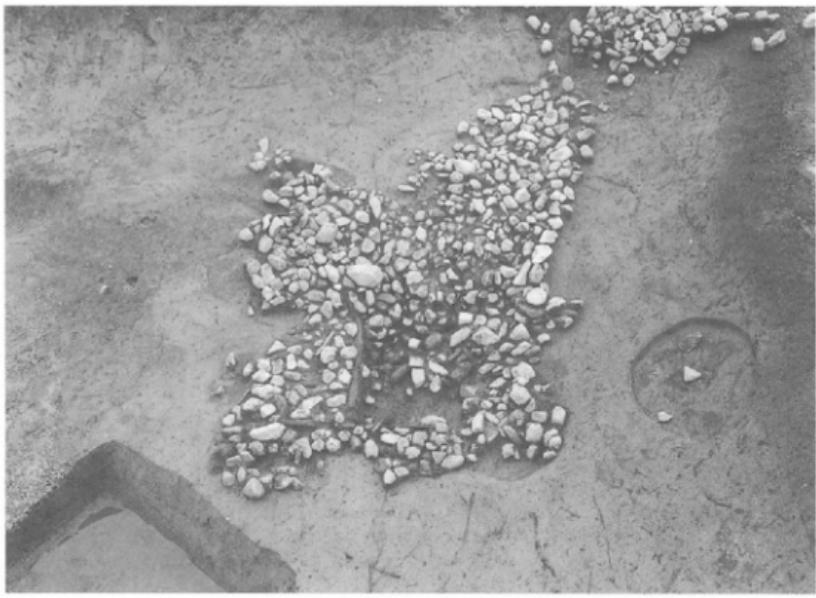
1) 井戸1002・1003・1004（西から）



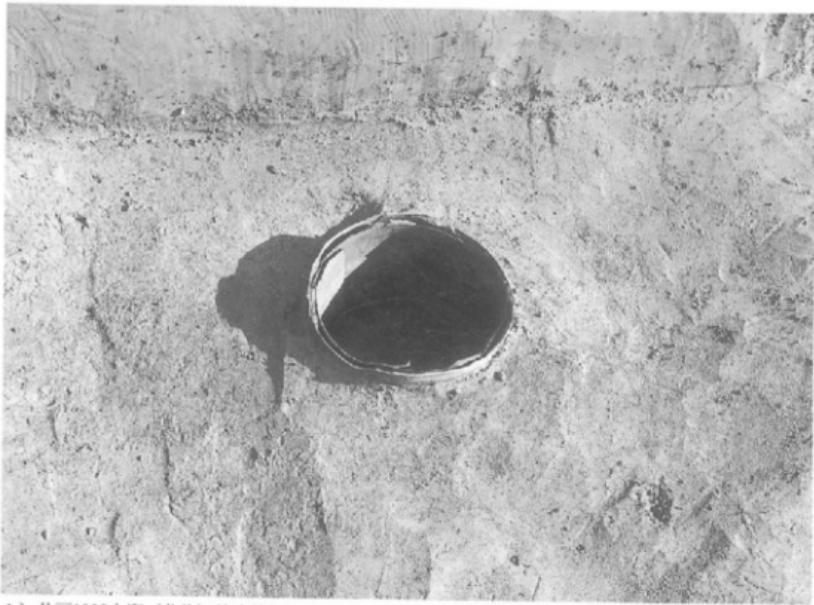
2) 井戸1003（西から）



1) 集石遺構検出状況



2) 井戸1004の集石による埋没状況



1) 井戸1002水溜（曲物）検出状況



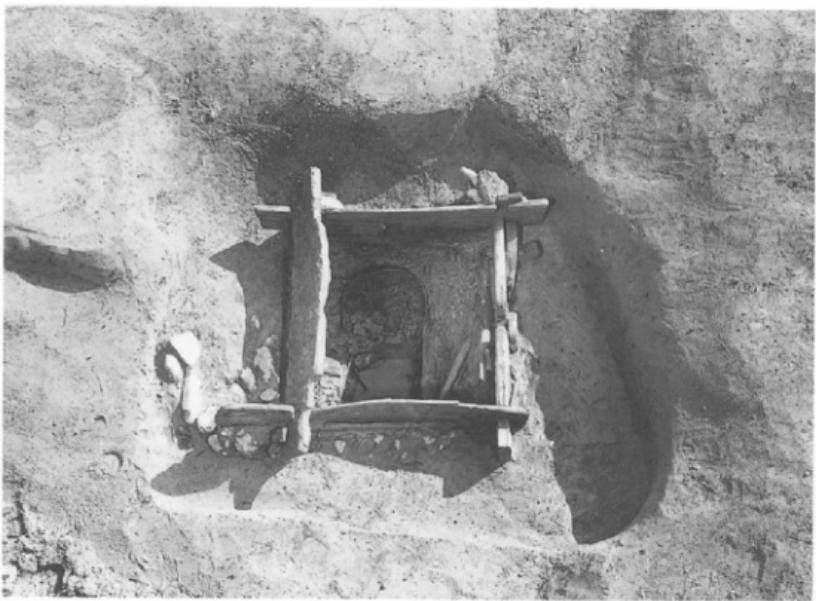
2) 井戸1002断面



1) 井戸1003水溜（白軒用）検出状況



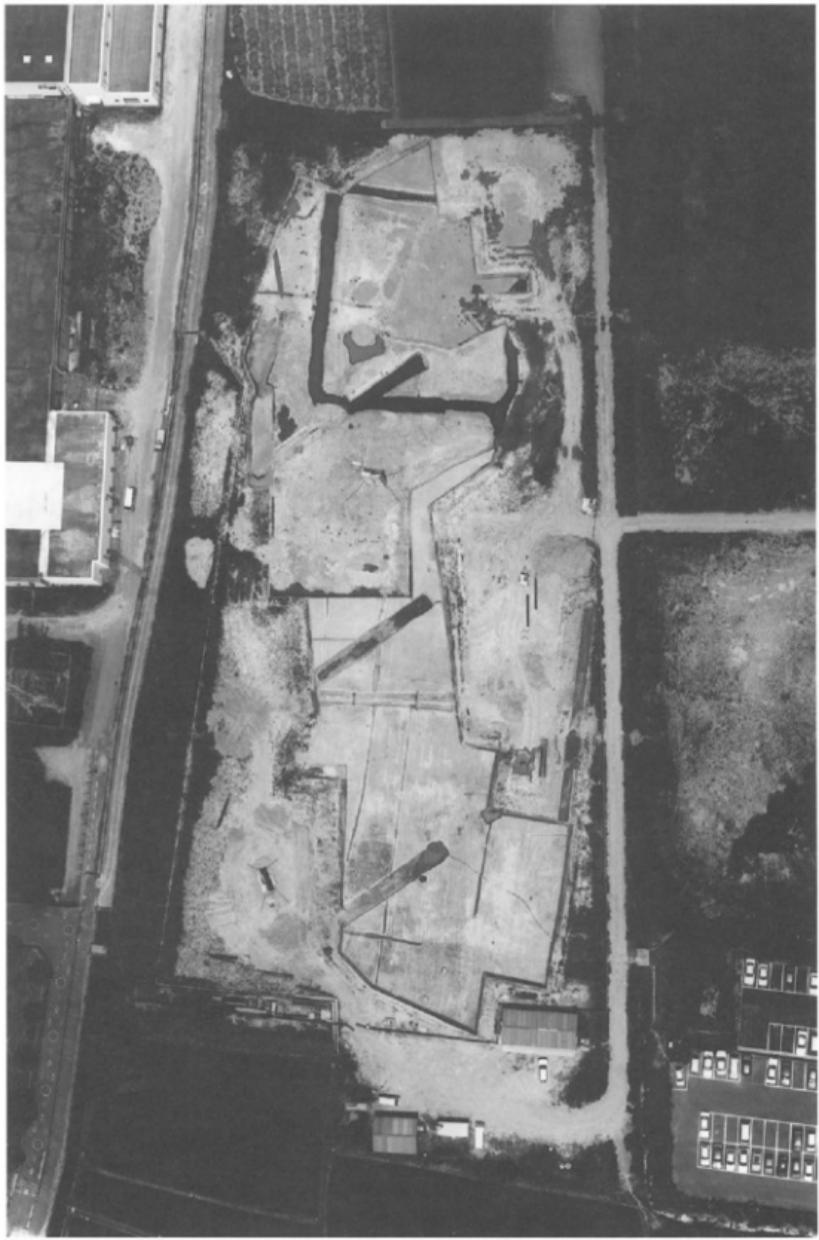
2) 井戸1003断面



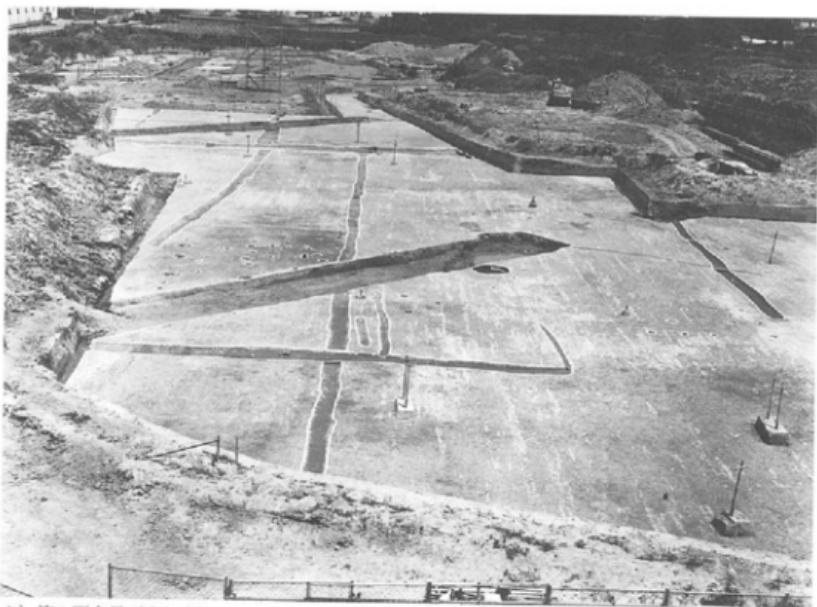
1) 井戸1004検出状況



2) 同 断割状況



第1面 遺構全景（航空写真）



1) 第1面全景（南から）



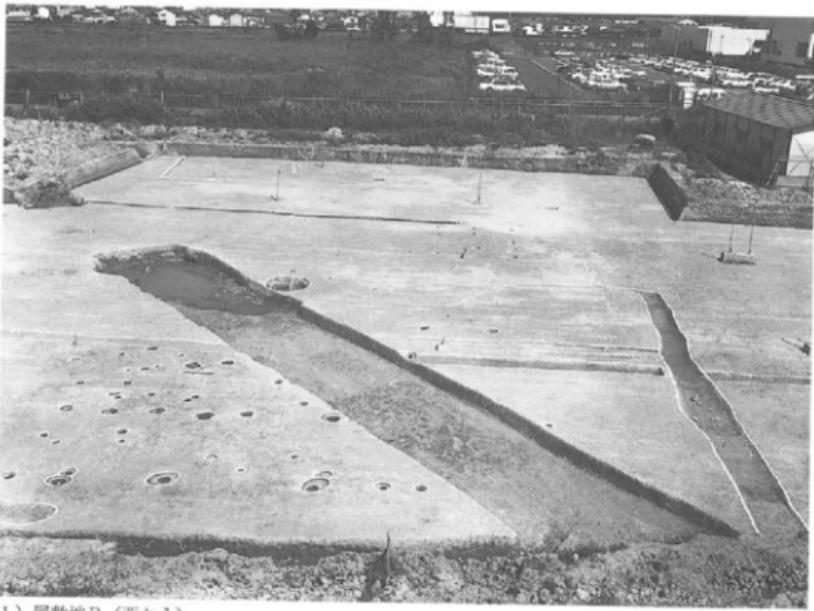
2) 第1面全景（北から）



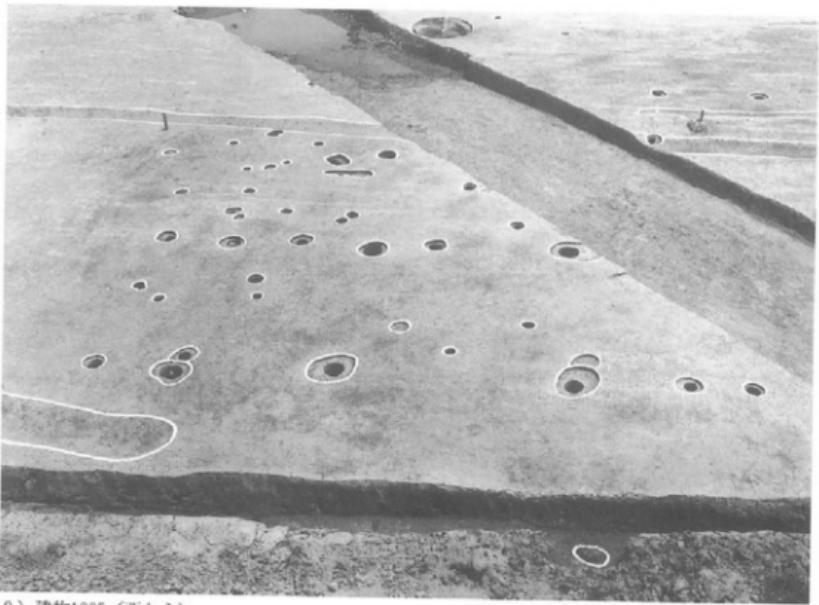
1) 屋敷地A周辺の状況（東から）



2) 屋敷地B及びその周辺の状況（北西から）



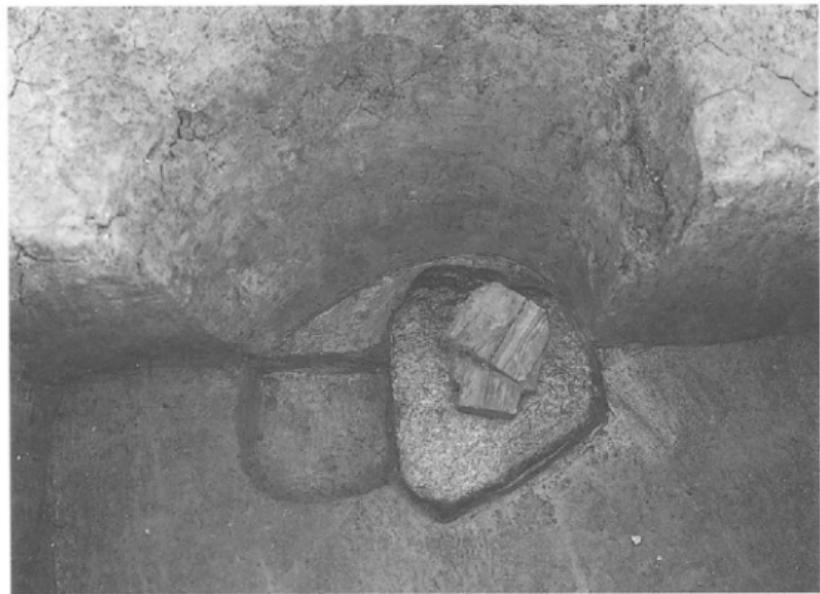
1) 屋敷地B（西から）



2) 建物1005（西から）

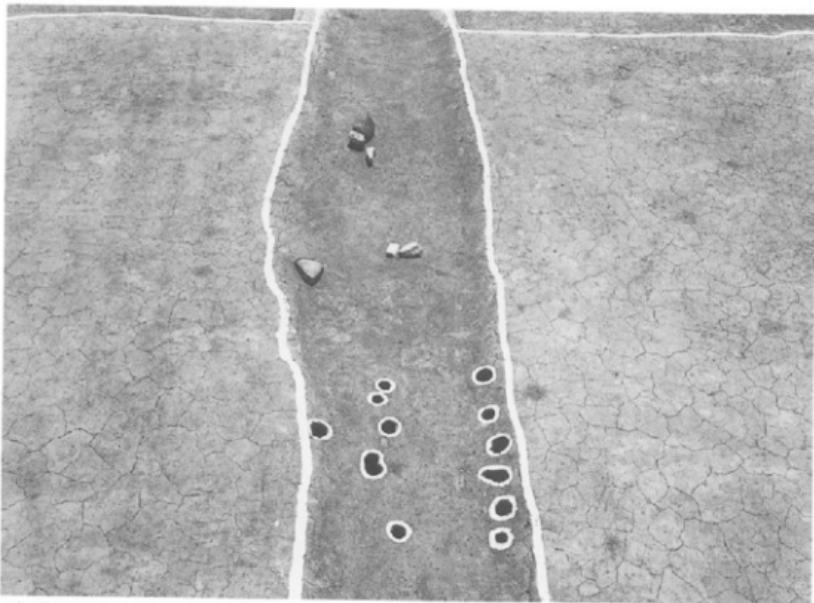


1) 建物1005柱穴の根石・礎板

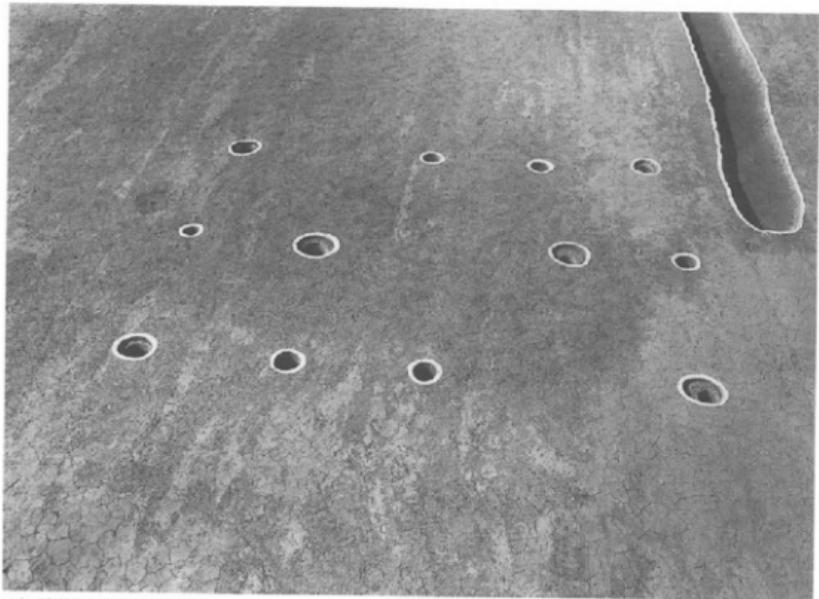


2) 建物1005柱穴の根石・礎板

図版二五 A地区（平成三年度）



1) 溝1011遺物・杭痕検出状況（西から）



2) 建物1006（東から）



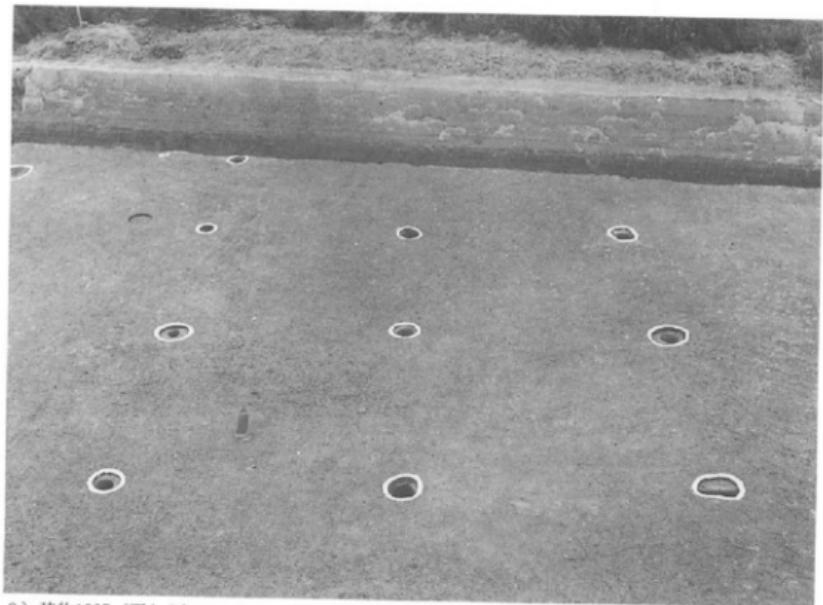
1) 昭和63年度調査区の第1面全景（北から）



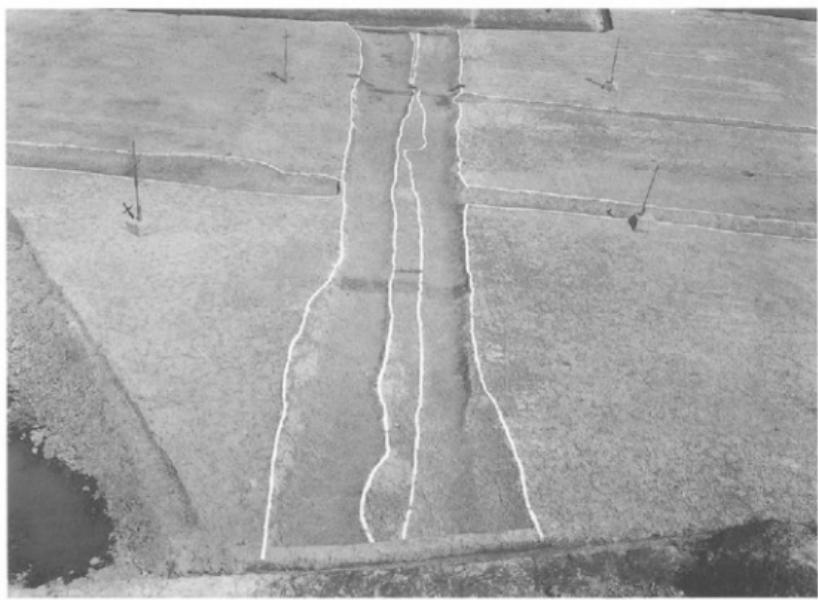
2) 井戸1005



1) 建物1007及び犁跡（北から）



2) 建物1007（西から）



1) 溝1013・溝1014 (西から)



2) 溝1016 (北から)



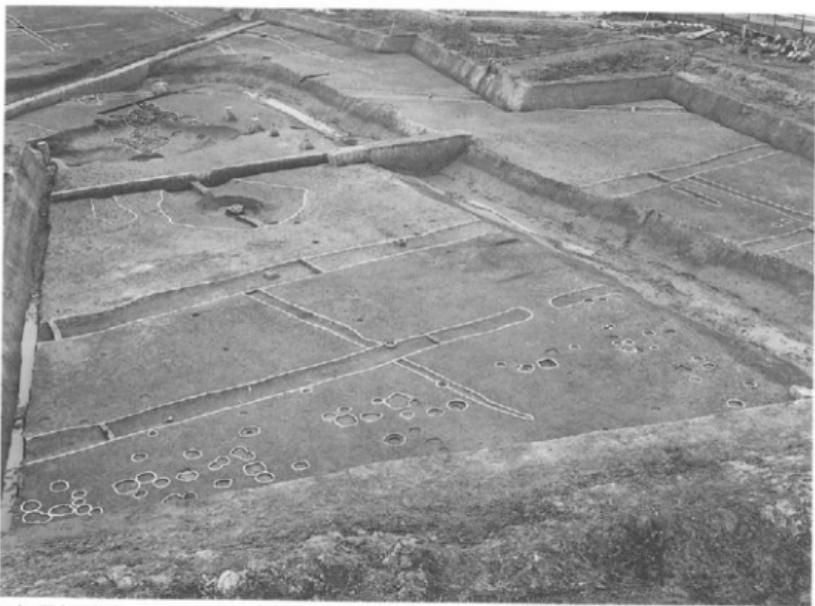
第2面全景（航空写真）



1) 第2面全景（北から）



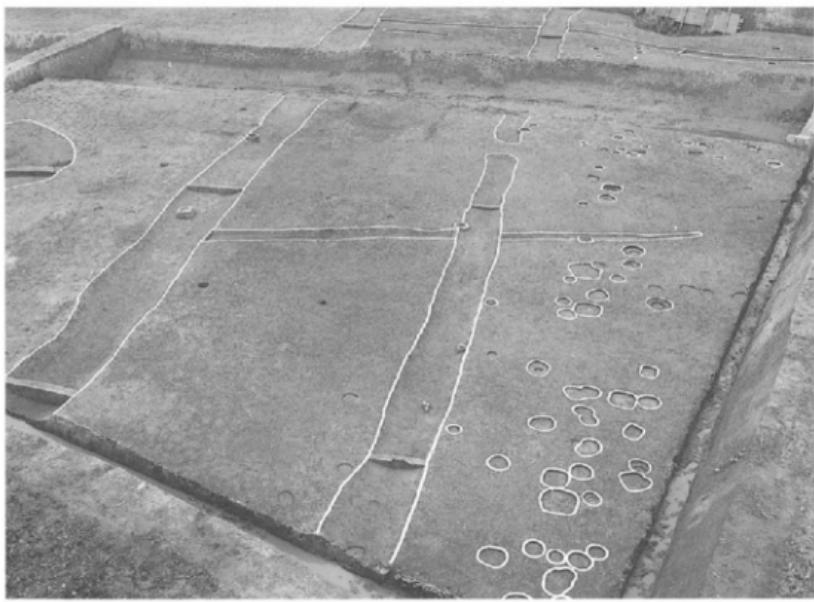
2) 第2面全景（南から）



1) 調査区北半の第2面検出遺構（北東から）



2) 同（南から）



1) 溝2003・2004及び柱穴群(東から)



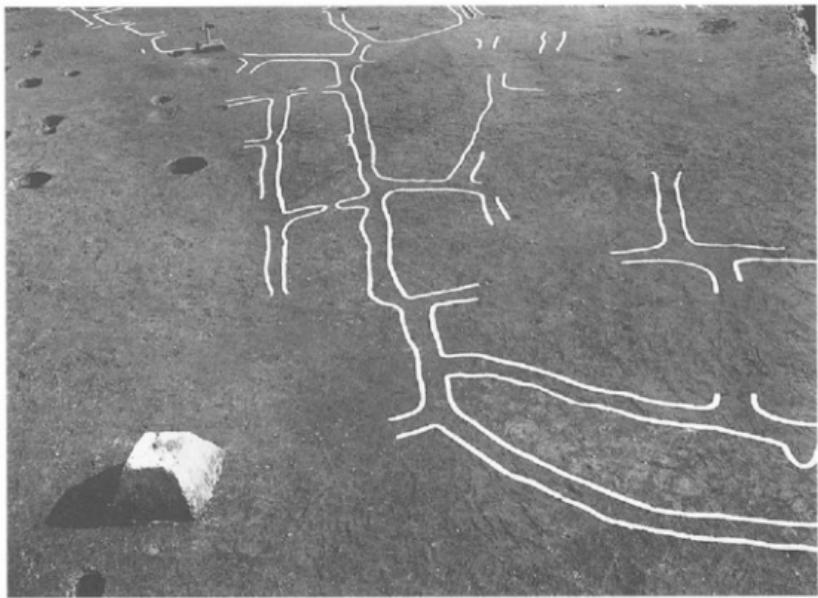
2) 溝2001・2002・2013(北から)



1) 第3面検出の水田（調査区北東半）



2) 溝3001・3002及び水田



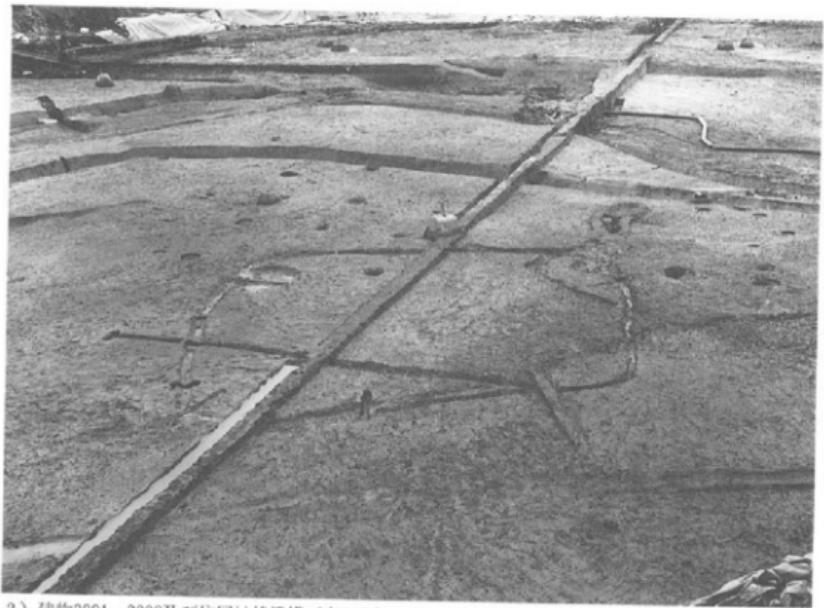
1) 第3面検出の駄畠状遺構



2) 溝3001・3003



1) 調査区南半第3面（西から）



2) 建物3001・3002及び住居址状遺構（南から）

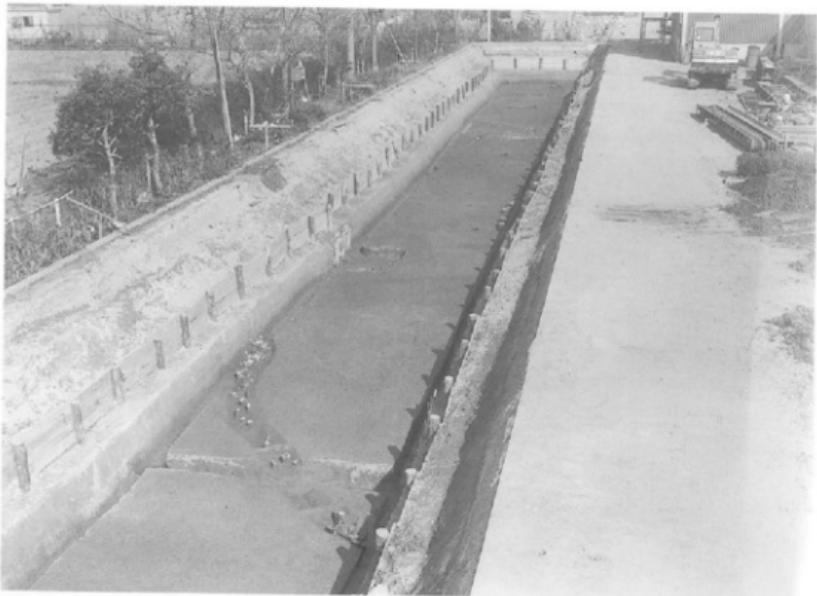
図版三六 B地区（平成二年）



B1・2地区全景（航空写真）

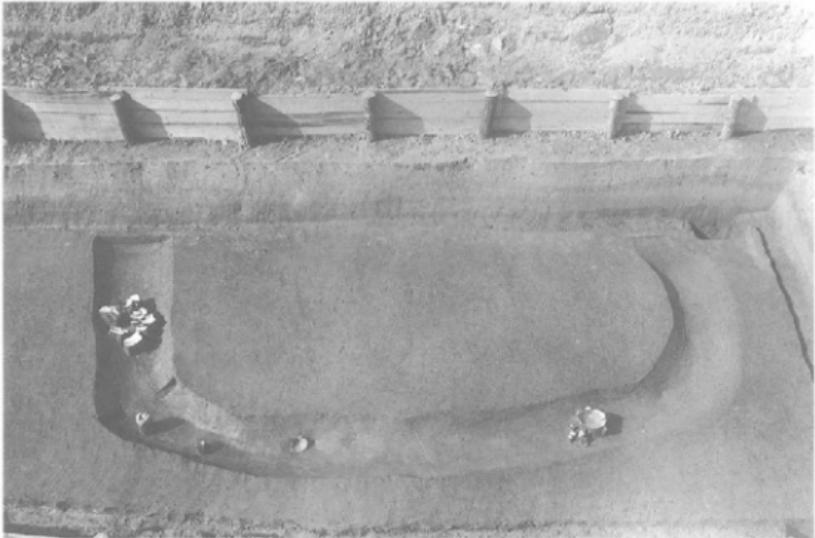
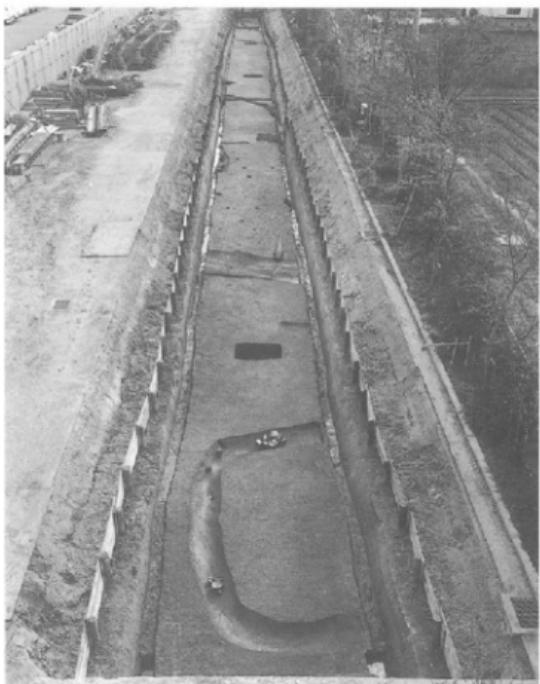


1) 調査区南半第1面（北東から）

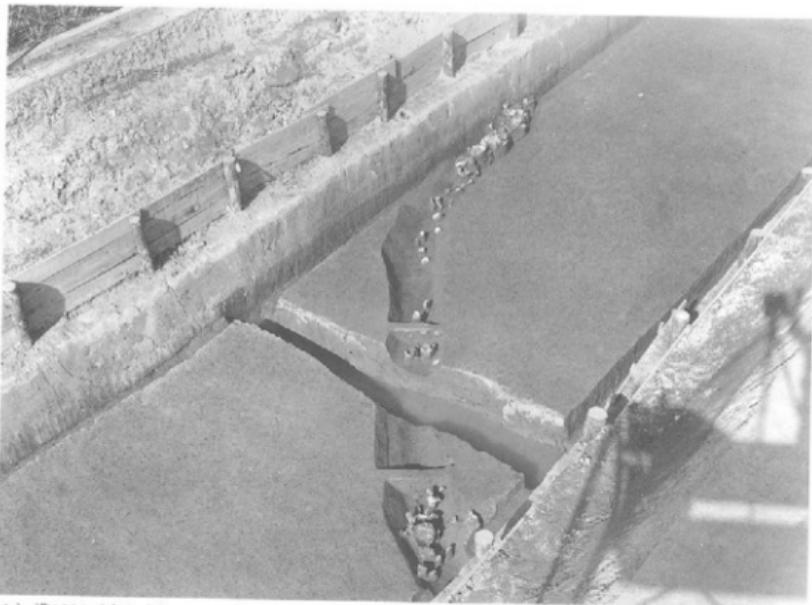


2) 調査区南半第1面（南から）

1) 第1面全景（北から）



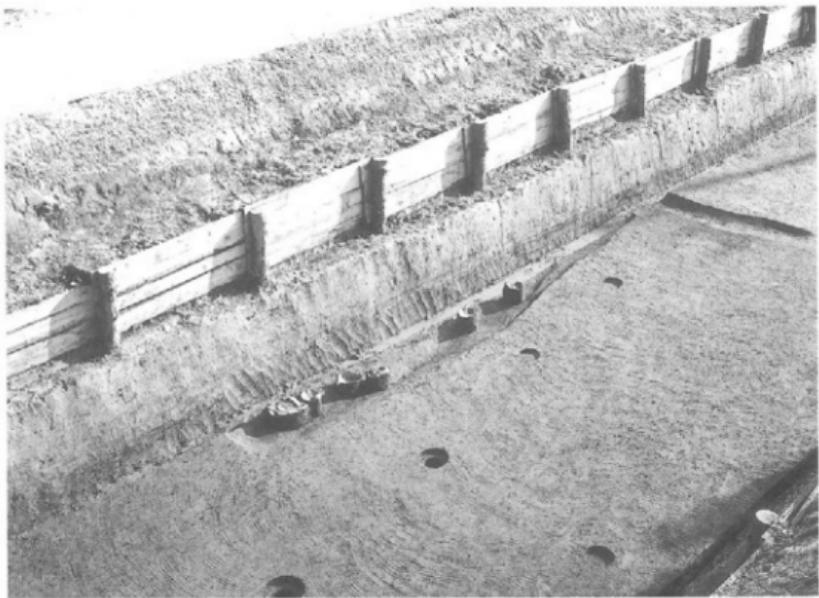
2) 方形周溝墓状遺構（溝1008）



1) 溝1004（南から）



2) 溝1004土器検出状況



1) 溝1006（北西から）



2) 建物1002（東から）



2) 第2面水田（南半）



3) 壺埋置状況 4) 第2面水口
5) 第2面水田（北西から）



1) 第3面（南から）



2) 第3面（北から）



3) 第3面水口



1) 第4面（南半）



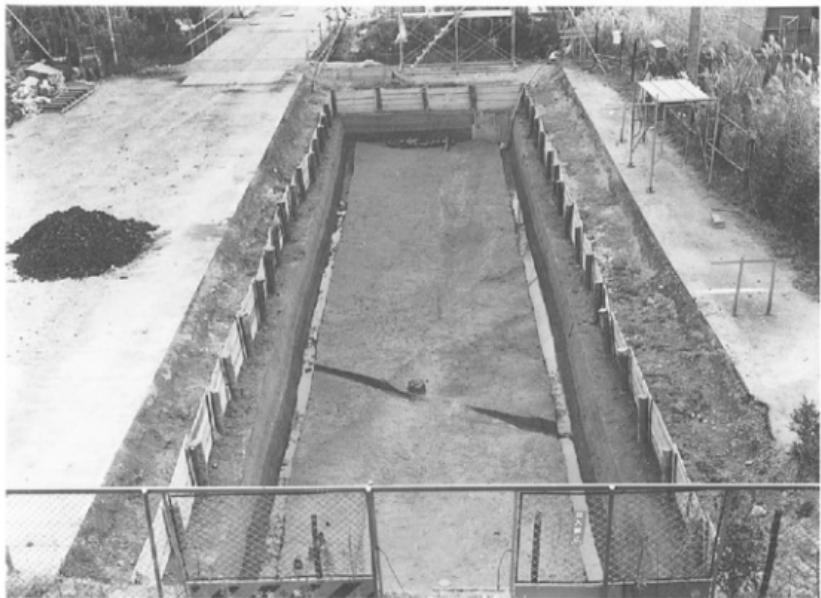
2) 第4面（南から）



3) 土壌1001



4) 瓦群の土器埋置状況



1) 調査区全景(南から)

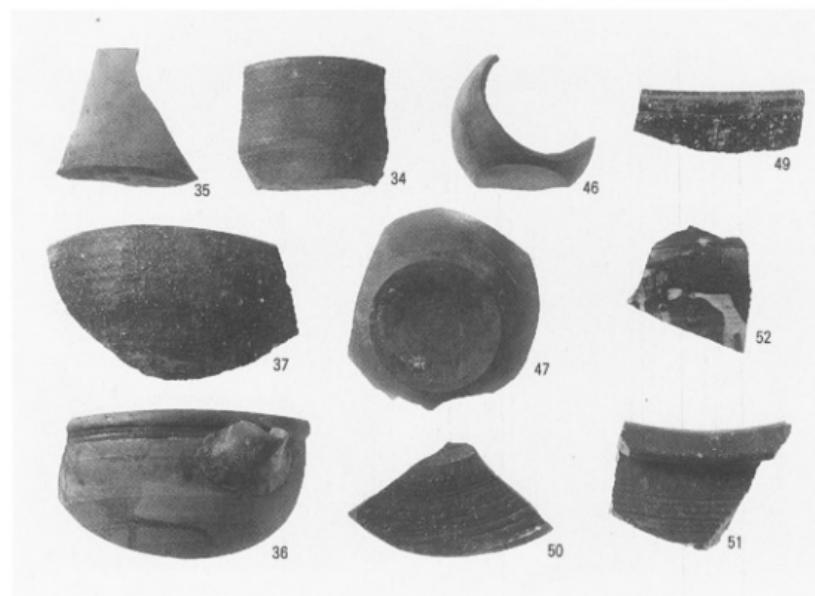
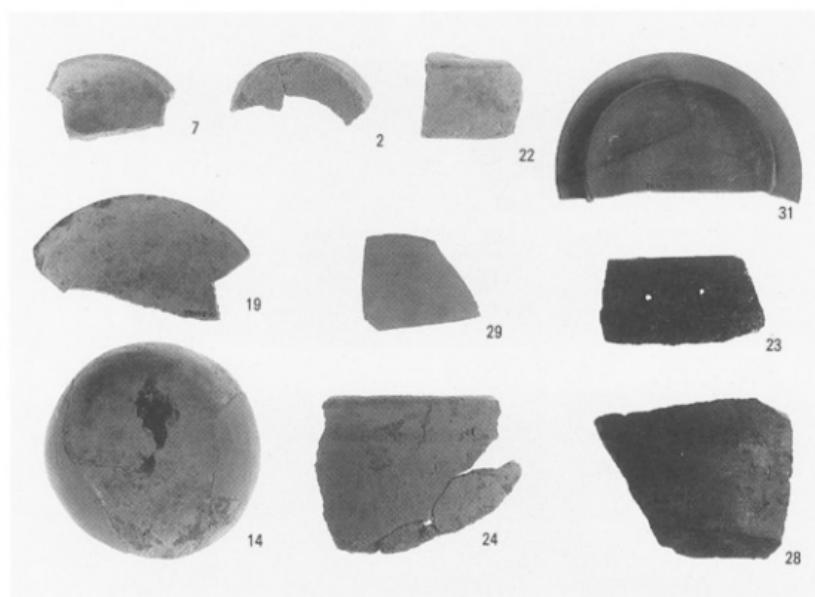


2) 土器検出状況

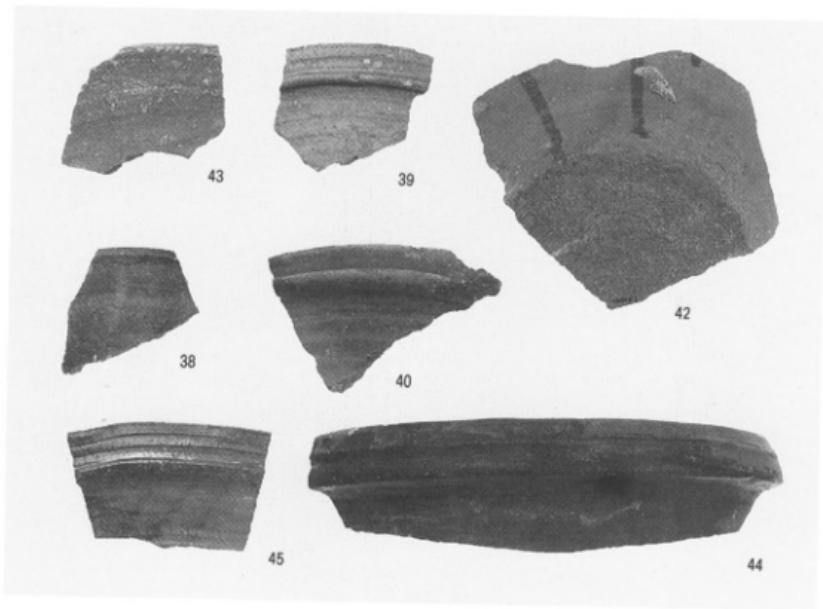
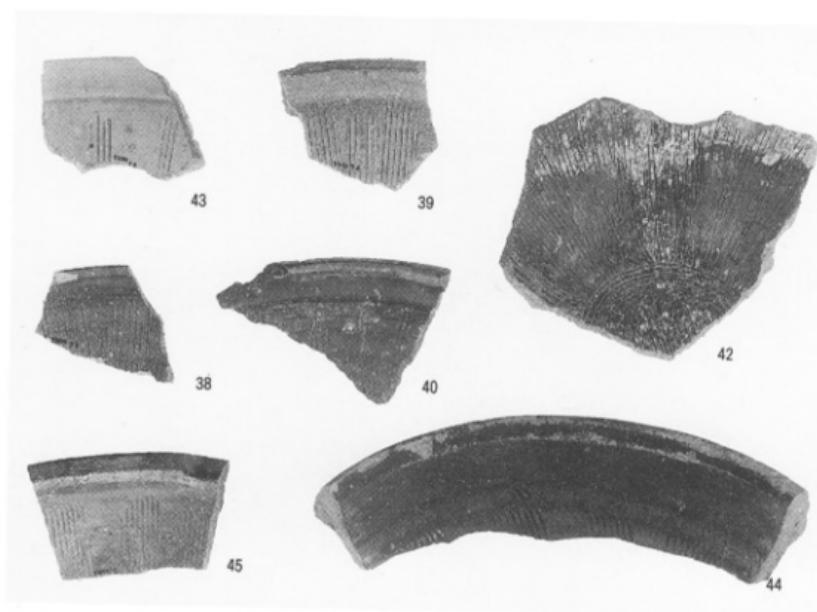
図版四五 A 地区遺構出土の土器（溝 100）



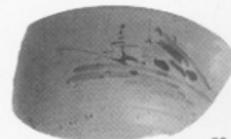
図版四六 A地区遺構出土の土器(溝一〇〇)



図版四七 A地区遺構出土の土器（溝一〇一）



図版四八 A 地区出土の土器 (溝一〇〇)



53



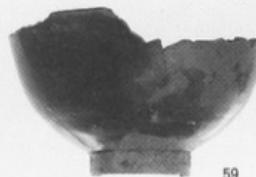
60



65



57



59



66



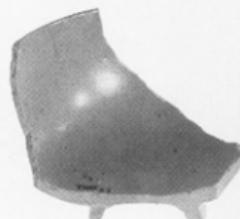
53



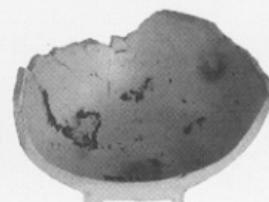
60



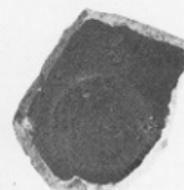
65



57

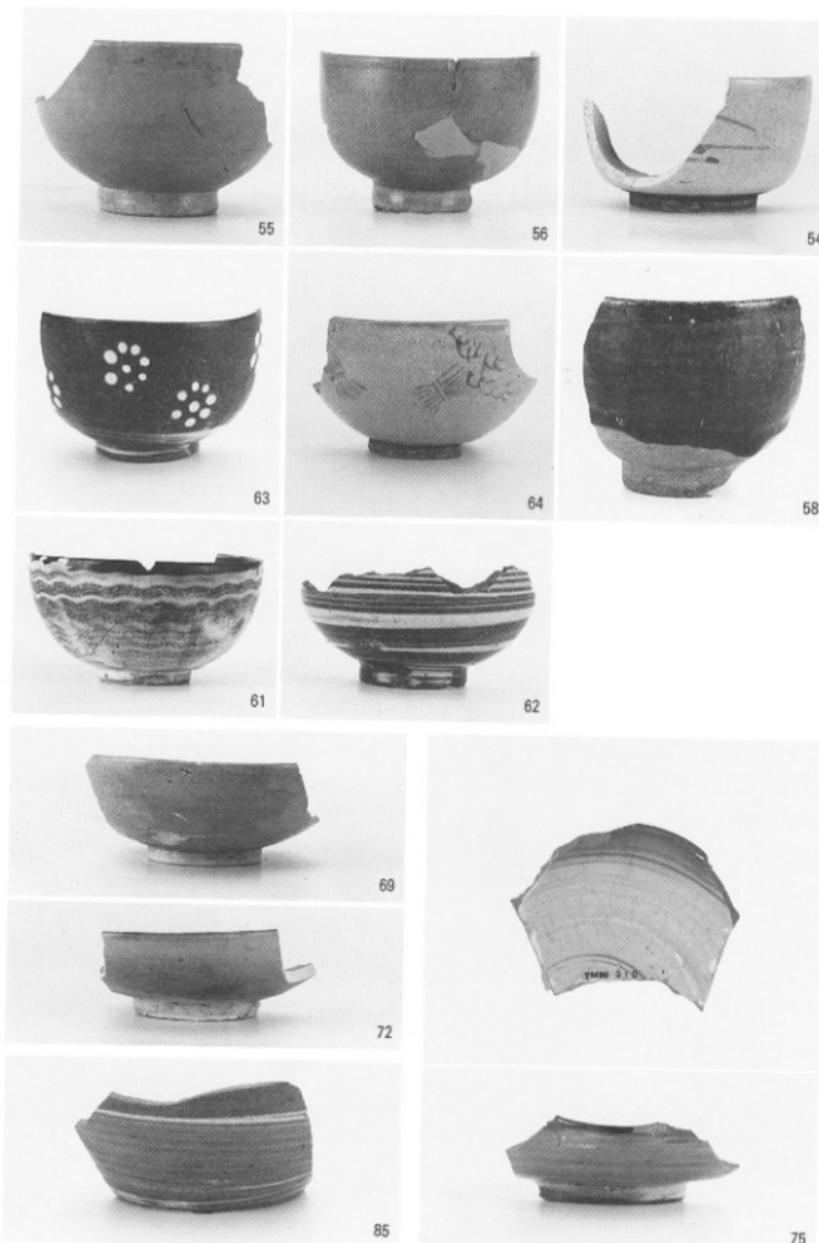


59



66

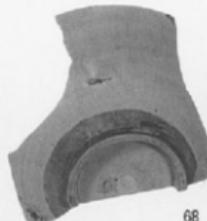
図版 四九 A 地区遺構出土の土器 (海 1001)



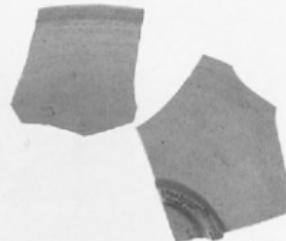
図版五〇 A地区遺構出土の土器（溝1001）



67



68



74



73



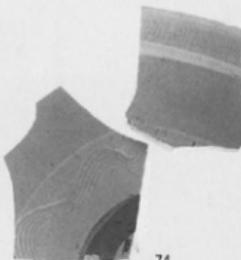
76



67



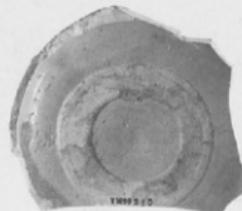
68



74

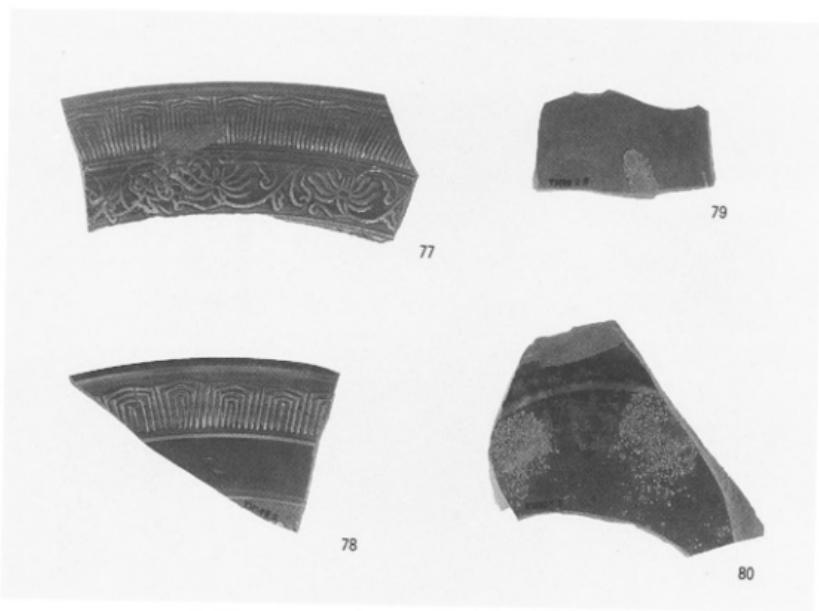
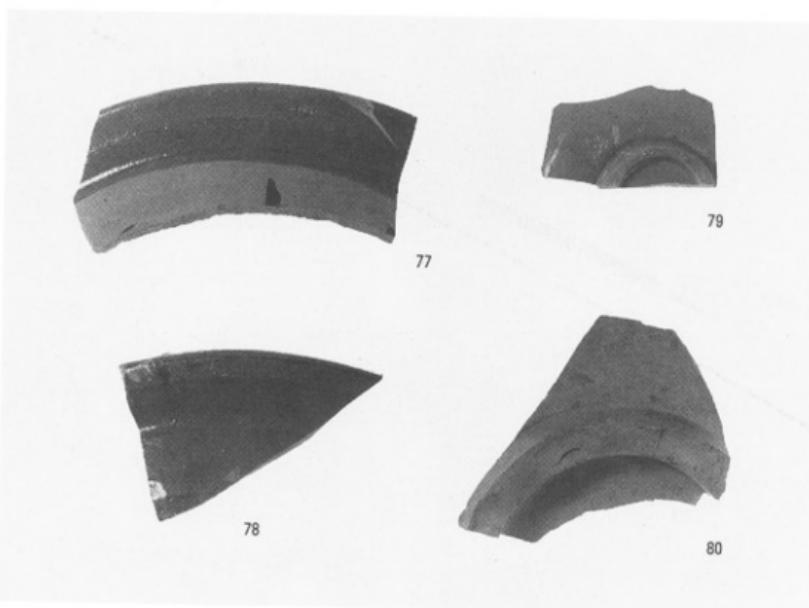


73

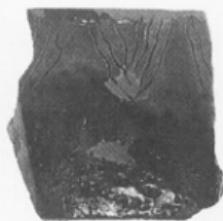


76

図版五一 A地区遺構出土の土器（溝一〇〇一）



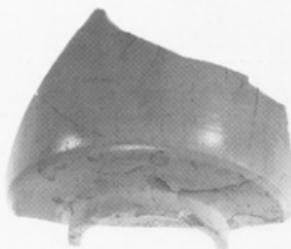
図版 II-A 地溝出土の土器(溝)(100)



84



83



81



82



86



99



98



105

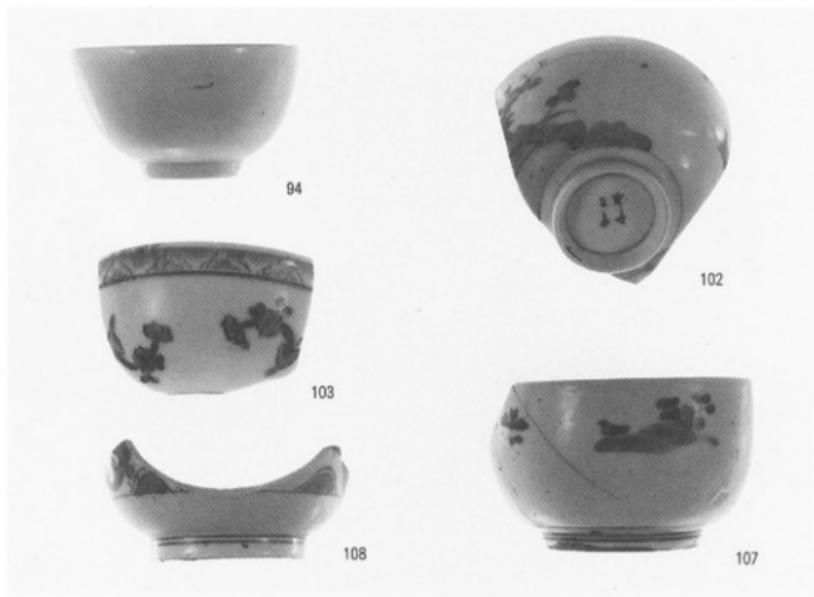
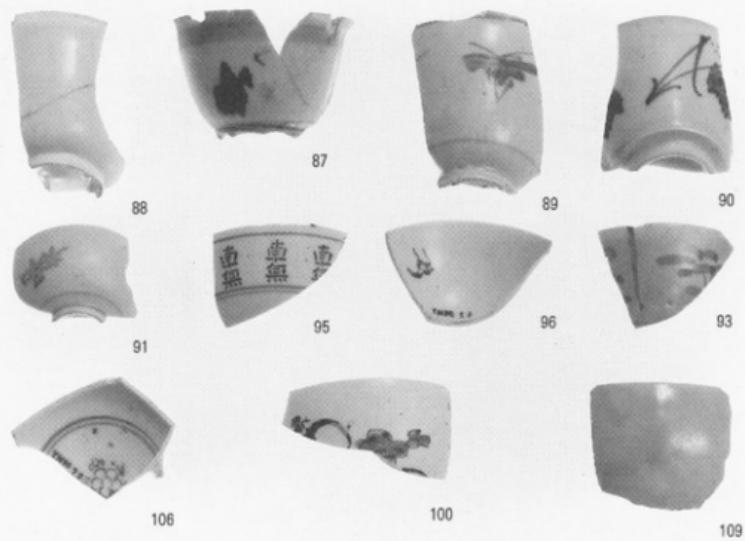


101



104

図版 五三 A 地区遺構出土の土器（溝一〇〇一）



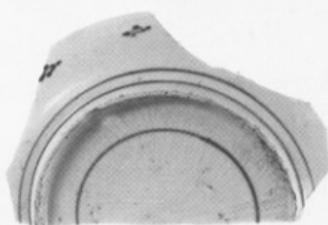
図版五四 A地区遺構出土の土器（溝一〇〇）



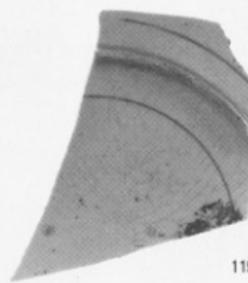
110



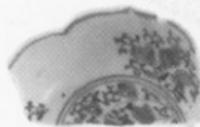
113



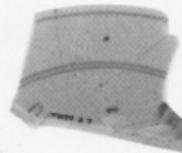
114



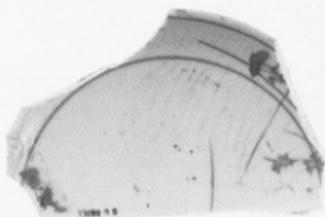
115



110



113

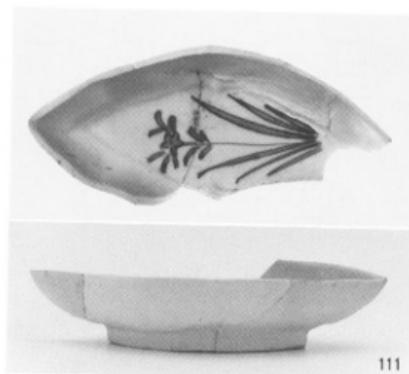


114

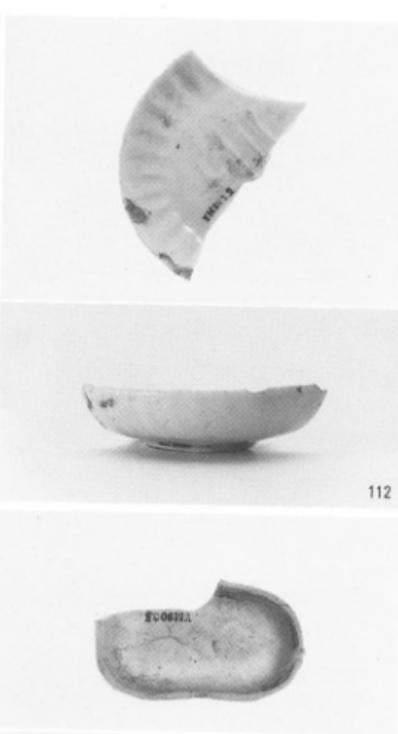


115

図版五五 A 地区遺構出土の土器（溝100）



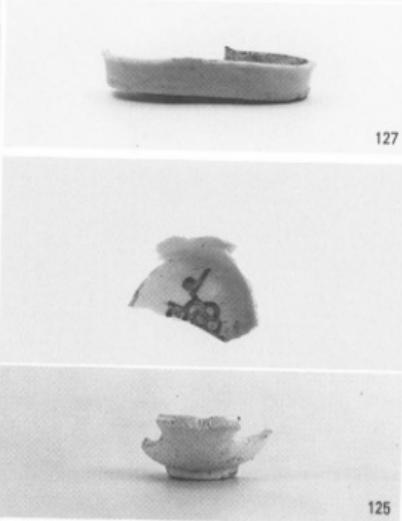
111



112



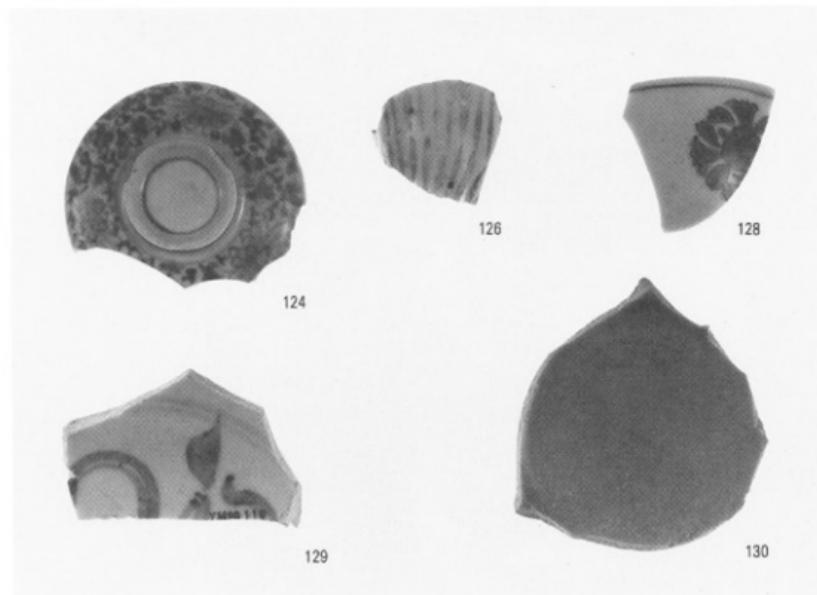
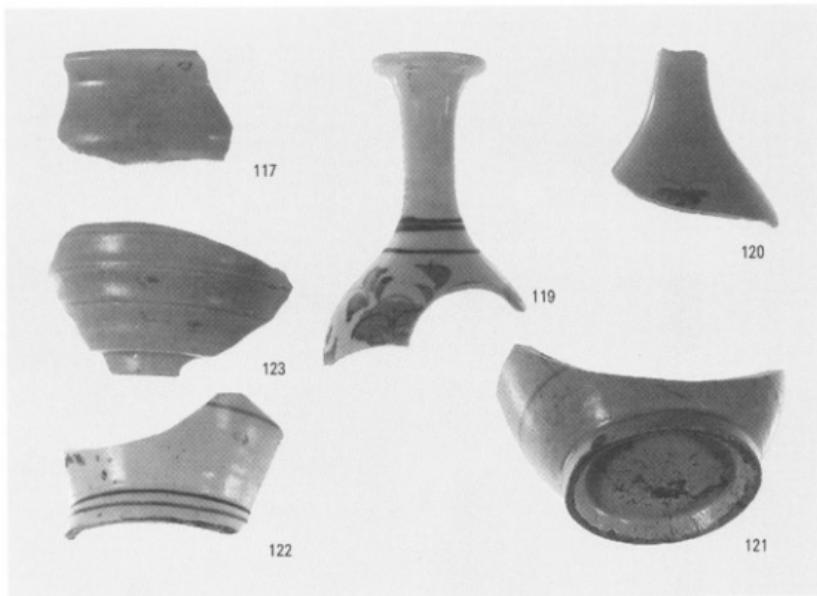
116

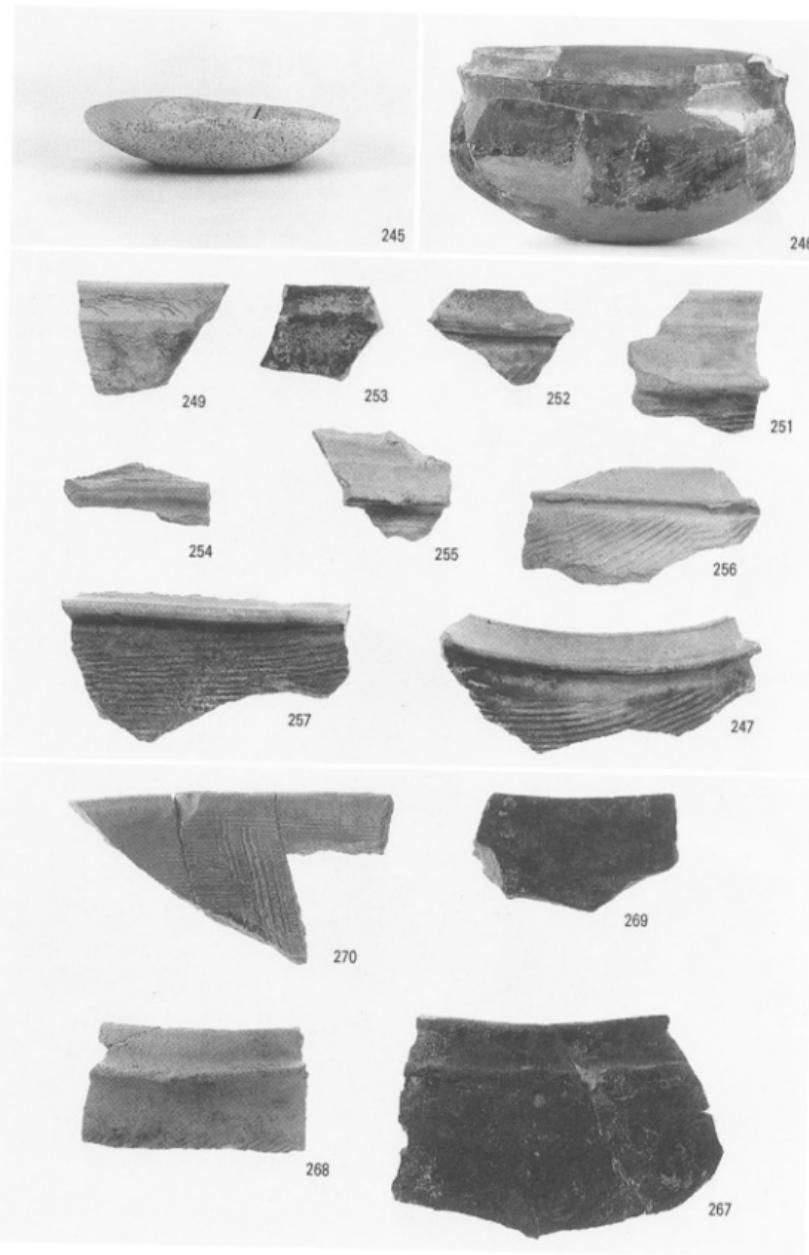


125



118

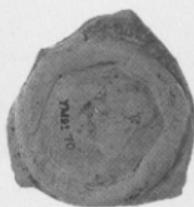




図版
五八 A 地区遺構出土の土器（溝一〇〇一・溝一〇〇四）



258



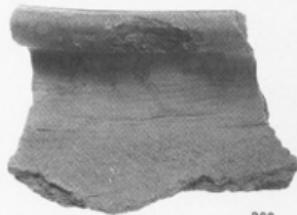
259



260



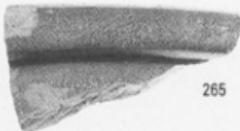
261



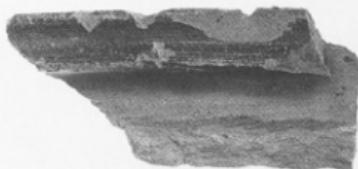
262



264



265



263



266



271

図版
五九 A 地区遺構出土の土器（柱穴・土壤・井戸・集石遺構）



274



275



279



278



301



287



316

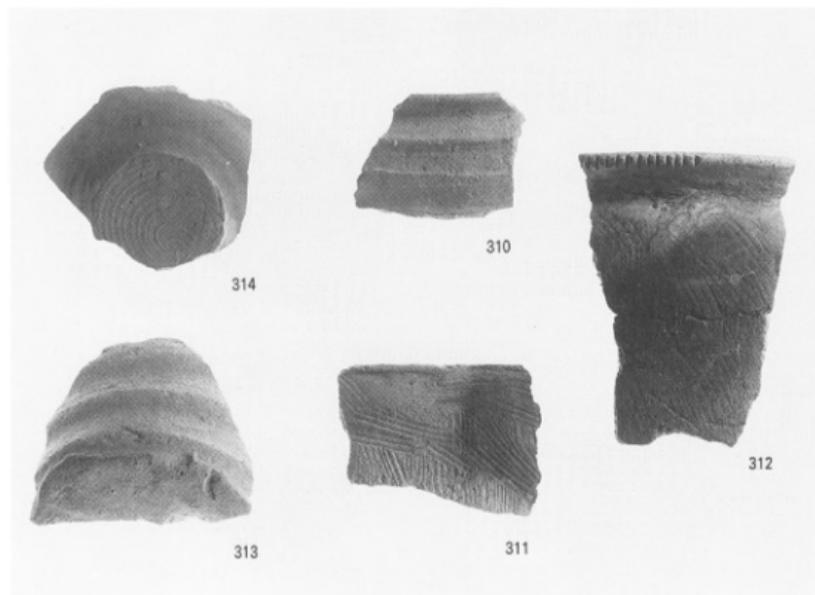
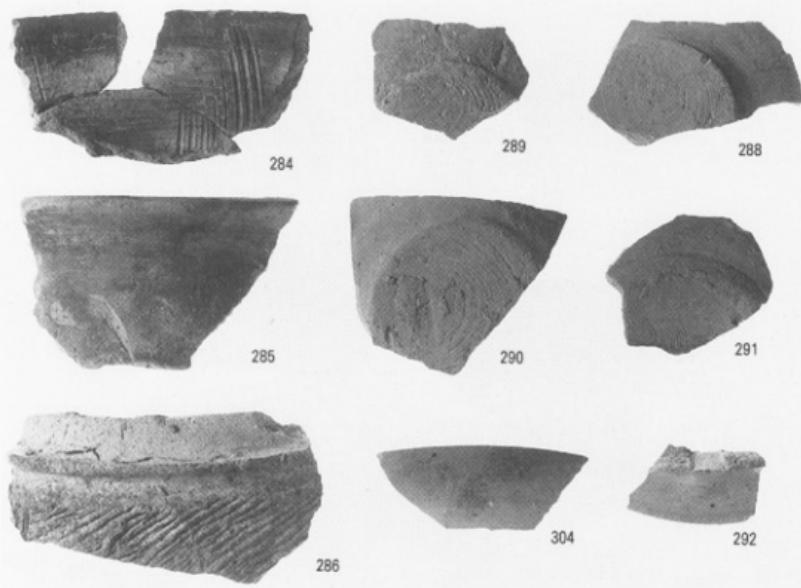


280

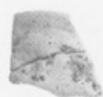


303

図版六〇 A地区遺構出土の土器（井戸・集石遺構）



図版六一 A地区遺構出土の土器(溝一〇一・溝一〇〇六・溝一〇〇三)



318



319



320



322



323



321



324

図版六二 A地区包含層出土の土器



326



328



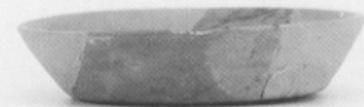
329



333



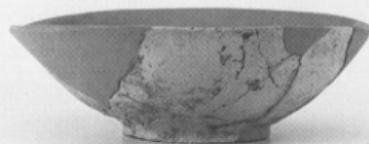
330



394



335



338



343



349

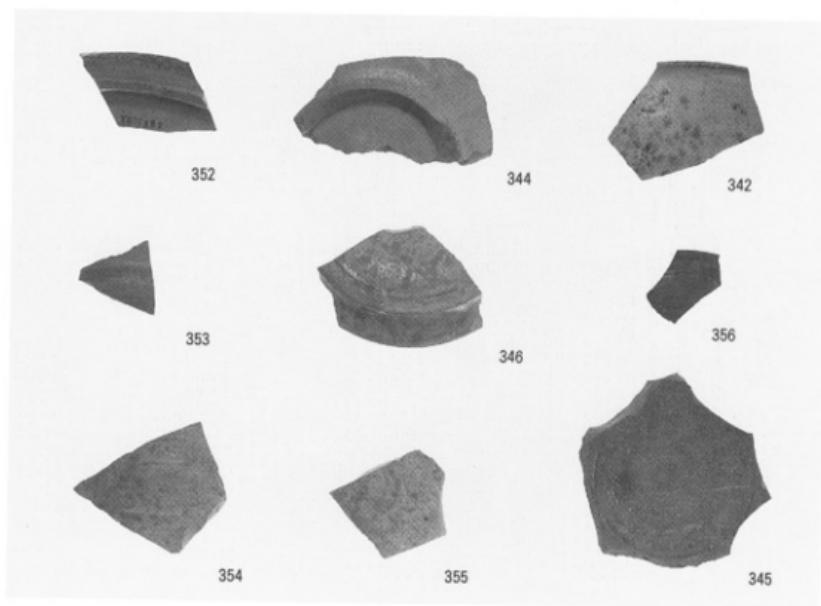
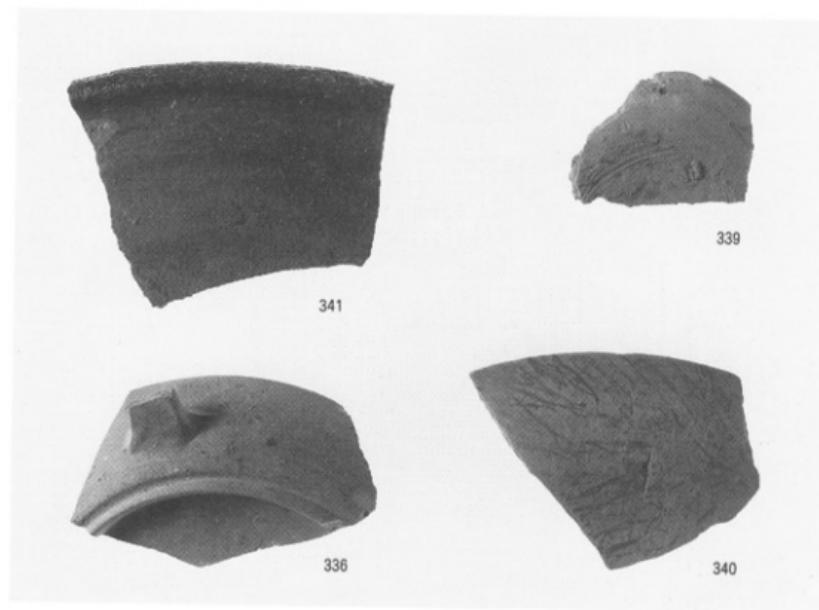


350

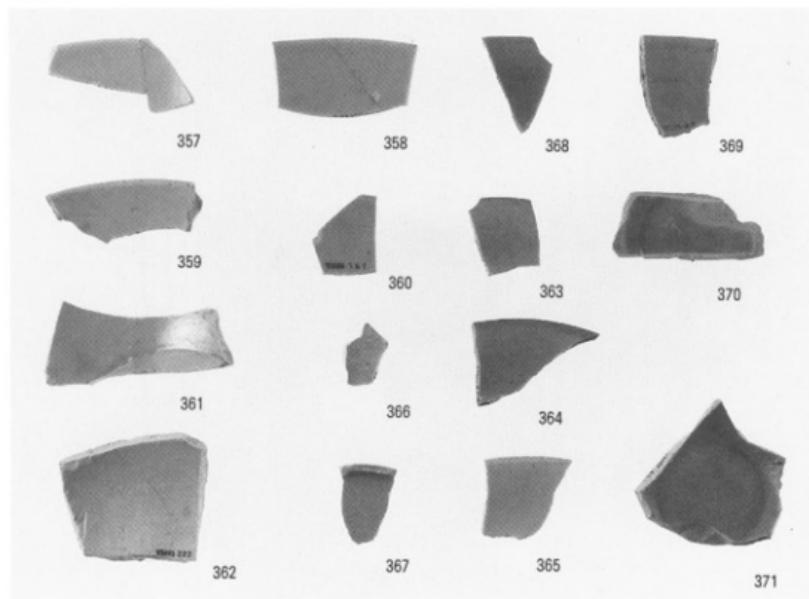
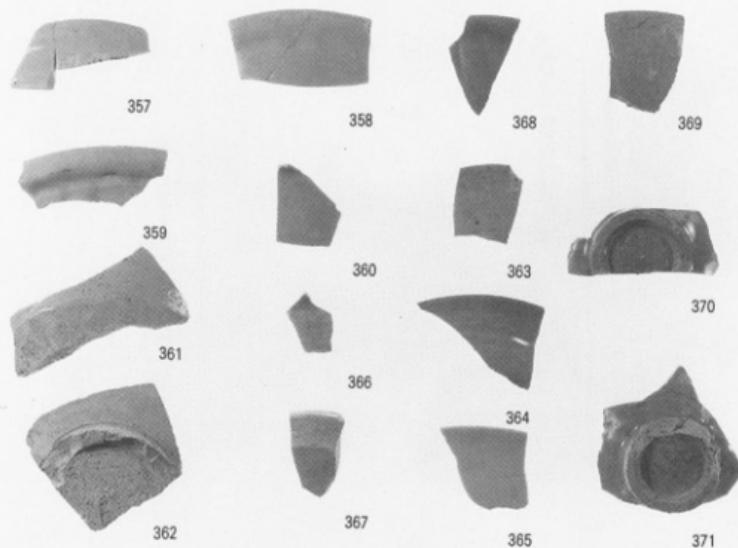


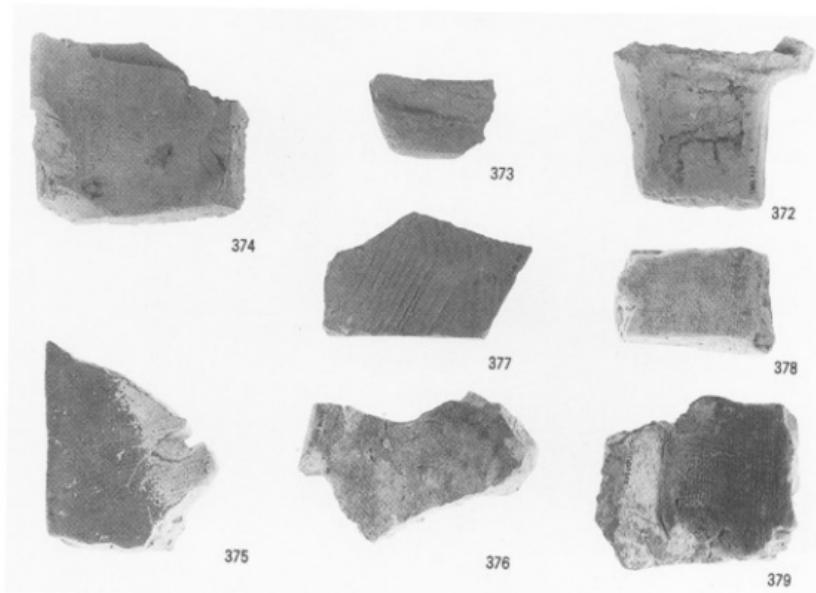
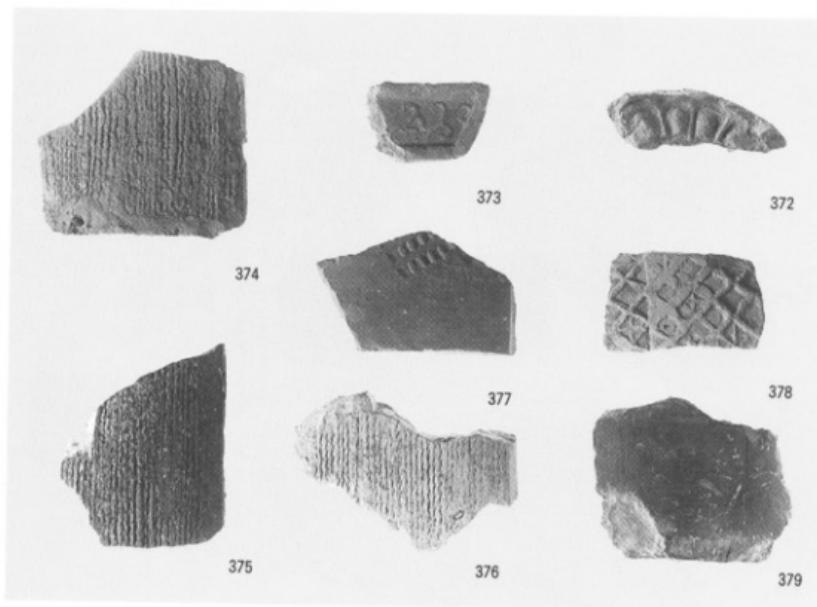
351

図版六三 A 地区包含層出土の土器



図版六四 A 地区出土の輸入磁器





図版六六 A 地区出土の埴輪・B 地区包命層出土の磁器・石鍋



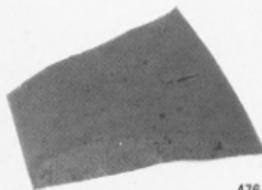
347



348



473



476



475

図版 六七 B 地区遺構出土の土器 (清一〇〇四)



423



428



430



429



436



441



443



442



448



450



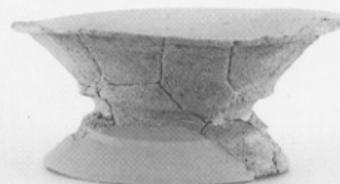
451



452



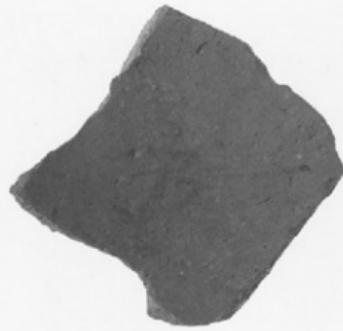
454



458

図版 六九 A・B 地区遺構出土の土器





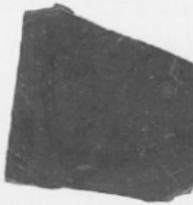
391



395



392



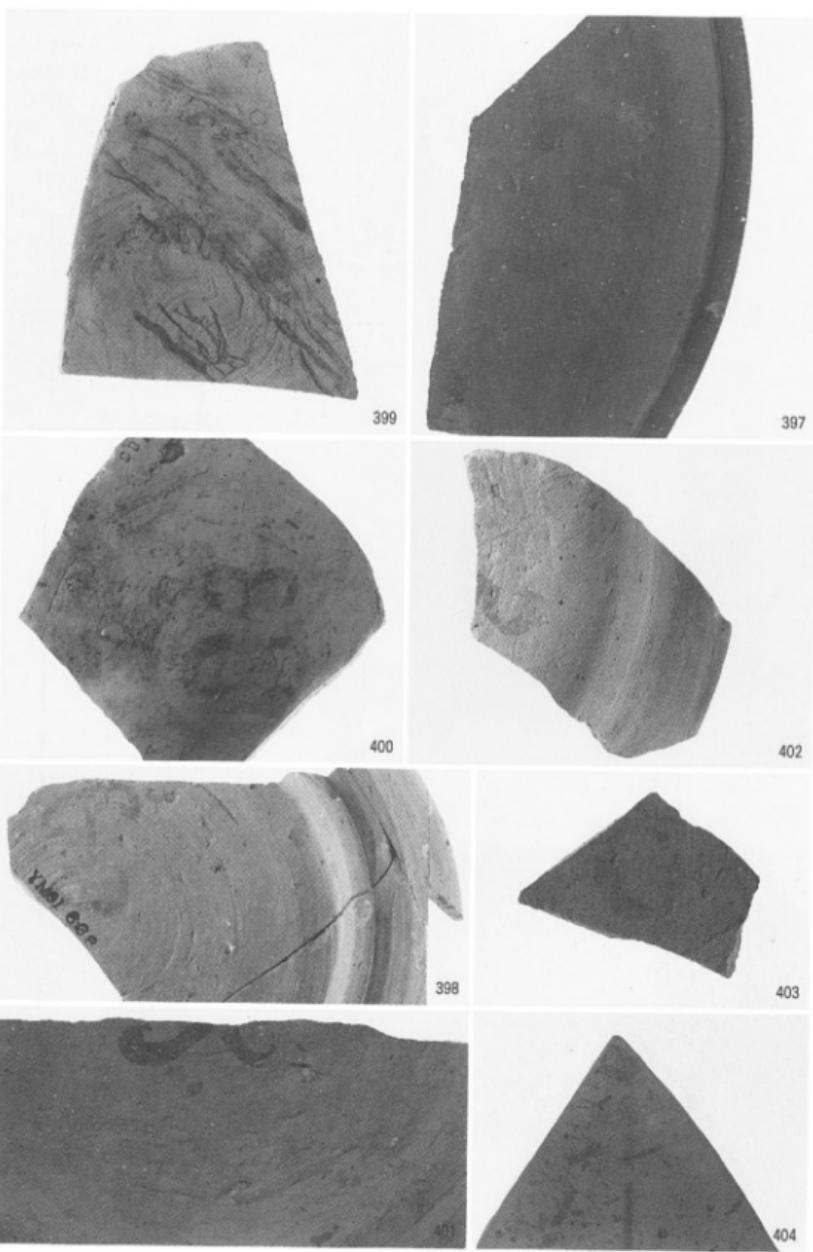
396



394

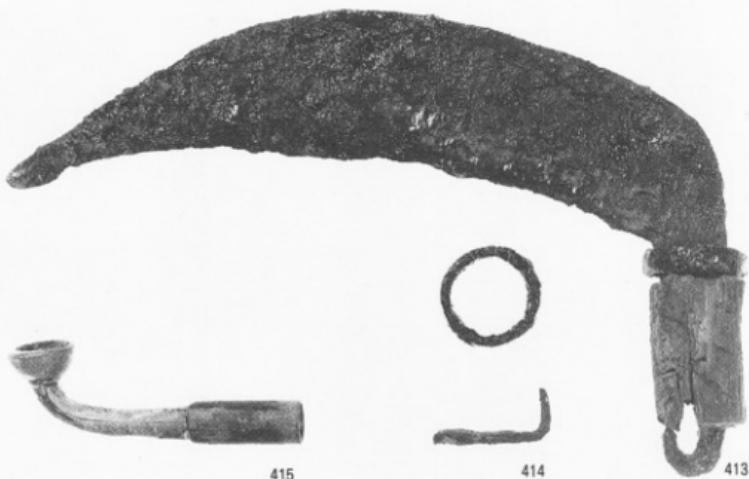


393



図版
七二 土錘・石製品





図版七四 木簡 (一)



131



132



133



137



134



135



136



138



139



140



141



142

143



143



144



144



147



145



148





149



150



155



151



153



156



157



158 160



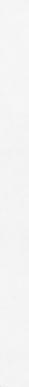
160



161



162



163



164



165



167



168



169



170



171



175



178



177



179



180



178



185



182



188



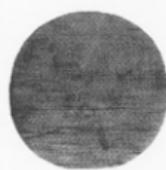
193



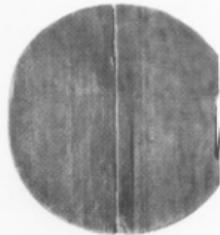
192



191



184



186



187



200



201



205



203



197



204



206



211



209



210



207

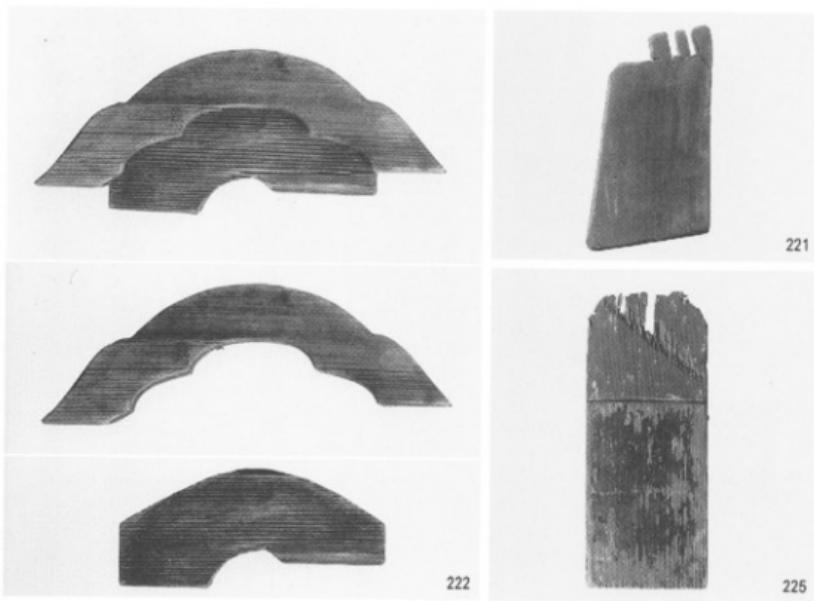
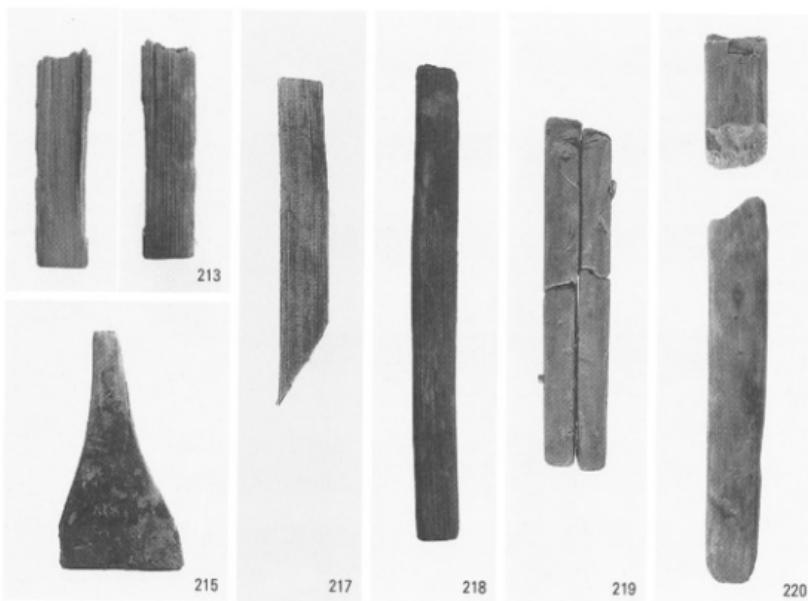


208



212

図版
七九 木製品 (四)





228



229



230



231

233



234



235



236



237



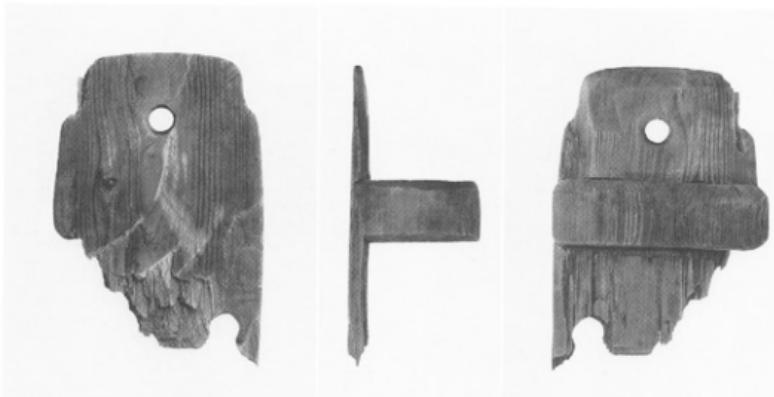
238



239



図版八一 木製品 (二六)



240



241



242

243

244



276



276



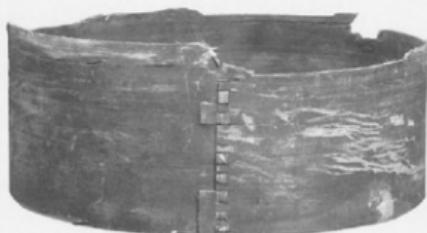
277



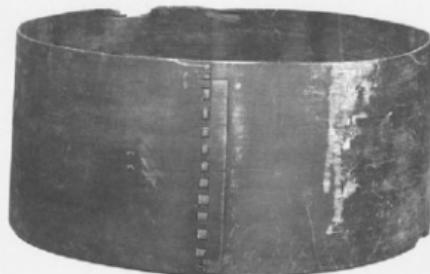
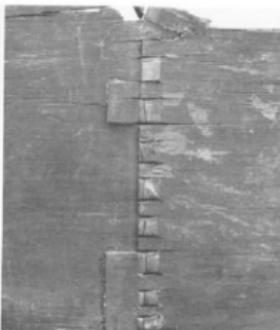
281



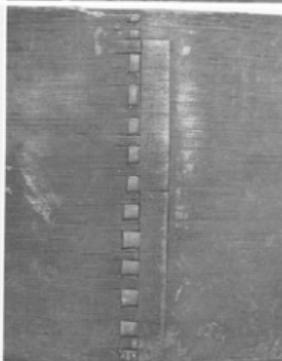
282



298



299



300





295



296



302

圖版 八五 木製品 (一〇)



317



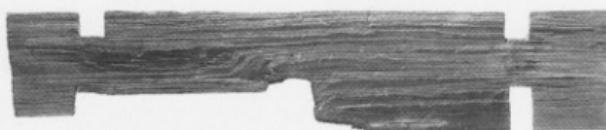
305



306



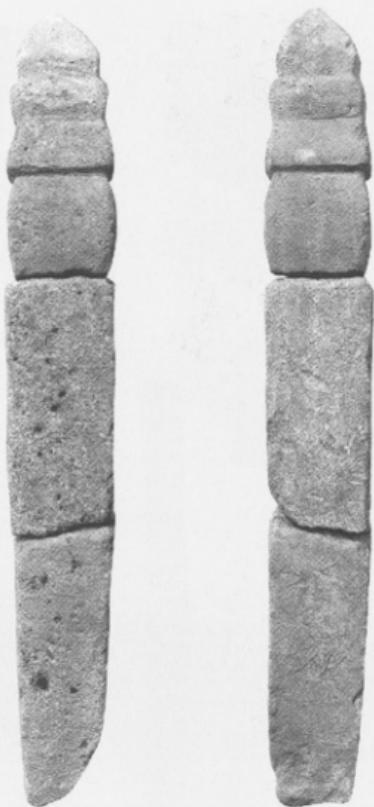
307



308



309



兵庫県文化財調査報告書第149冊
1995年3月31日 発行

吉田南遺跡(足田地区)・北王子遺跡

-県立看護大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

編集 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078)531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078)341-7711

印刷 株式会社岸本印刷所
〒676 高砂市米田町米田400-1
TEL (0794)32-0123